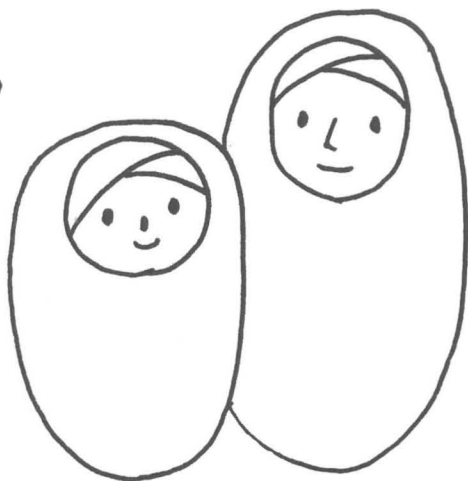


教会学校教案誌

2011.10.11.12月号



しかし、イエスは女に言われた。
「あなたの信仰が、あなたを救ったのです。
。安心して行きなさい。」 ルカ7章50節



No.43

日本キリスト改革派教会
中部中会日曜学校委員会

2011年10～12月カリキュラム（第43号）

—救済史に基づく二年サイクルカリキュラムの一年目—

月 日 教会暦・行事	主 題	聖 書 箇 所	暗 唱 聖 句
	単 元 の 目 標		
10月2日	回復の約束	イザヤ35章	マタイ11:5, 6
	キリスト預言 (35:5－6)。神が来られる。神の約束に希望をおいて生きよう		
10月9日	解放の告知	イザヤ61:1－4	ルカ4:21
	キリスト預言 (61:1)。神がキリストにおいて語られる福音の慰めに生きよう		
10月16日	新しい契約	エレミヤ31:31－34	エレミヤ31:31
	新しい契約がキリストにおいて成就した。キリストの内住の喜びに生きよう		
10月23日	主の日が来る	マラキ3:19－24	黙示録22:20, 21
	義の太陽として来られたキリストによる完成の日を待ち望もう		
10月30日 宗教改革記念	旧約の歴史を振り返る	詩編106編	ローマ3:23, 24
	旧約の歴史を振り返る。罪の歴史の中に神の憐れみの支配を見て賛美しよう		
11月6日	弟子の派遣	マタイ9:35－10:4	マタイ9:36
	主イエスの教えを聞き、主イエスと共に仕えて生きる弟子たちにならおう		
11月13日	主イエスによる平安	マタイ11:25－30	マタイ11:28
	主イエスのもとにある平安に安らぎ、主イエスの使命を共に担おう		
11月20日	「天の国」のたとえ	マタイ13:44－52	マタイ6:20a
	天の国の価値を知り、それを喜び、それに満ち足りる生き方をしよう		
11月27日 アドベント	五千人の給食	マタイ14:13－21	ヨハネ6:35
	天の国の成就がここにある。主イエスによってもてなされていることを知ろう		
12月4日 アドベント	カナンの女の信仰	マタイ15:21－28	マタイ15:27
	神の愛とありあまる恵みを信じて疑わない信仰の姿を学ぼう		
12月11日 アドベント	わたしたちの間に宿られた神	ヨハネ1:14－18	ヨハネ1:14
	わたしたちの間に宿られた神。当時も今もいつまでも。神をほめたたえよう		
12月18日 アドベント	ヨセフへの告知	マタイ1:18－25	マタイ1:23
	ヨセフの信仰の姿勢に学び、インマヌエルの実現を喜ぼう		
12月25日 降誕祭	東方の学者たち	マタイ2:1－12	ヨハネ3:16
	神に導かれた学者たち。偶像礼拝から離れ、キリストに導かれて旅をしよう		

も く じ

2011年10・11・12月カリキュラム

まえがき	山中雄一郎	4
巻頭説教	塩田隆良	5
日曜学校・教会学校訪問		
銚子栄光教会付属萌保育園の紹介	小林義信	9
特別寄稿 第2回東部中会教会教育研修会		
「託されている祝福と責任」		
基調講演	鈴木牧雄	13
発題 (1)	北岡修二	16
副読本のご案内		19
自由募金のお願い		20

聖書研究・説教展開例・分級展開例

10月 2日	22
10月 9日	29
10月16日	36
10月23日	43
10月30日	50
11月 6日	57
11月13日	64
11月20日	71
11月27日	78
12月 4日	85
12月11日	92
12月18日	99
12月25日	106
小学科上級展開例の答えの参考	113

2012年1・2・3月カリキュラム

2011年度年間カリキュラム	115
執筆者よりひとこと・あとがき	116
	118

まえがき

山中雄一郎（板宿教会牧師）

西部中会では、毎年、小学生を対象として中会合同夏期学校が開かれています。中会内の賜物を結集した充実した集いです。

この夏期学校に今年、板宿教会から小学校5年生を先頭に5名の子供たちが参加することになりました。数年前まで参加生徒数はゼロで、日曜学校も開店休業に近い状態でしたから、5名の子供の参加は夢のような思いがします。

5名とも赤ちゃんのときから教会に出席し、教会の方々から大切にされて来ました。日曜学校の先生たちは、生徒がほとんどいない時も忍耐強く祈りと準備を続けて来られましたが、子供たちが与えられている今、毎週、熱心な奉仕を続けておられます。それ以外の会員も子供たちの存在を喜び、大切にしていますので、子供たちは伸び伸びとパワフルで、午後の時間まで教会での生活を楽しんでいるようです。大人たちの趣味の会である「絵手紙教室」に参加をしたり、小会にお茶を出す奉仕をしたり（その後子供たちはお菓子パーティーを楽しみます）、自分たちで考え出した遊びに大人たちを誘ったり、常時出席する子供たちは10名足らずと少数ですが、存在感は抜群です。教会の一員であるという気持や祈りの心など、信仰的な思いも次第に育っているように思います。

多くの教会にこのような大切な子供たちが与えられているのだと思います。自分たちが大切な存在とされていることを味わえば、多くの子供たちは教会を喜び、やがて主を喜ぶ思いへと導かれて行くのではないのでしょうか。「わたしの目にあなたは価高く、貴い」（イザヤ43:4）と神の民に言うてくださる主御自身の思いの一端が、教会の方々を通して子供たちに伝わるように願います。「体の中ではかよりも弱く見え

る部分が、かえって必要なのです」（コリントー12:22）との御言葉を読むときにも、子供の会員のことを思います。まだ、幼く弱い信仰の子供たちを教会に必要な存在として大切にしたいと思うのです。

そのように子供たちのことを思うにつけ、先行きの心配が心をよぎります。やがて中学生になった時、子供たちは同じように教会を喜び、信仰を成長させ、教会に集い続けるのでしょうか。信仰を芽生えさせてずいぶん早い時期に、信仰の試練の時が来ることに、不憫な思いもしますが、現実ですから仕方ありません。小学校を終えるまでに、少しでも信仰が確かにされるように、心から願っています。

最近、必要があって改革派教会の統計表を調べましたが、信仰告白者数（幼児洗礼を受けた人で適齢期に達して信仰告をした人の数）を数えたところ、2001年～2005年は163人、2006年～2010年は191人です。最近の5年がその前に比較して多いのはたまたまのことでしょうか。何か理由のあるよい傾向でしょうか。最近活発に行われている青年や高校生の信仰育成のため的大中会的取り組みの実りという面が少なからずありはしないか、とも思われています。

夏期学校に参加する子供たちが、中学生のときも教会と結ばれ続け、やがて高校生キャンプや青年の集いに参加をし、自らの信仰を明らかにし、後輩や友人の救いのためにも仕えるほどに成長するように願います。「わたしは植え、アポロは水を注いだ。しかし、成長させてくださったのは神です」（コリントー3:6）。自分のなすべき分を果たしつつ、成長させてくださる神様に期待し祈り続けたいと思います。

「だれが救われるのだろうか」

～マルコによる福音書10章23～33節による説教～

塩田隆良（東京恩寵教会協力牧師）

イエスは弟子たちを見回して言われた。「財産のある者が神の国に入るのは、なんと難しいことか。」弟子たちはこの言葉を聞いて驚いた。イエスは更に言葉を続けられた。「子たちよ、神の国に入るのは、なんと難しいことか。金持ちが神の国に入るよりも、らくだの針の穴を通る方がまだ易しい。」弟子たちはますます驚いて、「それでは、だれが救われるのだろうか」と互いに言った。イエスは彼らを見つめて言われた。「人間にできることではないが、神にはできる。神は何でもできるからだ。」ペトロがイエスに、「このとおり、わたしたちは何もかも捨ててあなたに従って参りました」と言いだした。イエスは言われた。「はっきり言うておく。わたしのためまた福音のために、家、兄弟、姉妹、母、父、子供、畑を捨てた者はだれでも、今この世で、迫害も受けるが、家、兄弟、姉妹、母、父、子供、畑も百倍受け、後の世では永遠の命を受ける。しかし、先にいる多くの者が後になり、後にいる多くの者が先になる。」

（マルコによる福音書10章23～33節）

はじめに

直前の箇所10章17～22節では、富める男が主イエスの許にやってきて、「永遠の命を受け継ぐには、何をすればよいでしょうか」と尋ねたとき、主イエスは神の掟（特に十戒）を守っているかと問われ、「そういうことは子供の時から守ってきました」と答える男に、「持っているものを売り払い、貧しい人々に施し、それから私に従いなさい」と命じられました。財産を多く持っていた男はそうすることが出来ずに、悲しみながら立ち去ったのでした。今回の箇所（10章23～31節）はその出来事の続きで、金持ちの男が立ち去った後の主イエスと弟子たちの問答であります。

神の国に入ることについて、

主イエスと弟子たちの会話

財産のある男が立ち去りました。彼を見つめ、慈しんで語られた主イエスにとっては誠に残念

であったに違いありません。

財産のある男と語っておられた主イエスは、その後、御顔を弟子たちに向けて、彼らを「見回して」彼らに語り出されたのです。御自身に弟子たちの注目を集めるためです。弟子たちに対する教育へと移っているのです。「財産のある者が神の国に入るのは、なんと難しいことか」。去って行った金持ちの男を目の当たりにして、財産のある者へと一般化してこのように語られたのです。

「弟子たちはこの言葉を聞いて驚いた」というのです。なぜ、「驚いた」のでしょうか。主イエスの言葉が弟子たちの考えていたことと大きく異なっていたからでしょう。彼らは、財産のある者も貧しい人々に施しをするなどの善行を積み、神の国に入れると思っていたのかも知れません。これに対して、「イエスは更に言葉を続けられた」のです。「子たちよ、神の国に入るのはなんと難しいことか」と。

「子たちよ」という呼びかけは、ラビが弟子たちに教えるときの呼びかけの口調です。これから大事なことを教えるときによく用いられます。ここには、財産のある者とか金持ちという条件はありません。神の国に入る者はさらに一般化されて、誰であっても神の国に入るのは非常に難しい、と主イエスは言われたのです。これは弟子たちには更に大きな驚きでありました。財産があってもなくても、神の国に入るのは非常に難しいことなのです。

更に主イエスの言葉は続きます、「金持ちが神の国に入るよりも、らくだが針の穴を通る方がまだ易しい」。一度、金持ちに限らず一般化しましたが、また金持ちに話題を戻します。金持ちもそうでない者も、同じかということそうではないということです。金持ちが神の国に入るのはより難しいということです。「らくだが針の穴を通る方がまだ易しい」は、不可能である、と採るべきでしょう。非常に難しいことの比喩的表現である位に解釈してはいけないう。正真正銘、金持ちが神の国に入るのは不可能である、ということです。

なぜ、富を多く持つことが神の国に入るのを不可能にするのでしょうか。富を持つこと自体、悪であるとは聖書は言っていないでしょう。富を第一として、それに支配されることが悪なのです。富を多く持つ者はどうしても富に支配されるのです。マタイ福音書6章24節で、主は言われました。「だれも、二人の主人に仕えることはできない。一方を憎んで他方を愛するか、一方を親しんで他方を軽んじるか、どちらかである。あなたがたは、神と富とに仕えることはできない」とあります。富んだものは、神ではなく富を主人とすることを主はご存知なのです。また、使徒パウロもテモテへの手紙一6章9、10節で警告しています、「金持ちになろうとする者は、誘惑、罫、無分別で有害なさまざまな欲望に陥ります。その欲望が、人を滅亡と破滅に陥れます。金銭の欲は、全ての悪の根です」。

また、同6章17節では、「不確かな富に望みを置くのではなく、わたしたちにすべてのものを豊に与えて楽しませてくださる神に望みを置くように」と勧めています。

それで、弟子たちはますます驚いて、「それでは、だれが救われるのだろうか」と互いに言ったのです。ここでは、再び一般化されます。財産のあるなしに係わらず、誰が一体救われるのだろうか、誰もいないのではないかと、弟子たちは不安感を募らせて、主に尋ねるのです。

これに対して、「イエスは彼らを見つめて言われた」のです。「見つめて」は、21節で財産を持っていた男を慈しんで、「見つめ」られたのと同じ言葉です。ここでも主イエスは弟子たちを慈しみをもって、じっと「見つめ」られて、大事な教えを告げられたのです。

「人間にできることではないが、神にはできる。神は何でもできるからだ」。神の国に入ること、救いに入ることは人間の努力でできることではないのです。人間がどんなに神の戒めを守っても、また持ち物全てを貧しい人に施して主に服従しても、人間の努力で神の国に入ることには出来ないのです。人間の持つ罪と汚れのゆえに、この世では完全には神に従うことはできないからです。人間には不可能なことです。神様だけが人間を救い、神の国に入れることがおできになるのです。

「神は何でもできるからだ」と言います。確かにこのことは旧新約聖書が告白している真理です。創世記18章14節、男の子が来年生まれるとアブラハムに告げたとき、高齢のサラがひそかに笑ったので、主は、「なぜサラは笑ったのか。なぜ年をとった自分に子供が生まれるはずがないと思ったのだ。主に不可能なことがあるのか」とおっしゃったのです。新約をみますと、イエスの誕生を告げられて戸惑うマリアに、天使が「神にできないことは何一つない」という言葉を発しています（ルカ福音書1:37）。これらは、神様はこうしようと決意されたことは

なんでもそのとおりでできる全能のお方であると告白しているのです。

神様は、特に人間を救うということにおいて、全能の御力を発揮してくださり、不可能を可能にしてくださったのです。神様は独り子なる御子キリストを世にお遣わしになり、このお方の贖いの業を通して、神の恵みにより無償で私たち罪人が義（正しい）とされることです。不可能を可能にしてくださったのは、神様の愛であります。

全てを捨てて、主イエスに従うことについて、 主イエスとペトロの会話

求道の富める男が去ってゆき、主イエスの言葉があった後に、弟子たちを代表してペトロが発言します。そのやりとりをとおして、主イエスに従うこととはどういうことかを学びましょう。

ペトロがイエスに、「このとおり、わたしたちは何もかも捨ててあなたに従ってまいりました」と言い出したのです。「このとおり」は「みよ」という言葉で、金持ちの男と違って、自分たちは全てを捨ててあなたに従ったというペトロの誇りが感じられます。並行記事のマタイ19章27節では、「では、わたしたちは何をいただけるのでしょうか」とご褒美まで期待しています。彼らはそのような気持ちであったと思います。これは誇りというよりは、ペトロの高慢・高ぶりであったと思うのです。自分たちこそがイエスが財産のある者に命じたことを実行して弟子となった者だと自らを誇り、そうでない人々を蔑むのです。こういう気持ちを察してか、主イエスは物語の最後の所（31節）で警告を發せられるのです。

主イエスは答えられます。「はっきり言っておく。わたしのためまた福音のために、家、兄弟、姉妹、母、父、子供、畑を捨てた者はだれでも、今この世で、迫害も受けるが、家、兄弟、姉妹、母、父、子供、畑も百倍受け、後の世で

は永遠の命を受ける」。

ここで大事なことは、人が一切を捨てるのは「わたしのため」であるということです。他の誰のためでも自分のためでもない、わたしたちを愛してそのために命までも献げられた主イエス・キリストのために全てを捨てるのです。それはキリスト・イエスによって生きるためです。そして、それはまた「福音のため」に捨てることなのです。これは別のことではなく、同じことです。福音に聞き、福音を語るために捨てることなのです。

「捨てる」という言葉は、置き去りにする、後に残す、という言葉です。家族を捨てるということは、家族を置き去りにする、後に残す、ということです。これは、当時なら出家弟子になること、現代なら献身することではないでしょうか。主イエスを第一にする、福音を第一にする、ということです。

捨てるもののリストには、兄弟姉妹、父母、子供、そして家、畑が入っています。併行記事のルカ福音書には妻さえも入っています（18:29）。まさしく、人にとって最も大切な人々、最も大事なものです。これらを捨てよと言われるのです。

そして、これらを捨てて従う者に主イエスは報いを告げられます。「今この世」では、捨てた人々や捨てたものの「百倍」を受けるといいます。それぞれに失ったものよりも遙かに大きな恵み・祝福を受けるといいます。それは捨てた人や物、それぞれにおいてであります。例えば、家族を捨てたが、より豊かな家族を教会の中で与えられる等であります。この世において、全てを捨てて無一文、裸一貫となって辛いけれどもあの世に希望を持って齒を食いしばって頑張るというのではないのです。この世において、捨てたものより大きな恵みを受けて歩むのです。この世において、神の国の祝福を味わうのです。しかし、迫害を受けることは覚悟しなければならないのです。

「後の世」では、永遠の命を受けるのです。主イエス・キリストの主権の下に、主と共にあることが永遠の命でありますから、この世においても多くの祝福の中で永遠の命に与っていますが、完全な意味で主と共にある永遠の命は「後の世」のことであります。これが確実に約束されているのです。

警告の言葉

「しかし、先にいる多くの者が後になり、後にいる多くの者が先になる」と主イエスは警告を発せられるのです。逆転現象が起こるということです。これはどう解釈すべきでしょうか。わたくしは、直接的にはペトロたち主の側近の弟子たちに対しての警告と採ります。かれらは全てを捨てて主に従った者たちですが、そのような犠牲を払った自分たちは他の者たちとは違う、彼らより上だというような誤った誇り、高慢さを持っていたのではないのでしょうか。弟子たち仲間同士でも誰が一番偉いかなどと争ったほどです。これに対して、主イエスはそれぞれがへりくだって歩みなさい、と命じておられるのです。このことこそ、主がお喜びになることであります。

おわりに

第一に、主イエスが、「人間にできることではないが、神にはできる。神は何でもできるからだ」と言われたことについてです。

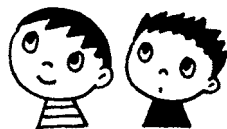
ただ単に神は全能故に人間が不可能なことを可能にしてくださる、と言っておられるのではないでしょう。神は全くの自由意志によって、恵みによって人を救い、神の国に入れてくださ

る、と言っておられるのです。使徒パウロはエフェソの信徒への手紙2章4～6節で言っています、「しかし、憐れみ豊かな神は、わたしたちをこの上なく愛してくださり、その愛によって、罪のために死んでいたわたしたちをキリストと共に生かし、—あなたがたが救われたのは実に恵みによるのです—キリスト・イエスによって共に復活させ、共に天の王座に着かせてくださいました」。まさにわたしたちは神の恵みによってのみ救われるのです。それは、財産を持っている者にも持っていない者にも変わりません。全ての人が、神の恵みによって救われるのです。

神の恵みとしての救いを、私たちは信仰によって、子供のように素直に、受け取りたいものです。

第二は、全てを捨てて主イエスに従うことについてです。

ペトロは全てを捨てて主イエスに従ったことを誇りました。確かにこれはイエスに従う弟子たるの道かもしれませんが、全てを捨てて主イエスに従えば自動的に救われるか、というところではないのです。それを完全に行うことのできる人は誰もいないのです。ペトロたちが全てを捨てて主に従ったゆえに救われたとするならば、「人間にできることではない」という主の言葉は偽りになります。ですから、全てを捨てて主イエスにしたがうことが救われる条件ではないのです。では全てを捨てて主イエスにしたがうことは何かというと、それによって主イエス・キリストを第一とする信仰が与えられ、その信仰によって救いが恵みとして与えられることです。私たちは自らを献げてそのような信仰をも恵みとして与えられたいものです。



銚子栄光教会付属萌保育園の紹介

小林義信（銚子栄光教会牧師）

1. はじめに

萌保育園は2007年4月1日に湖北台教会付属保育園として開園し、2010年5月3日に銚子栄光教会設立に伴い銚子栄光教会付属萌保育園となりました。現在、園長をはじめとしてスタッフ12名（食育担当を含む）、園児75名を擁する、銚子市にあっては大きな保育園として数えられるまでになりました。今、この地での出生数は一年でわずか300名前後で公立の保育園は整理統合の波の中にあります。その中でも、開園以来4年にわたり実績と保育理念が保護者に受け入れられ、無認可ながら今日まで成長路線をたどらせて頂きました。これも神様の憐れみと導きの摂理の御業であり、また兄弟姉妹教会のお祈りの賜物と心から感謝致しております。尚、教会の日曜学校の紹介は本誌28号に紹介されておりますので割愛させていただきます。

2. 一日のスケジュール

保育園ですので、勤労主婦の便宜の為に朝7時30分から夕6時迄（希望者）開園しております。0才児から就学児までお預かりしています。周辺は開拓された農地であり、米、キャベツ、大根、イチゴ、メロン等の栽培農家のお子さん達が多く集まり、園舎も園庭も広く子供たちの快活な声が周辺を賑わせております。地域からも愛され、昨年のクリスマスにはイオンショッピングセンターのクリスマスコワイアーに当保育園が単独出演を依頼されるほどキリスト教保育に関心が高まっております。

登園致しますと、園児は自分のロッカーに持ち物を整理し、礼拝室に集い「朝の集会」を行います。賛美の後、園長先生のお話を聞き、そ

の月の課題聖句を皆で声を出して暗唱致します。例えば、4月には「私たちは見えるものではなく、見えないものに目を注ぎます」（コリント信徒への手紙二4章18節）でした。これを毎日繰り返して覚えます。私達の希望は、この御言葉がいつの日にか芽を出し、花を開き、実を結ぶことであります。幼い日に覚えた言葉は必ず何かあった時に思い出され、それによって励まされることがあるからであります。

「朝の集会」が終わりますと、それぞれの保育室に戻り、クラスの週間目標・月間目標にしたがって先生方の指導に任されます。あるクラスは、菜園でのお手入れ、運動場での遊び、年長さん・年中さんは周辺の畑や田のあぜ道を通ってのお散歩、途中で虫や花や野菜の観察をし、神様がこれらのものを造られたことを覚えます。0才・1才児は、10時のおやつを頂きます。

そして11時になりますと、小さいクラスから給食が開始され、12時半までに食事が終了いたします。そこから年長を除いてお昼寝が始まり2時半過ぎまで続きます。その間、年長クラスは数やひらがなのお勉強、また読書をして過ごします。全員で3時のおやつを頂いた後に帰り支度をはじめます。そして、一日の園児の活動状況が記載された連絡帳が保護者に手渡されそれぞれ家路につきます。延長保育の子供達は6時まで居残ります。こうして園での一日が終わります。

3. 年間スケジュール

2011年度の年間主題は「信じる～目に見えないものに目を注ぐ～」、年間聖句は、コリント信徒への手紙二4章18節の「私たちは、見え

るものではなく、見えないものに目を注ぎます」です。これらにもとづきまして年間カリキュラムが決定されます。

- ①この世の全てを造られた神様を覚える。
- ②神さまが造られた食物の大切さを覚える。
園の菜園を作り、落花生、インゲン、ブロッコリー、ネギ、ゴーヤ等を栽培する。→野菜嫌いを解消する。
- ③行政子育て支援室との密接な関係を保ち、地域との深い関係を作り上げる。
- ④自然災害に対しての避難訓練と避難先の確保。それに伴う避難ルートの確定を行う。

〈2011年度行事予定〉

- 4月 進級式、入園式、クラス懇談会、親の会総会（森の会）
- 5月 内科・歯科検診、母の日の集い（イチゴ狩り）
- 6月 時計屋さん見学、プラネタリウム見学、親子遠足（ディズニーシー）
- 7月 プール開き、サマーキャンプ（年長・年中組）、夕涼み会（森の会主催）
- 9月 敬老の日祝会、秋の味覚狩り
- 10月 運動会
- 11月 マラソン大会、収穫感謝祭、バザー（森の会・教会共催）
- 12月 クリスマス会、お遊戯発表会
- 2月 作品展、卒園旅行
- 3月 新入園児半日保育、園の説明会、お別れ遠足、送別会、卒園式、終了式



大地と仲良く



菜園の手入れ



運動会



マラソン大会



クリスマス会

この他に、毎月お誕生会を開催し御言葉が書かれたカードを手渡します。

また、年長組の男児は空手の訓練、女児はバレエの訓練をおこない、規律正しき躰を備えて卒園していきます。この様に、親御さんたちが園の教育方針、理念に賛同してくださり、中

には兄弟3人、4人を継続して預けてくださり、スタッフに対する信頼関係が築かれておりますので、一年を通して途中で退園される方が少なく園の運営に於いても成果を上げております。



空手の稽古



バレリーナ

4. その他の活動

①子供会

毎年、園児が卒園致しますとそれで関係が途切れてしまうのが普通ですが、それを防ぐ為に教会学校では、月一度土曜日に礼拝堂で子供会を継続して開催しております。園児も参加し、小学校6年生までが集います。礼拝、分級、工作、食事作り等を通して子供同士の交わりを途切れさせないように配慮しております。教会の見地からは、土曜学校としての位置付けであります。毎回30数名の子供たちが会費400円を持って集います。2011年度の年間目標は「十戒を知る」であります。これに沿って神様が私達に示してくださった掟と戒めを学びます。

〈2011年度行事予定〉

4月 イースター祝会、円盤工作、お祝い卵の製作

- 5月 第一戒の学び、母の日カード製作
- 6月 第二戒の学び、バーベキュー、
- 7月 第三戒の学び、貝殻工作、冷やしラーメン
- 8月 第四戒・五戒の学び、サマーキャンプ
- 9月 第六戒の学び、もちもちパン、茸ピラフ
- 10月 第七戒の学び、クリスマス準備、合奏練習、ハヤシライス
- 11月 第八戒の学び、クリスマス準備、合奏練習、スパゲティ
- 12月 クリスマス祝会、演奏会
- 1月 第九戒の学び、ゲーム大会、天婦羅うどん
- 2月 第十戒の学び、チョコパイ
- 3月 お別れ遠足、ビデオ大会

この毎週の子供会には、地元の吹奏楽団の有志の方々が子供達に音楽指導をしてくださり、クリスマス祝会には合奏を行いイエス様のご生誕を祝っております。またお母さん達からも有志が集い、教会のご婦人方と一緒にクリスマスを祝うため、現在トーンチャイムの練習に励んでおられ、卒園してもこの様なかたちで園と教会との関係が保たれておりますことは、真に主のお導きに他なりません。

②こひつじの会

この様に地域社会との関係が良好に進んでおりましても、これが日曜学校に中々繋がらないのが実情であります。この原因を尋ねてみますと、その回答は次の二つに集約されます。日曜日は親が送迎してくれない。早朝からサッカーや野球の練習がある。この解決策は、日曜日の子供礼拝を午後ないし夕方におこなう。また親も一緒に参加させる。この実験として昨秋から、第一日曜日の午後から、「こひつじの会」と称して、牧師館でこれまで教会に來たことのないお子さんと親御さんを対象にした会を開催しています。五月現在、三組の家庭のお子さんと親

が集い、その中でお一人が聖書の学びを始めておられます。この様に、伝道は主の知恵をお借りし、急がず、せかさず行っております。

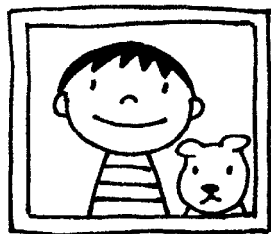
③英語教育

毎週火曜日に、年中・年長組対象に英語塾の先生が子供たちに英語を教えてくださいます。また CRC 宣教師による月一回の英語の本を読む会を子供向けに開催し、同時に集まった母親に対して牧師による「キリスト教的しつけ」についてお話をしております。これらは横の繋がりが少ない若い母親には好評で、その繋がりで下の子を園児として預けてくださる様になったり、聖書の学びを始める方も出て参りました。これまで、園児の親で受洗された方はお一人であります。この様に、保育園・教会活動の門戸を広く地域社会に開くことに於いて、親の教育、子供の保育を通して地域の文化的活動拠点としての役割を果たしております。

5. おわりに

今日、福音伝道に対する閉塞感が覆い、教会

が高齢化し礼拝出席者も減少し福音伝道の活力が低下しておりますが、日々子供たちの元気な歌声が教会や園の中で響いておりますと、主の御業が日々活きて働いておられることを実感できるのであります。銚子は人口減少の著しい所で、10万あった人口が今や6万台に落ち込み、一年の出生数も300人を切る有様です。公立の保育園は廃止統合の憂き目にあい、保育士も解雇されている現況であります。その中にあっても開園満4年経った無認可の萌保育園が、毎年75名前後の園児を迎えることが出来ておりますのは、地域に対する理念・教育方針・地域社会との協力関係が認められた結果であります。事業を併設するということは教会本来の姿ではないかもしれませんが、幼子を優しく包み込んでくださる主イエスキリストの愛の姿を実現するには大変有効な手だてと考えております。私共が展開しておりますこの地方伝道の一つの在り方が、皆様の参考になればと思ひ筆を取らせて頂きました。今後とも皆様のお祈りに覚えて頂き、お支えくださいます様お願い申し上げます。



「託されている祝福と責任」

～次世代を担う子どもたちのために～

《基調講演》

鈴木牧雄（東部中会教育委員会委員長）

わたしたちの間で実現した事柄について、最初から目撃して御言葉のために働いた人々がわたしたちに伝えたとおりに、物語を書き連ねようと、多くの人々が既に手を着けています。そこで、敬愛するテオフィロさま、わたしもすべての事を初めから詳しく調べていますので、順序正しく書いてあなたに献呈するのがよいと思いました。お受けになった教えが確実なものであることを、よく分かっていたいただきたいのであります。（ルカによる福音書1章1～4節）

最初に、ルカ福音書1章1～4節の御言葉から教えられたいと思います。

ルカがこの福音書を献呈したテオフィロは、分っていただきたい求道者だったのでしょか。あるいは、もっとよく分かっていたきたい信じたばかりのクリスチャンだったのでしょか。いずれにしても、ルカがテオフィロによく分かってほしいと願っているのは、「お受けになった教え」でした。ところで、この「お受けになった」と訳されている言葉ですが、「カテーケイン」というギリシア語の動詞です。キリスト教会は後に多くの「カテキズム」（教理問答）作って子どもや求道者や初心者教育に用い、私たちもウェストミンスター小教理問答やハイデルベルク信仰問答などに親しんでいますが、その「カテキズム」という言葉は、この「カテーケイン」というギリシア語に由来しています。それで、今日は最初に、「カテーケイン」という言葉を手掛かりにして教えられたい

と思っています。

「カテーケイン」という言葉は、それまであまり使われていなかっためずらしい単語でした。「伝える」「知らせる」という一般的な意味の単語で、後のキリスト教会が「カテキズム」という言葉に込めた深い広い意味を、元々持っていたわけではありませんでした。しかし、新約聖書はこの「カテーケイン」という単語を、キリスト教の教育の特徴を込めた言葉として用いようとし始めたのではないかと、思われます。なぜなら、「教える」という意味のよく使われる単語が他にあるにもかかわらず、自分たちの新しい宗教の教会教育を表すために、「カテーケイン」という新しい単語を用い始めているからです。

「カテーケイン」は新約聖書に八回出てきます。そのうち、使徒言行録21章の二カ所（21節、24節）は一般的な意味の「伝える」「知らせる」という意味で用いられていますが、その他の六カ所はすべて教会教育を表す「教える」です。

ローマの信徒への手紙2章18節は、ユダヤ人の律法教育についてです。

「ところで、あなたはユダヤ人と名乗り、律法に頼り、神を誇りとし、その御心を知り、律法によって教えられて何をなすべきかをわきまえています。」

使徒言行録18章25節は、伝道者アポロのことです。

「彼は主の道を受け入れており、イエスのことについて熱心に語り、正確に教えていた」

アポロによる伝道、求道者教育であり、イエスと主の道について教えていました。イエスと

主の道ですから、言い換えるなら、信仰と生活について教えていたわけです。

次は、最初に取り上げましたルカ福音書1章4節の「お受けになった」ですが、「カテーケイン」の受身形で「教えられた」という意味です。イエス・キリストの目撃証人であり福音書を書こうとしていた使徒たちのグループのある先生から、テオフィロは教えられていたのでしょう。今で言う、教会による求道者教育を通して教えられていました。

ガラテヤの信徒への手紙六章六節にも出てきます。

「御言葉を教えてもらう人は、教えてくれる人と持ち物をすべて分かち合いなさい。」

この「御言葉を教えてくれる人」が、今で言う牧師かどうかははっきりしませんが、教会で説教や教育をしていた人にちがいがなく、御言葉を教えていました。

最後は、コリントの信徒への手紙一、14章19節です。

「しかし、わたしは他の人たちをも教えるために、教会では異言で一萬の言葉を語るより、理性によって五つの言葉を語る方をとります。」

コリント書14章は、パウロがコリント教会の礼拝あるいは教会について語っている箇所であり、特に「教会に来て間もない人」(16節)が意識されています。明らかに説教か教会教育に関してですが、理性によって教え、理性によって理解されなければならないことが強調されています。(14～16節)

以上の「カテーケイン」の用例から気づかされるのが、いくつかあります。

第一に、キリスト教は最初期から、教会において「教える」ということが行われ、初心者を育むにも求道者に伝道するにも「教える」ことが行われていました。キリスト教は最初から熱心に教える宗教、熱心な教育的信仰であったと言えるでしょう。

第二に、教会の「教える」内容は、キリストであり、御言葉であり、信仰と生活についてでした。申し上げるまでもなく、キリスト教のカテキズムはウェストミンスター信仰基準も、まさに同じ内容です。

第三に、教会の説教や教育は、理性によって教えられ理性によって理解されることが、目指され求められていました。当時はまだキリストが口伝えで教えられていましたが、だんだん新約聖書が書かれてきて、新約聖書という文書をもって教えられるようになっていきました。しかし、口伝えであろうと文書であろうと、理性によって教え理性によって理解しなければ、キリストの福音は伝わりません。このことに関して、特に今の時代、教会と親の努力が必要なのではないかと思います。

以上、簡単な学びでしたが、教会の信仰教育を考える際の基本としていただけるのではないかと思います。

さて、今日は発題とパネル・ディスカッションがメインですので、聖書の学びはここまでにし、今回の研修会の意図をお話して次のプログラムの導入にしたいと思います。

東部中会は、昨年から毎年、教会教育研修会を開催することにしました。今日はその第二回ですが、たくさんの兄弟姉妹と子どもたちと共に礼拝にあずかって始めることができ、主に感謝しております。

東部中会が装いも新たに教会教育研修会を始めましたのは、教会教育、特に契約の子の信仰教育をめぐってある危機感を感じているからです。それで、第一回目の昨年は、「子どもたちと共に」というテーマで、一つは、礼拝から子どもが消えつつある現状を踏まえて、小さい「子どもの礼拝参加」について、また、中学高校生になると塾や部活で教会から離れる契約の子がたくさん見られる現状を踏まえて、「家庭教育の悩み」について、もう一つは、それ以前の問

題として教会学校の子どもの出席数が一桁の教会がほとんどという現状を踏まえて、「CSをよみがえらせよう」という、三つの分科会を行いました。大なり小なりすべての教会と教会員が抱えている課題であると思いますが、参加してくださった方々が率直に発題して下さり、また正直に悩みを打ち明けて下さり、問題意識と祈りの課題を共有できたのではなかったかと思っています。

そして、今年の第二回目は一步でも前に進めようと考え、担当委員として河西俊身長老と牛島智子執事に加わっていただき、研修会の内容を二本立てにして、それぞれ河西長老と牛島執事に担当してもらいました。

一つは牛島執事が担当して、CS教師研修を実際にやろうということになり、とにかくCSに来る子どもが減りつつあるのだから、今年は、子どもたちを引き付けるお話やクラスをどのように作るかという技術的なことを考えてみよう、ということにしました。そして、幼稚園や学校の先生など子どもに話をするを職業としつつCSの教師をしている方々に協力をお願いし、自主的に話し合って具体的な企画と準備をしていただきました。最初の子ども中心礼拝も、説教以外は企画と司会をしていただき、その後自分たちでモデルクラスをしてCS教師の方々に参観していただき、つまり自主的にまな板の上の鯉になってその後の懇談会のたたき台になり、みんなで話し合い相互研修しようということになりました。

もう一つは、CS教師以外の教会役員、教会員、そして契約の子の親対象のこちらでして、河西長老が知恵を出して全体を取り仕切ってくださいました。いろいろ話し合い、いろいろな声を聞きましたが、今回のメインテーマを「託されている祝福と責任」と付けましたとおり、契約の子という尊い賜物が託されているのに、親も教会もその祝福の大きさを忘れ、御前に責任を感じていないのではないか、というところから

出発することになりました。

具体的に言いますと、第一に、CSが壊滅的になりつつあるのに、そしてCS教師は手探りながら頑張っているのに、牧師や小会はCS教師会にまかせっきりではないか。契約の子教育の重要性を教会全体に対して積極的に強調してくれないし、契約の子教育に関する信仰と姿勢を明確に打ち出してくれていないのではないか。そのため、このままではますますジリ貧になってしまうのではないか、という牧師や小会、教会に対する問いかけです。

第二に、しかし根本的にはやはり親の問題ではないか。以前のようなスパルタ教育や強制までする必要はないが、親自身が我が子に対して、「塾や部活よりも教会に来てほしい。信仰や救いの方が大切だ」と本当に思っているのか。世間の親のように人並みの幸せをつかんでほしいという思いが占めてはいないか。幼児洗礼式の時に、この子にはキリストの血による罪の赦しと聖霊による生まれ変わりの恵みが必要なのだと誓約したはずですが、「もしキリストを信じて救われなかったなら、我が子は真の幸せをつかめないのだ」と本当に思っているか。つまり、今の三十歳代四十歳代ぐらいの教会員の親たちが、親子関係や家庭の在り方に関するこの世の世俗的な風潮に流されてしまっていて、罪の赦しと救いの命こそが我が子にとって最も大切なものであると信じて育てていないのではないか。

ですから、第三に、本当の問題は契約の子やCSでなく、この世代の親たちの信仰と姿勢であり、契約の子の教育の前にこの世代の信仰教育をしっかりやらなければ、次に教会や中会を担う世代そのものが形成されていかないのではないか。そう考えると、青年時代に聖書と教理と改革派教会について教育することの重要性を改めて認識させられ、中会学生会や青年会にますます力を入れていくことが大切ではないか。鶏と卵とどちらが先かというような議論です

が、そのようなことを話し合いました。

それで今回の研修会は、具体的なこととしてはCS復活のための取り組みを始めただけで、全体的な解決策はまだ何も提示できませんが、とにかく私たちの現状と課題を中会全体で共有したいと考え、特に三人の方に「契約の子の教育に対する信仰と姿勢」というテーマでの発題をお願いし、その上でパネル・ディスカッションをしたいと考えております。三人の方は、現在もいろいろな立場で契約の子の教育にかかわっておりますが、発題をお願いした手紙に次のように書かせていただきました。

「契約の子教育の現状は、東部中会も各教会・各家庭も問題山積ではないでしょうか。委員会では、この重要な課題に待ったなしで真剣に取り組まなければ手遅れになると、危機感をもって考えております。今までどうであったか、どのような信仰と姿勢で臨んでいるか、今後の課題は何か……。きれいな事や正論でなく、祝福も失敗も共に率直にお話しいただければと思っています。」

私たち自身、自らを正直に振り返り主から託されている祝福と責任を再認識して深めるためにも、ぜひ発題をお伺いして皆で討論したいと思っています。 (湘南恩寵教会牧師)

《発題 (1)》

わたしからのお願い

北岡修二 (いずみ教会長老)

教育委員会からこの発題のご依頼を受けたとき、お受けするかどうか正直言って迷ってしまいました。と言いますのは、私の家には男・女・男と三人の子どもが与えられましたが、真ん中の女の子は幸い信仰告白をしてくれましたが、二人の男の子はまだ信仰告白に至っておりず、このような者が皆さんに発題できるかどうかと思ったからです。鈴木先生から、失敗も含めて正直なお話をとのお勧めを受けましたので、私の反省点を踏まえて、皆さんとご一緒に契約の

子どもたちをどうしたら信仰告白にまで導くことができるかを考えたく思い、ここに立たせていただくことにいたしました。

私は、今はいずみ教会に属しておりますが、母教会は横浜教会であり、私の子どもたちは横浜教会で育ちました。当時の横浜教会は契約の子どもたちが数多く与えられて、会堂は子どもたちの声であふれていたものでした。時期を少し延ばして数えると確か三十名以上の契約の子どもたちが与えられておりましたが、今教会に残った子どもたちを数えると十名に満たない数になってしまっております。

何が原因だったのか？良く分からないのです。先ほどの鈴木先生の講演にもありましたが、契約の子どもたちへの教会の関心の無さがあったかも知れません。一つ言えることは、教会が契約の子どもたちを伝道の対象として見ていなかったという事が挙げられるのではないかと思います。教会にとって契約の子どもたちは、そこにいて当たり前存在だったのです。当たり前すぎて、神様を伝道する対象として見えなかった。適切な信仰告白への導きがなされなかった。その結果いなくなってから気付いてしまった、というのが現状ではないでしょうか。

このような失敗を繰り返さないためには家庭が、教会が契約の子どもたちを神様からお預かりした大切な宝として信仰告白まで育て上げる決心を、今問われているのではないのでしょうか。契約の子どもたちを教会が大切に思っている、関心を持っている、祈っている事を、いかに子どもたちに伝えるかが重要なポイントではないかと思うのです。

これからそれぞれの立場の皆さんに幾つかのお願いをしたいと思います。

子どもたちのお父さんお母さんをお願いです。

信仰の喜びを毎日の生活の中で表してください

い。特に主の日の礼拝を大切に思い、日曜日に教会に行くのは神様にお会いしに行くことであり、楽しい嬉しいことだと、子どもたちに身をもって教えてあげて下さい。そして家庭礼拝で子どもたちと一緒に祈るときには、この子が信仰告白をしてくれるようにと口に出して祈ってあげて下さい。陰ながら祈っているだけではないけません、お父さんお母さんの一番の願いは何かを、子どもたちはその祈りの言葉を通して理解してくれると思います。

教会学校の先生方をお願いします。

教会学校のミッションは二つあると言われております。一つは契約の子どもたちへの信仰教育であり、もう一つは一般の子どもたちへの伝道です。共に大事な使命ではありますが、これからは少しだけ契約の子どもたちを育て上げる事に中心点をずらしていただきたいのです。

いずみ教会の一つの例をあげますと、教師の発案で第二週の教会学校を午後の礼拝に切り替えました。いずみ教会には契約の子どもが二名与えられておりますが、遠方から来られる会員のお子さんですので、どうしても礼拝前の教会学校には出席出来ない事情がありました。いずこもそうだと思いますが、首都圏の教会の会員層はかなり広く散らばっており、そのような事情におかれた子どもたちはどうしても親の都合でCSへの出席が妨げられている場合があると思います。そのような場合はCSの方から歩み寄る必要があると思います。いずみ教会のCSが一部午後になったおかげで、礼拝出席が滞りがちだったこの家庭が、第2週だけはと頑張ってくれて、親の礼拝出席にも励みがついたという派生効果も得られました。また午後の時間ですとゆっくりと時間が使えます。礼拝前の慌ただしいCSとは違い、工作や楽しいゲーム等も取り入れた中身の濃いCSが実現出来ました。

長老さん方をお願いします。

礼拝中の牧会祈祷で契約の子どもたちのために祈ってください。もちろん多くの教会で祈ら

れていることと思いますが、一人ひとりの子どもたちの名前を挙げて祈ってください。子どもたちは自分の名前が教会のお祈りの中に出てくることにびっくりし、退屈な大人の礼拝に少しずつ興味を持ってくれるでしょう。

牧師先生方をお願いします。

小さな子どもにとっては、礼拝説教は退屈な嫌な時間です。どんなに素晴らしい説教内容でも、子どもにとっては理解出来ない外国語を聞いているも同然です。子どものための説教を大人の説教の前にしておられる教会もあるかと思っています。(いずみ教会も以前やっておりました)。そこまですなくても良いかも知れません。礼拝説教の中でちょっとだけ冒険をしていただませんか？ 説教壇から子どもたちに話しかけていただませんか？ 内容は些細な事で結構です、日常的な事でも良いし、学校の事など子どもたちの身近な話題で、例えば「教会の隣の犬はうるさく吠えるけど、〇〇ちゃんはどう思いますか」等々。要は大人の礼拝に自分も参加しているという意識の昂揚です。最初はギクシャクするかも知れませんが、慣れてくると教会員の方々も今日はどんな話題が飛び出すかと興味を持たれ、また教会員の方々の子どもたちへ向ける目が変わってくる事が期待されます。

最後に教会の役員会（小会、執事会、委員会）へのお願いです。

このお願いをする前に私にとって悲しい思い出をお話ししなければなりません。一昨年10月に長男が神様に召されました。入院二ヶ月ちょっとで、その間一度も意識が戻らずに召されてしまいました。34才の若さでした。私たち夫婦にとっては大変な悲しみでありましたが、その悲しみを倍加させたのは息子が自分の口で主を告白出来なかった事でありました。私たちは息子の魂を神様の恵みの御手におゆだねするしかありませんでした。死の時は本当にいつ来るか分からない事を痛感させられました。

息子の亡き後、横浜教会の方で月報の紙面を割いて息子の特集号を作ってくださいました。その記事を読んでいて、息子の小さい時からの友人の方が、「光太郎君はちゃんと信仰を持っていた。事あるごとに神様を信じていると言っていた」と書いて下さっておりました。私自身も息子が信仰を持ち続けていること、信仰を捨て去っていないことをこの目で見聞きしておりました。また、感謝なことに、これを機に下の息子がまた教会に足を向け始めてくれました。

これらの事から思われるのは、教会から離れてしまった契約の子どもたちは、神様に背を向けてどんどん遠ざかっているのでは決して無いと思うのです。神様の事が気になりながらも教会とは平行線を保ちつつ、自分の人生を歩み続けている契約の子どもたちの方が多いのではないのでしょうか。イエス様は、九十九匹の羊を残してでも一匹の「迷子の羊」のために山を越え谷を越えイバラに身を裂かれながらも、「迷子の羊」を探し出してくださいました。

平行線を交差させるのは、今教会に与えられた使命だと思います。役員会の皆様へのお願いとは、教会の他住会員、別帳会員となっていてであろう過去の契約の子どもたちを全て洗い出していただき、その現住所を調べ出していただきたい。その住所や本人の信仰歴等のデータを一つのかたちにとまとめ上げて欲しいと思います。そして何らかのアクションを取っていただきたいのです。安否の便り、集会案内、

何でも結構です。一度きりではだめです。繰り返し繰り返し連絡を取っていただきたいのです。

これは一教会の力では足りないと思われます。母教会から遠く離れて生活している契約の子どもたちも多くいるでしょうし、他中会管轄に移転している子どもたちもいることでしょう。中会、大会レベルで「迷子の羊プロジェクト」とでも言いましょうか。このデータベースを共有して、その子ども達へ一番近いと思われる改革派教会が、責任を持って通信や集会案内を送り続ける必要があると思います。

教会がその努力をする事できっと何人かの「迷子の羊」が神様のもとに帰ってくることを信じております。

時間の関係で限られたことしかお話しできませんでしたが、最初に申しましたように、契約の子どもたちを教会がいかに大切に思っているか、関心を持っているかを子どもたちに伝える事が一番重要なポイントではないかと思います。

※これは、2010年11月14日（日）に開催された「第2回東部中会教会教育研修会」の基調講演と発題の記録です。初出は東部中会機関紙『まじわり』2011年5月号。発題の2と3は次号に掲載します。掲載をお認めくださった関係者の皆様に感謝を申し上げます。



副読本のご案内

『主は羊飼―中高生のための教理入門―』

価 格 800円

著 者 木下裕也

(名古屋教会牧師・教会学校教案誌編集員・神戸改革派神学校講師)

ぜひお買い求めください。ご注文は教案誌編集部まで。

❶ 人生の目的―神礼拝

もうかなりのお年になってから教会に連れ始められた方と聖書の学びをしていたときのことです。そのときまたま一緒に、ウェストミンスター小教理問答の問1を読みました。その問いは「人のおもな目的は何であるか」です。

この問いを読まれて、その方はつぶやくようにおっしゃいました「わたしはもう何十年も生きてきたのに、人生のほんとうの目的などということを考えたこともありませんでした、と」。

人生の目的とは何か。このことをはっきり知っているのだ、知らずにいるのでは、やはり生きがたが大きくなっていくのではないのでしょうか。

さまざまなことが人生の目的になり得ます。お金をもうけること、地位や名誉を得ること、仕事で成功をおさめること、熱烈な恋愛をすることなどです。これらのことは人生にある幸せをもたらすでしょう。

けれども一方で、そのどれもが不確かです。お金は一瞬にして失われることがあります。地位や名誉を得たとしても、たった一度のあやまちでそのすべてを棒にふることもあります。熱烈な恋もさめることがあります。とすれば、これらはいずれも人生の究極の目的とはなり得ないでしょう。

さらに、私たちの命そのものも不確かなものです。明日この地上に生きているという保証を、私たちはだれひとり持たないのです。

では、私たちはついに人生の確かさ、人生のほんとうの目的を見出すことはできないのでしょうか。

いいえ、私たちは人生の真の目的を知ることができます。ほんとうに確かで、生きがいのある命と人生を生きることができるのです。

もういちどウェストミンスター小教理問答の問1を見ましょう。

問 人のおもな目的は何であるか。

答 人のおもな目的は、神の栄光をあらわし、永遠に神を喜ぶことである。

もうひとつ信仰問答を見ましょう。ジャン・カルヴァンの手になるジュネーブ教会信仰問答の問1はこうです。

問 人生の目的は何ですか。

答 神を知ることです。

人生の目的は神さまを知り、神さまの栄光をあらわし、神さまを喜ぶことにあります。すなわち、神さまを礼拝することこそが人生の真の目的なのです。

人生の確かさは私たち自身の中にはありません。私たち自身の何かを頼りにしているかぎり、私たちの人生は不確かです。

けれども神さまは確かなお方です。神さまこそ私たちの人生のゆるぎなき土台、岩、命のとりです。なぜなら神さまは天地の造り主であられ、私たちの命の与え手であられ、この世界のいとなみと私たちの人生の歩みのすべてをみ手のうちに握っておられるお方だからです。

『教会学校教案誌』発行のための 自由募金のお願い

教会のかしらなる主イエス・キリストの御名をあがめます。

中部中会日曜学校委員会（2007年4月中部中会第一回定期会で教育委員会から改組）は、日本キリスト改革派教会をはじめとする改革・長老主義諸教会の教会学校・日曜学校教育に資することを目的として、『教会学校教案誌』を発行しています。2001年4月に始まり、すでに11年目に入り、第43号まで発行して参りました。中部中会では8割ほどの教会により採用され、改革派教会全体でもおよそ70教会で採用されています。大会教育委員会もご支持を表明してくださっています。皆様のご支援に心からの感謝を申し上げます。

『教案誌』の発行は中部中会の事業として行われておりますが、中部中会日曜学校委員会では、あわせて皆様からの自由募金によってご支援いただきたいと願っています。子どもたちの信仰教育のために、ぜひ皆様からのお祈りと募金のご支援をいただきたく、よろしくお願い申し上げます。教案誌を購入していただきやすくするために、教案誌の頒布価格を印刷・製本単価ぎりぎりにおさえています。『教案誌』をご購入くださることも発行のための支援となりますので、ご購入いただくことによってもご支援くださいますよう、お願いいたします。

目標金額	30万円／年
送 金 先	郵便振替 伊藤治郎
	00890-2-148183

※通信欄に「教案誌のための自由募金」と明記してください。

聖書研究・カテキズム研究・説教展開例・分級展開例

35章はイザヤ書前半部の審判預言の締めくくりであると同時に、40章から始まる慰めの預言への導入をも果たす、主の到来と人々の解放を高らかに歌う終末的な救いの託宣。歴史的な背景には36章から39章に記された王国時代末期の事情があり、そこに描かれてはいないもののバビロン捕囚に至るユダ王国の終焉をも含めることができる。「主の到来」はベルシャ時代に達成されたシオンの回復によって成就をみる。しかし、本章に書きとめられた終末的な解放はさらに遠い未来への眺望を開く。

前章で告げられたように、主の怒りは全世界に戦火による荒廃をもたらす。主の民イスラエルは背信によって裁きを受け、アッシリアやエドムはその暴虐によって報いを受ける。しかし、主なる神は不毛の地をそのままには放置されず、自らが真の王として君臨され、創造の力をもって世を回復させる。

主の到来は、まず自然の変貌によって特徴づけられる。1節の「荒れ野」「荒れ地」「砂漠」は同義語で、死海南方のユダ・エドムが接する地域を指し、白く又赤く焼けつく瓦礫の展望が具体的なイメージとして喚起される。その荒廃した地が野ばらに覆われたお花畑へと変貌し（花の種類は原語からは特定できない）、死が生命に彩られる。2節の「レバノン」「カルメル」「シャロン」はいずれもイスラエル北部の肥沃な地域を指し、お花畑のイメージにも具体性がある。自然が歓声をあげるとの擬人的な表現は、王の勝利を迎える民衆の歓喜と関連するものだが、乾季の間に枯れ果てた土地が雨季の水分を十分に蓄えて春には見事な花畑に変貌するのも、人々は見ていたはずである。そうした自然の象徴に訴えつつ、「人々は主の栄光と我らの神の輝きを」主の救いの到来において「見る」と、預言者は約束する。

もう一つのモチーフは人の変貌であり、ここで呼びかけられているのは「弱った手」「よろめく膝」「おののく心」をもった人々である（3,4節）。裁

きを受けた者たちは主の御前に立ちえず、生命が枯渇しかかっている点で「荒れ野」に等しい。そして、この人々が「恐れるな」との呼びかけを聞き、救いの神の到来を告げられる。

5節から7節では順序が逆転して「人」から「荒れ野」へと進む。神が来られた「そのとき」に起こることは、「目の見えない人」「歩けない人」「口の利けない人」が変えられ、神を見、その言葉を聞き、鹿のように跳ね、喜び歌う。荒れ野も同様に、渴いた地に活ける水が与えられて潤い、生命が回復される。

8節に現れる「道」には、王が行軍のために敷設した広い街道のイメージが背景にあるが、出エジプトの故事とも結びついて、新たな救いのメッセージを構成する。10節にあるシオンへの帰還は、捕囚からの解放後の移住ともとれるし、再建された神殿への巡礼ともとれる。どちらにしても、それは主のもとへの帰還であり、シオンにおいて主と再び出会うことが喜びの源泉になる。「道」はまた、詩編において信仰の暗喩として用いられる。「解放された人々」「贖われた人々」は当然、イスラエルの残りの者ということになるが、ここではそういう言葉づかいがされていないことが特徴と見受けられ、この救済の託宣に普遍的な広がりを与えている。

新しい解放の出来事は、モーセではなく、主御自身が先頭に立って道を進み、主を信じる者たちが喜びに溢れて、神の住まわれる場所であるシオンに到達して果たされる。賛美の高い調子に全体を包まれた本章は、主を待ち望む人々に希望を与え続け、主の到来の備えをさせる。福音書は、見えない人の目を開き、聞こえない人の耳を開くイエスの業を伝えるが、それはこの方こそ、聖書に約束された終末の救い主であることを証しするためであった。主イエス・キリストは、信仰の大路に立って今、神のいます命の水の溢れる所へ民を導いておられる。（牧野信成）

テキスト イザヤ書 35章
参照カテキズム 子どもカテキズム 問25

〔単元のねらい〕

「キリスト預言 (35:5-6)。神が来られる。神の約束に希望をおいて生きよう。」この目標に沿って説教するには、預言者イザヤ自身がどのような歴史的背景の中で、どのような希望を抱いていたかを黙想するなかで、そこに現代の子供たちの生活と希望を重ねてゆく必要がある。アッシリアの王セナケリブの侵攻に脅かされるユダの王ヒゼキヤに対して、イザヤはどのような御言葉を預かり、それを取り次いだのか。そこには、どのような希望が示されていたのか。

「神による回復を待つ」

「よげんしゃ」とは、いったいどんな人のことでしょうか。普通の人には見通せない未来の出来事や有様について、「いついつの時、これこれの事が起こる」と言うことができる。そういう人のことであれば、予（あらかじ）め言う者と書いて「予言者」と呼びます。しかし、聖書に登場するのは、言（ことば）を預（あず）かる者と書いて「よげんしゃ」と呼ぶ、そういう人のことです。神の霊の働きを感じ、神の言を聴き取り、それをそのままお預かりして、神さまが語りかけられた相手にそのまま取り次ぐ人。それが聖書の「預言者」です。

イエス様が生まれたとされる年からさかのぼって、七百年昔。ダビデが治めたイスラエル王国は、北と南に分裂していました。南の王国の都エルサレムには、ソロモンの建てた神殿があって、そこにイザヤという人がいたのです。彼が神殿で神さまにお仕えしていると、突然、神さまがお姿を現わされたのです。高く天にある御座に主は座しておられ、衣の裾が神殿いっぱい広がって、御使いたちの呼び交わす声が聞こえてきたのです。「聖なる、聖なる、聖なる万軍の主。主の栄光は、地のすべてを覆う。」神殿の入り口の敷居は揺れ動き、神さまが来られたことを示す煙が神殿に立ちこめました。聖なる神さまを目の前にして、イザヤは畏れの心を抱きました。自分は本当に汚れている、本当に罪深い、そう思い知らされたからで

す。そんな自分が神さまを見てしまったからには、もう死んでしまおう、滅びてしまおう、そう思ったのです。

するとどうでしょう。御使いの一人が飛んできて、祭壇から取った燃える炭火を運んできて、こう告げるではありませんか。「見よ、この炭火があなたの唇に触れたので、あなたの咎は取り除かれ、あなたの罪は赦された。」するとどうでしょう。今度は、主なる神さまの御声が聞こえるではありませんか。「誰を遣わそうか。誰が神に代わって行くだろうか。」イザヤは畏れおののきながらも、霊の火によって汚れを清められ、神の言によって罪を赦された、その恵みをいただいた喜びに溢れ、即座にこう答えたのです。「私がここにおります。私を遣わしてください。」するとどうでしょう。主なる神が厳かにお命じになるではありませんか。「行け、民に言うがよい。よく聞け、しかし理解するな。よく見よ、しかし悟るなど。民の心をかたくなにし、耳を鈍く、目を暗くせよ。目で見ることなく、耳で聞くことなく、その心で理解することなく、悔い改めていやされることのないために。」

なんと悲しい御言葉でしょう。神さまは御自分の民に語りかけてくださった。しかし、その御言葉は、イスラエルの民が神さまの言葉を理解することも悟ることもない、悔い改めることもいやされることもない、という内容なのです。こんな言

葉を、誰が喜んで告げるでしょうか。誰が喜んで聴くでしょうか。しかし、イザヤは告げたのです。神の霊の働きを感じ、神の言を聴き取り、それをそのまま預かりして、神さまが語りかけられた民にそのまま取り次いだのです。イザヤは預言者として召し出され、その務めを果たした人なのです。

北の方から、アッシリアという大国の強力な軍隊が攻め寄せてくる。その時、預言者イザヤはこう告げるのです。「シオン（エルサレム）に住むわが民よ、アッシリアを恐れるな。」(10:24)「お前たちは（神に）立ち帰って、静かにしているならば救われる。安らかに（主に）信頼していることにこそ力がある。」(30:15)しかし、ユダの国王アハズは預言者に耳を貸さず、アッシリアに服従してしまいます。国王ヒゼキヤも神の言に安心せず、エジプトに援助を求め、バビロンにも援助を求めて、アッシリアに対抗しようとしします。それが仇となって、アッシリアの王セナケリブの軍隊によって、ユダの砦の町々はことごとく占領されてしまうのです。

それでも預言者は呼びかけます。「荒れ野よ、荒れ地よ、喜び踊れ。砂漠よ、喜び、花を咲かせよ。」(35:1) 荒れ野とは、神に立ち帰らなかった民のかたくなな心。荒れ地とは、主に信頼しなかった人たちのさわがしい心。神の言という種も、主の霊という水も受け入れない、カラカラに乾燥した砂漠のような魂。花どころか、茎も葉も茂らない不毛の地。喜びどころか、嘆きの声しか聞こえない暗黒の地。それが当時のユダの国と人々の有様でした。それでもイザヤは語り続けます。「弱った手に力を込めよ。よろめく膝を強くせよ。心おののく人々に言え。『雄々しくあれ、恐れるな。見よ、あなたたちの神を。敵を打ち、悪に報いる神が来られる。神は来て、あなたたちを救われる。』」(35:3, 4)「立ち帰ることのできない民のために、神が立ち上がってくださる。信頼することのできないぼくのために、主が慈しみとまことを示してくださる。『その時、見えない人の目が

開き、聞こえない人の耳が開く。その時、歩けなかった人が鹿のように踊り上がる。口の利けなかった人が喜び歌う。荒れ野に水が湧きいで、荒れ地に川が流れる。熱した砂地は湖となり、乾いた地は水の湧く所となる。山犬がうずくまる所は、葦やパピルスの茂る所となる。」(35:5-7) 砂漠の魂に、主の霊が湧き出し、川となり、湖となる。不毛の心に、神の言が芽を吹き、茎を伸ばし、葉を茂らせる。暗黒の地に太陽が顔を出し、光を放ち、輝きを増してゆく。見えなかった人が神の姿を見るようになり、聞こえなかった人が神の声を聞くようになる。歩けなかった人が神の民として歩むようになり、口の利けなかった人が神への信頼を口にするようになる。まだ見ぬ回復を、既に見ているようにして、イザヤは確かな希望を持ち続けます。神が来てくださる。主が勝利してくださる。ただこの約束への全き信頼において、預言者は希望を語り続けるのです。

預言者イザヤの生き方は、今ここにいる私たちの生き方に、確かな道筋を示してくれます。私たちが歩んでゆく人生の道のりを、主なる神が先立って歩いてくださいます。主ご自身が道となってくださり、私たちを聖なる道へと導いてくださいます。聖なる神を前にして、私たちは本当に汚れた罪深い人間であることを、思い知らせてくださいます。立ち帰ることのできない私たちのために神が立ち上がってくださり、信頼することのできないぼくのために主が慈しみとまことを示してくださいます。砂漠の魂に聖霊の水を注ぎ、不毛の心に御言葉の種を蒔き、暗闇と死の支配する地に命と栄光を回復してくださるのです。この約束への全き信頼に立ち続けるかぎり、私たちは恐れません。どんなに強くて大きい敵が目の前に現われても、私たちは静まって救いを待ちます。かつて来られた十字架と復活の主イエスこそ、やがて再び来られる神の子キリスト。この御方は今ここにいられて、救いを実現してくださるのです。

(二宮 創)

〔今週の暗唱聖句〕

マタイによる福音書 11章5、6節

貧しい人は福音を告げ知らされている。

わたしにつまずかない人は幸いである。

〈ねらい〉

「回復」を、元気になる、新しく芽生える、といったイメージでとらえながら、神さまの力を伝える。教会は、この神さまの力のあふれる祝福の場所であることを覚えつつ、ともに祈りをささげるように励ましつつ、主のもとに導く。

〈展開例〉

みなさんは、病気になったとき、その病気がいつまで続くのだらうと思ったことはありませんか。高い熱が出て、せきが続くと、とてもつらいですね。そんなとき、神さまにお祈りをささげましょう。必ず、神さまがわたしたちを元気にしてくださいます。

むかし、イスラエルの人々も、神さまの言うことを聞かないで、元気をなくしたり、住み慣れたところからバビロンというほかの国へ連れて行かれたこともありましたが、神さまが自分たちの国を必ず元気にしてくださることを信じていました。

そして、イエス様がイスラエルの人々が住んでいるところにお生まれになりました。イエスさまは、目の見えない人の目を見えるようにし、耳の聞こえない人の耳を聞こえるようにし、手の不自由な手を働けるようにしました。それは、全部、神さまの力によることでした。

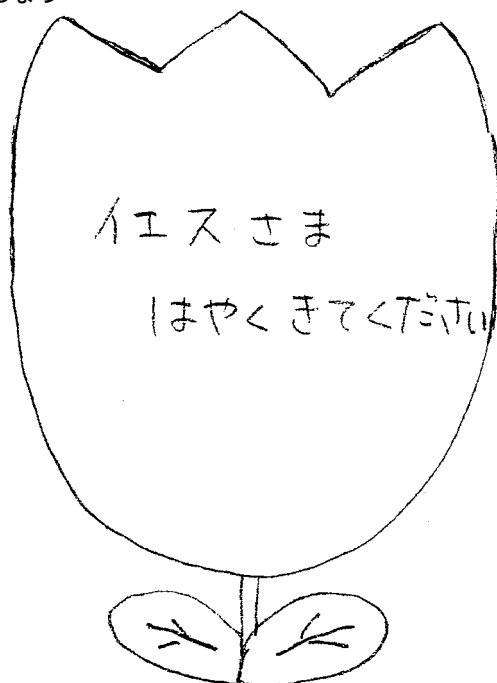
イエスさまを信じて、お祈りするとき、わたしたちも、いつも、神さまから新しい力をいただくことができます。わたしたちもいつも神さまの約束を信じてお祈りしましょう。

〈お祈り〉

天の父なる神さま、み名をさんびします。今日も、神さまのみことばによって、わたしたちに新しい力を与えてくださってありがとうございます。イエスさまの御名によってお祈りします。アーメン。

〈やってみよう〉

○お花のカードをつくりましょう



ねらい

自然の回復。荒れ野と人間の回復は同時に神の働きであることを理解する。

展開例

荒地に水が沸き出で、荒野に川が流れる風景を想像してください。死の世界は動きませんが、いのちの世界は動きがあります。水は絶えず動いて流れているのでいのちのしるしです。植物の花も成長し伸びる動きをするので、いのちのしるしです。人間は自然世界と同じ性質をもっています。目の不自由、耳の不自由、足の不自由な人が、目が見え、耳が聞こえ、足で歩けたら素晴らしいと喜びます。このように自然の回復と人間の回復が同時に起こる完成を神様は約束しています。

話し合ってみよう！

草花の成長のように、私たち人間も育っていけるようにするために、どのようなことが必要か話し合ってみよう。[ヒント、ひかり、みず、土、世話をする人など。]

祈り

人間と自然の世界が調和のとれた美しい世界を回復させてください。

～ 1週間のミニ日記 ～

おうちの草花の名前を言ってみよう。

今咲いている花の名前は何ですか？

聖書日課

イザヤ 35：1～10

マタイ 11：1～6



お祈りしたいこと



- ・ これからも春、夏、秋、冬の季節がずっと続きますように。
- ・ 神様から与えられた日本の自然の美しさに感謝できますように。

暗唱聖句

目の見えない人は見え、足の不自由な人は歩き、耳の聞こえない人は聞こえ、死者は生き返り、貧しい人は福音を聞かされている。

(マタイ 11：5)

✠聖書をひらいて (イザヤ書 35 章)



★イザヤ 35 章は、「主が来てくださる!」「主が助けてくださる!」と神さまの救いを預言して、高らかに歌っていますね。

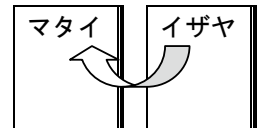
☆問題: 文字をならべかえて、みことばにしてね。(ヒントは、35 章 1 節~4 節の中にあるよ)

は て き み か、 れ た す ち く わ を あ た る な

こたえ→

☆問題: イザヤ 35 : 5~6 と マタイ 11 : 5 をくらべてみましょう。

・マタイ 11 : 5 は、だれが () だれに ()
言ったことばですか? ⇒ (参照: マタイ 15 : 29~31)



✠考えてみよう (みんなで話し合ってね (^0^)/)

☒『神は来て、あなたたちを救われる』(35 : 4) というイザヤさんの預言のことばは、約 700 年後、イエスさまによって、そのとおりになったのですね!「今や、恵みの時、今こそ、救いの日」(コリントⅡ5 : 2) だと、分級先生に聞きました。わたしたちも、神さまのことをお友だちに伝えなければならぬのですか? (Y 子・12 才)

✠言ってみよう (○に、ひらがなを入れてね)

問 25 イエスさまの預言者としてのお働きは何ですか?

神さまの ○○○○ を教えてください。
イエスさまは、今も、教会を通して、聖書と聖霊なる神さまによって 私たちに語りかけてくださいます。
ですから、私たちは心をこめて みことば をききます。

✠ やってみよう —ワン・ツー・ゲーム—「イエスさまが言いました、だけよゲーム」

①『イエスさまが言いました』~○○してください(立つ、座る・・など指示どおりにする) ②「イザヤさんが言いました」やタダ「○○してください」では指示に従がわない。ひっかからないようにご注意

✠今週の暗唱聖句 (マタイによる福音書 11 章 5・6 節)



貧しい人は□□□□を告げ知らされている。

わたしにつまずかない人は□□□□である。

〈展開例〉

①私がクリスチャンになったのは高校1年生のクリスマスの時でした。幼い頃から教会に通っていたので、イエスさまのことは信じてはいました。しかし、クリスチャンになったところで自分がどう変わるのか正直、分からないところがあったのです。そのような時に、ある先生から「クリスチャンになることは、生きることが喜びになる」と教えられてとても嬉しくなったことを今でもよく覚えています。しかも、その喜びは、何があっても消えることがない不思議な喜びだということです。生きることが喜びになるというのは、聖書の中心となるメッセージです。今回のテキストであるイザヤ書35章には、「喜び」という言葉が7度(1, 2, 6, 10節)も用いられていることから明らかに、神さまは私たちが喜びの人生に招かれます。招くだけでなく、喜びは実現するのだと約束をしてくださるのです。

②「喜び」は、自分自身の手で勝ち取ってつかみ取るものだと考える人もいるかもしれません。確かにそういうこともあるでしょう。しかし、それがすべてではありません。少なくとも聖書はそうように教えていません。「喜び踊れ」(1節)「大いに喜んで声をあげよ」(2節)とあるように、神さまが実現なさる喜びです。しかし、そこで問わずにおれなくなるでしょう。「喜べ」と命令されて、果たして喜べるでしょうか。あるいは「力を込め……強くせよ」(3節)と言われて、すぐに強くなれるのでしょうか。もし、その時の自分の心の中が、嘆きと悲しみ(10節)に満ちていたならば、「喜べ」という言葉は虚しく響き、逆に怒りさえも生むことになるかもしれません。そうすると、イザヤの預言は、「何が何でも喜べ」といった精神論を語っているということになるのでしょうか。このイザヤ書が

書かれた時代も、捕囚から解放され、神殿も再建されました。しかし、約束された栄光が未だ見えません。それどころか、迫り来るペルシャの脅威に脅かされていた時代だったのです。しかし預言者は告げるのです。「雄々しくあれ、恐れるな。……神は来て、あなたたちを救われる。」と。

③私たちの人生は、自分が思い描いたように上手く行かないことがあります。むしろ失敗や挫折、罪に満ちていることに失望してしまいます。しかし、神さまはそのただ中に、救いの喜びをもたらし、「大路を敷かれる」のです(8節)。「道」や「旅」に譬えられる私たちの人生ですが、そこに神さまはもうひとつの道である「聖なる道」(同節)を敷かれ、この道を歩むように招かれます。また、道や旅の先には必ずゴールがあり、目的があります。自分がどこへ向かっているのかが分からなければ、虚しさに捕らわれるだけです。しかし、イザヤは約束しています。「主に贖われた人は帰ってくる」「喜び歌いつつシオンに帰り着く」と(10節)。私たちには帰る場所があるのです。そこに、一步一步ではあるが着実に向かっているのです。そして、神のもとに辿り着いたとき、「喜びと楽しみが彼らを迎え」てくださいます。「嘆きと悲しみは逃げ去る」とあるように私たちの労苦も報われます。

④イザヤの預言は、主イエスの到来によって、現実のものとなりました。私たちの目と耳は開かれ、見るべきものを見、聴くべき言葉を聴くことができるようになりました。喜びの将来が見えず、希望の言葉を聴くことのできない人たちが、立ち上がり、喜びの賛美を歌いつつ、主に従って歩んでいるのです(マタイ11:5-6、マルコ7:31-37参照)。

テキスト イザヤ書 61章1〜4節

ここで語っている「わたし」は預言者に相違ない。主が「わたし」を遣わして福音を伝えさせるという。しかし、この「わたし」は神の霊にとらえられて語る。預言者は自分が器に過ぎないことをよく知っている。特殊なのはこの預言者に油が注がれている点で、ふつう預言者に油が注がれることは無い。このようなメシア的な預言者としては詩編のダビデが相応しい。イザヤ書には詩編との共通性が見られるが、ここでの預言者はダビデ的な預言者だといってよいだろう。

「貧しい人」とは詩編と同様に「苦しむ人」のことを指す。先の35章と同じく、ここでも同義語のグループが対比せられて、神による救いの御業が鮮やかに描かれる。「捕らわれ人」であり「嘆いている」のは敗戦によって祖国を失った捕囚民で、「シオンのゆえに嘆いている」のは戦乱によって神殿が破壊されて荒廃したまま放置されているエルサレムを思うゆえであって、彼らは喪に服すかのようだ。

その人間の低みに捨て置かれた人々が慰めを受け、自由と栄誉を与えられる。荒れ野が花畑となり、砂漠が水源となるように、主は大いなる逆転を告知する。3節では「〜に代えて〜」との表現で3つの対比が並ぶ。「灰」とあるのは嘆きを表すために頭に被る砂埃のことを指す。それが「冠」に代えられるのだが、「冠」は祭司や貴婦人、花婿が頭に巻く布（ターバン）のこと。続く「嘆き」は喪を表すが、「喜びの香油」は祝いの際に用いられる油を指すものと思われる（詩編45:8参照）。そして「暗い心」が、「賛美の衣」へ。「暗い心」は生命の輝きを失った魂のことで、「衣」は丁寧に言えば「外套」（新改訳）が相応しい。これらの暗喩で、主の恵みを受けた人々の立場の劇的な変化は明らかであろう。主イエスによる放蕩息子の譬えはこれを見事に説話に言い直している（ルカ15:11以下）。

その立場の変化は、単に窮状からの救出に留ま

らず、喜びの祝宴に貴賓として招かれる栄誉を伴っており、しかも3節後半の句によれば、主の輝きを現わすとの積極的な役割をも与えられる。原文に則して訳せば、彼らは「義の樅の木」「栄光を表す植樹」と呼ばれる、と並行表記となっている。「樅の木」はイザヤ書では偶像崇拝の行われた場所として否定的に用いられるモチーフだが（1:29, 57:5参照）、ここでは「義」と結びつくことでその意味合いは見受けられない。続く4節と併せて神殿をいただくエルサレムの暗喩であろうか。人に木陰を提供することのできる立派な樹木に例えられて、回復された民は主の義と栄光を表すために生き、周囲の人々からそれを認められる。

4節ではエルサレムの再建が、福音の告知によって果たされると告げられる。エルサレムの都はバビロニアの軍隊によって破壊されて以降、「とこしえの廢墟」「古い荒廢の跡」「廢墟の町々」「世々の荒廢の跡」と4重の表記がなされる程の荒廢ぶりであった。しかし、低められた民の回復は、主の都の再建を促す。

これらの逆転、すなわち死から生命への再生をもたらすために「わたし」は良い知らせを語る。その日、その時は定められており、主が好意を示され、敵への報復が果たされる（34:8, 35:4, 63:4参照）。ルカ福音書4章で、主イエスがナザレの会堂でイザヤ書のこの箇所を朗読されたと記されている。そこでイエスは「この聖書の言葉は、今日、あなたがたが耳にした時、実現した」と話され（21節）、イザヤ書61章の「わたし」がご自分であることを示された。主イエス・キリストは、預言者が約束した大いなる変革の時が到来したことを告げ、「永遠の滅び」に瀕した罪人に救いを与えるため、十字架において敵であるサタンへの報復を果たされ、復活の命を信仰を通して保証される。この言葉を聴く教会は主の義と栄光に生きる。（牧野信成）

テキスト イザヤ書 61章1～4節
参照カテキズム 子どもカテキズム 問25

〔単元のねらい〕

「キリスト預言 (61:1)。神がキリストにおいて語られる福音の慰めに生きよう。」この目標に沿って説教するには、預言者イザヤが取り次いだ神の言葉を、イスラエルの民がどのような歴史的背景の中で、どのように受け留めたかを黙想するなかで、そこに教会の子供たちへの福音と慰めを見出してゆく必要がある。バビロン捕囚から解放され、祖国の都エルサレムへの帰還を果たしたものの、なお救いには程遠い現実と格闘しつつ、どんな慰めを聴き続けたのか。

「主にある慰めを聴く」

「慰めよ、わたしの民を慰めよ。エルサレムの心に語りかけよ。苦役の時は今や満ちた。彼女の咎は償われた。罪のすべてに倍する報いを、主の御手から受けた。」(40:1,2) そう呼びかけたのは、預言者イザヤとその仲間たちでした。彼らは、神の言が失われないようにと、預言の書を記し、親から子へ、子から孫へと、それを書き写させ、受け継がせてゆきました。そのような熱心は、どこから起こったのでしょうか。それは、イザヤの取り次いだ神の言が、アーメン（本当にその通り）実現したからです。ユダの国民が主に信頼せず、神に立ち帰らなかったのも、エルサレムは破壊され、イスラエルは滅亡し、国の主だった人々は捕らえられてバビロンに移されてしまったからです。家を失い、国を失った人々は、預言者の告げたことが神の言であったことをようやく認め始めたのです。

やがて時は満ち、ペルシヤの王クロスがバビロンを打ち破り、捕えられていたユダの人々を解放してくれました。しかし彼は、イザヤが期待(44:28)したようなイスラエルの「牧者」ではなく、「主の望みを成就させる者」でもなく、「エルサレムを再建し、神殿の基を置く」者でもありませんでした。補われの状態からは解放されたものの、生活を再建する見通しの立たない人々は、再び落胆してしまいます。

「主はご自分の民を慰め、その貧しい人々を憐

れんでくださる。」(49:13)「見よ、わたし（主ヤハウエ）は、あなた（都エルサレム）を、わたしの手のひらに刻みつける。あなたの城壁は常にわたしの前にある。あなたを破壊した者は速やかに来たが、あなたを建てる者は更に速やかに来る。」(49:16,17) 預言者イザヤの言葉は、そのように書き写されました。神が速やかに来てくださる。エルサレムの城壁を建て直すために来てくださる。バビロンから祖国へと帰ってゆく人々とともに、主は先頭に立って進み行かれる。そのように言い伝えられてゆきました。しかし、この御言葉に信頼してエルサレムへの帰還を果たした人々は、ほんのわずかでした。むしろ多くの民は、バビロンでの比較的安定した生活を捨てることができなかったのです。

「主なる神は、弟子としての舌をわたしに与え、疲れた人を励ますように、言葉と呼び覚ましてくださる。朝ごとにわたしの耳を呼び覚まし、弟子として聞き従うようにしてください。打とうとする者には背中をまかせ、ひげを抜こうとする者には頬をまかせた。顔を隠さずに、嘲りと唾を受けた。主なる神が助けてくださるから、わたしはそれを嘲りとは思わない。わたしは顔を硬い石のようになる。わたしは知っている。わたしが辱められることはない、と。」預言者イザヤの言葉は、そのように受け継がれてゆきました。預言者は、その告げる言葉のゆえに嘲られ、同国民から辱め

を受けなければならない。しかし預言者は、疲れ果てても、決して落胆しない。神が必ず助けてくださり、主が耳と舌を呼び覚ましてくださる。そのように、預言者の仲間たちは励まし合ったのです。

「起きよ、光を放て。あなた（エルサレムに帰った民）を照らす光は昇り、主の栄光はあなたの上に輝く。」(60:1)「目を上げて、見渡すがよい。みな集い、あなたのもとに来る。息子たちは遠くから、娘たちは抱かれて、進んで来る。その時、あなたは恐れつつも喜びに輝き、おののきつつも心は晴れやかになる。」(60:4,5)「わたしは怒ってあなたを打ったが、今はあなたを憐れむことを喜ぶ。」(60:10)「あなたは知るようになる。主なるわたしはあなたを救い、あなたを贖う者、ヤコブの力ある者であることを。」(60:16)「最も小さいものも千人となり、最も弱いものも強大な国となる。主なるわたしは、時が来れば速やかに行う。」(60:22) 預言者イザヤの言葉は、そのように語り告がれてゆきました。神の選びの民の子孫たちは皆、バビロンから都エルサレムへと帰って来る。やがて必ず、主はご自分の民を強く大きい国とし、栄光を回復してくださる。預言者の仲間たちは励まし合いながら、神の言を取り次ぐことを決して止めませんでした。しかしなお、エルサレムの城壁は破壊されたまま、その修復は思うにまかせず、生活の再建もままなりませんでした。人々はますます落胆し、預言者の仲間たちの告げる御言葉を聞いても、半信半疑のままでした。

そこに現われたのです。預言者イザヤの仲間の一人が立ち上がったのです。声を大にして、命がけで語り始めたのです。「主はわたしに油を注ぎ、主なる神の霊がわたしをとらえた。わたしを遣わして、貧しい人に良い知らせを伝えさせるために。打ち砕かれた心を包み、捕われ人には自由を、繋がれている人には解放を告知させるために。主が恵みをお与えになる年、わたしたちの神が報復される日を告知して、嘆いている人々を慰め、シオ

ンのゆえに嘆いている人々に、灰に代えて冠をかぶらせ、嘆きに代えて喜びの香油を、暗い心に代えて賛美の衣をまとわせるために。彼らは主が輝きを現わすために植えられた、正義の樅の木と呼ばれる。彼らは、とこしえの廃墟を建て直し、古い荒廃の跡を興す。廃墟の町々、代々の荒廃の跡を新しくする。」(61:1-4)

荒れ廃れた城壁を築き直せ。破壊された神殿の基礎を据え直せ。その働きにふさわしい清さと明るさを備えよ。このわたし（主なる神）が与える義の衣をまとい、賛美の歌に身を包め。嘆いている人よ、あなたの嘆きは喜びに変わる。繋がれている人よ、あなたを繋いできた鎖は断ち切られる。捕われている人よ、あなたを閉じ込めてきた牢獄は打ち破られる。心を打ち砕かれた人よ、あなたの傷をいやすのはわたしである。貧しさにうずくまる人よ、あなたに天の国を受け継がせるのもわたしである。この福音を告げる者は、聖霊を注がれて神の言を取り次ぐため遣わされた者、正真正銘の神の預言者である。預言者を受け入れる者は、わたし（主なる神）を受け入れるのである。福音を受け入れる者は、救いの恵みを受け入れるのである。半信半疑の心を捨てよ、全身全霊で神に立ち帰れ、徹頭徹尾主に信頼せよ。

この預言を朗読なさって、そこに約束されたことをすべて実現してくださる方こそ、私たちの主イエス・キリストです。罪と死に捕われている私たちを慰め、赦しと命にあずかせてくださいます。その恵みにあずかってもお、不安にかられ落胆している私たちを慰め、救いの道を開いてくださり、共に歩んでくださいます。その憐れみに導かれてもなお、後ろを振り返り、前に進むことをためらっている私たちを慰め、死を前にして恐れない信仰を、死を突き抜けて生きる希望を、すべてを完成させる愛を授けてくださいます。主はいつも、預言者を通して、慰めを語り続けてくださいます。

(二宮 創)

[今週の暗唱聖句] ルカによる福音書 4章21節

イエスは、「この聖書の言葉は、今日、あなた方が耳にした時、実現した」と話し始められた。

〈ねらい〉

前週の内容を復習しながら、「回復」から「解放」をイメージしていく。教会は、神さまの解放を告げるところであり、その喜びと感謝にあふれていくことの恵みをお互いに認め合うようにうながす。

〈展開例〉

この前は、わたしたちに新しい力を与えて、元気にしてくださる神さまのことを学びました。毎週のわたしたちがささげる礼拝とお祈りは、神さまがくださるよろこびがわき出るところです。わたしたちの心に、神さまのれいのおはたらきによって、神さまをよろこぶ思いが与えられます。そして、このよろこびは、神さまから愛されている人たちによって、いっしょによろこぶときにとても大きなぐさめになります。

わたしたちは、このよろこびを、牧師先生や、教会学校の先生たちからいつも聞いています。先生たちも、みんな、いろいろな人たちから、神さ

まくださるよろこびを伝えられて、それを信じるようになりました。

むかし、イザヤという人も、神さまのれいに導かれて、神さまの喜びを、元気を失っていた人々に伝えました。それは、神さまのみことばを信じていたからです。

イエスさまのみことばを伝えながら、神さまの力を人々にあらわされました。そして、十字架にかけられて三日目によみがえってくださいました。今日も、イエスさまのくださる救いのよろこびにあふれながら、いっしょに、神さまをさんびしましょう。

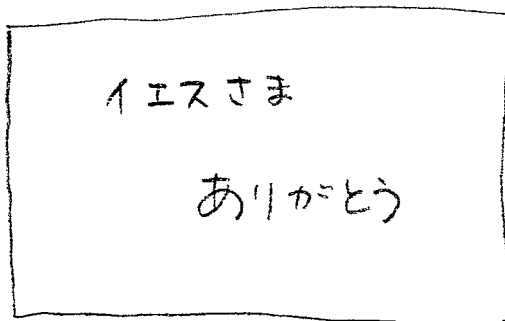
〈お祈り〉

天の父なる神さま、み名をさんびします。今日も、神さまのれいによって、わたしたちの心に神さまをよろこぶ思いを与えてくださってありがとうございます。イエスさまの御名によってお祈りします。アーメン。

〈やってみよう〉

○イエスさまに「ありがとうカード」をつくろう

イエスさまに「ありがとう」といいたいことをかこうね。



ねらい

預言者イザヤが貧しい者への福音を語ることによって、イエス・キリストの出現を預言していたことを知る。福音は世の初めから始まっていたことも知ろう。

展開例

イエス様の仕事の偉大さが預言されています。嘆いている人を慰める人、打ち砕かれたひとを包む人、つながれている人に開放を与える人、暗い心の人を賛美の心へ変えることができる人として具体的に書かれています。そして、そのイエス様の働きが神様ご自身の働きであることを、教えています。

神様は、人の罪と悪に対して、最初から、良い知らせとしての福音を語り続けてきた、恵み深い神様であることを学びましょう。

放蕩息子のたとえのように、人は、失敗し、挫折しても、神さまの恵みや愛を受けて回復することができるのです。

話し合ってみよう！

良い知らせは、世界の初めから、神様が計画したことであることを話し合ってみよう。

祈り

イエス様の悲しみや苦しみが自分のためであったことを知り、深く感謝します。

**お祈りしたいこと**

正義の樅の木と呼ばれるように、
頑丈な樅の木のように成長できる
ようにしてください。

聖書日課

ルカ 4：16～22

暗唱聖句

この聖書の言葉は、今日、あなたが
たが耳にしたとき、実現した。

(ルカ4:21)

✦ 聖書をひらいて (イザヤ 61:1-4)



⇒

マ	ズ	カ	シ	サ	ン	ビ
イ	ヒ	イ	ン	ト	ニ	コ
ヨ	コ	ホ	イ	ム	ロ	ロ
ジ	ユ	ウ	シ	モ	リ	ヨ
ラ	セ	ヲ	ユ	ツ	タ	エ
サ	ナ	グ	サ	メ	セ	ル
タ	メ	カ	ガ	ヤ	キ	ニ

★イザヤ 61 章は、預言者をとおして、さらに神さまの救いを賛美していますね。

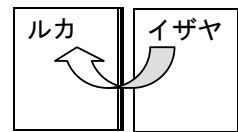
☆問題①：今日の聖書箇所に出てきた言葉が、9つかれています（タテ・ヨコ・ナナメ・サカサマ）。その言葉をぬりつぶして⇒のところから横に読むと、文が出てきます。何と書いてあるのかな？

（自由・解放・なぐさめ・賛美・衣・かんむり
喜び・香油・かがやき）

こたえ→

☆問題②：

イザヤ 61:1 と、ルカ 4:18 をくらべてみましょう。



✦ 考えてみよう (みんなで話し合ってね！(^_-)-☆)

☒ イエスさまは、「心の貧しい人は幸いです。天の国はその人たちのものです」(マタイ 5:3) といいました。「貧しい人」とは、どういう人のことですか？ (Aちゃん・11才)

✦ 言ってみよう

問い 25 イエスさまの預言者としてのお働きは何ですか？

神さまの〇〇〇〇を教えてください。

イエスさまは、今も、教会を通して、聖書と聖霊なる神さまによって 私たちに語りかけてくださいます。ですから、私たちは心をこめて〇〇〇〇をききます。

✦ やってみよう —レッツ・ミュージック— 「イザヤ 61:1 に、メロディーをつけよう」

- ①主はわたしに油を注ぎ 神の霊は私をとらえ 私を遣わし 貧しい人に、よい知らせを伝えるために
②打ちくだかれた心を包み とらわれ人には自由を つながれた人に 解放を 告げ知らせるためです

★アップテンポ・スローテンポどちらでも！替え歌にしても！（たとえば、「ふるさと（うさぎ追いし〜）」「世界にひとつだけの花（サビのところ）」のメロディーで）これが以外にアウナナ〜！

✦ 今週の暗唱聖句 (ルカによる福音書 4章 21 節)

イエスは、「この聖書の言葉は、今日、あなたがたが耳にした時、した」と話し始められた。

〈展開例〉

①「良い知らせ」(1節)は、教会の中でよく耳にする「福音」と訳すことのできる言葉で、英語では、“good news”と訳すことができます。ある人は、新聞などに記されている“bad news”を聖書の脇に置いて、聖書が語る“good news”に聴き入ったらよいと言っていました。一方で、新聞にも載ることのないような小さな悲しみや嘆きもあるでしょう。しかし、それらはたとえ、新聞に載らないことであっても、自分自身にとっては耐え難い痛み、“bad news”なのではないでしょうか。しかし、神さまはそのような私たちの心の中にある闇、誰の目にも留まらないような貧しい心をじっと見ていてくだします。

②「捕らわれ人には自由を／つながれている人には解放を告知させるために」とありますように、「良い知らせ」とは、「解放の告知」(1節)を指しています。つまり、私たちは、神さま以外の何ものかに捕らえられ、つながれているのです。だから不自由さを感じ、自分の人生から喜びが奪い取られていきます。イザヤ書のこの箇所は、捕囚から解放されたものの、なかなか栄光が見えない現実に失望感が支配し始めていた時代に書かれました。神さまへの信頼が弱まり、人々は段々と自分勝手に生きようになります。自分の願望を優先させ、人を押しのけてでも、利益を求めようとするのです。その競争に敗れた人が、勝者の踏み台にされ、「貧しい人」、「打ち碎かれた人」が出てきます。この悲劇は、決して、昔の話ではないと思います。今日の私たちもまた、神を忘れ、人間の思いに生きようとする思いに支配されています。今、自分を捕らえて離さないものは何でしょうか。どこかに

不自由さを抱えているとするならば、それはどうしてでしょう。

③主イエスは、故郷ナザレの会堂で説教をなさった時に、このイザヤの預言がわたしにおいて実現していることをお語りになりました。ルカ4章16節以下を見てみましょう。主イエスは、神さまから遣わされた救い主です。主は、イザヤの言葉を語られた後、「この聖書の言葉は、今日、あなたがたが耳にしたとき、実現した」(同4:21)と力強く宣言してくださいました。では、主イエスが解放してくださるものとは何でしょうか。それは、貧しい人、打ち碎かれた人を生み出す原因となった人間の「罪」です。「良い知らせ」とは、罪からの解放です。主イエスは良い知らせについてお語りになっただけではなく、それを実現するために、十字架に向かわれました。

④「良い知らせ」が、私たちにもたらす解放と自由は、私たちが自分勝手に生きることができるということではありません。よく考えてみるならば、クリスチャンになっても、教会にかよっていても、なお私たちを支配し、強制しようとする力に苦しむことがたくさんあることに気付きます。そのような意味で言えば、私たちは依然として不自由なところがあり、この世の様々な決まりに縛られている部分があるのです。でも、そういうこの世の不自由さの中で、主イエスがもたらしてくださった「良い知らせ」「解放」の知らせを聴き続け、神さまの愛に捕らえられている自分を知るのです。そして、自分を愛してくださる神さまのことしか考えることができなくなってしまうのです。これは、不自由ではなく、喜びそのものなのではないでしょうか。



テキスト エレミヤ書 31章31～34節

旧約聖書の中で、「新しい契約」という言葉はここだけに記されている。主イエスは、最後の晩餐において、杯を、あなたがたのために立てられる「新しい契約」とおっしゃった。教会は、これまでの聖書を旧約聖書と呼び、自分たちに与えられた新しい啓示の言葉を新約聖書と呼んだ。つまり、古い契約は、契約の成就者イエス・キリストにおいて完成されたと告げるのである。キリストを信じて、結ばれる者は罪赦され、義とされ、心に律法を書き記されて、律法を喜ぶ者とされるのである。

ただし、誤解してはならないことがある。古い契約は、「祭儀」としてはもはや必要ないが、掟としては新しい契約の時代においてもなら古びていない。我々は礼拝式で喜びと感謝をもって十戒を唱え、神に賛美をささげている。また、決して、個人的な神関係がここから始まるというようなことでもないのである。神が主権的にイスラエルの民に律法を与え、それによって彼らを神の民として形成される、この律法の目的に変更はない。

それなら、ここでの新しさ、その違いとは何であらうか。それは、古い契約は石の板に記され、民の前に置かれたのに対し、新しい契約は、心に記され、民の（胸の）中に置かれたことにある。

本来、神は、御自身の契約を徹底的に破り続けた民を、御自身の正義の怒りによって、王国を崩壊させ、それっきり歴史から消し去られてよいはずであろう。民は自分達に下された、神の怒りと審きを甘んじて受け入れる以外にないはずである。ところが、エレミヤは驚くべき預言を語る。神が「とこしえの愛をもってあなたを愛し、変わ

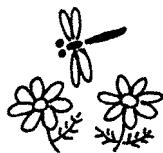
ることなく慈しみを注ぐ」（3）というのである。契約の神、つまり慈しみ（ヘセド＝契約の愛）の神（3）が、不変の神でありたもう故に、神の民の救いは成り立つのである。このイスラエルにとっての未曾有の危機の折に、「悪を赦し、再び彼らの罪に心を留めることはない」とおっしゃった故に、罪の赦しの恵みが際立つ。

エレミヤの預言活動の厳しさは、民の心のかたくなさを指摘し、悔い改めを迫ったことであった。エレミヤほど、律法を外側から強制され、その恵みを説き聞かされたとしても、律法が心にまで入り、心を動かすことなしには、これに生きることができないことを知らされていた預言者も少ない。しかし、やがて律法が心に書き記されるときが来るのである。

予らには、この預言は、主イエス・キリストの来臨によってその成就が始まったこと、私どもの心に律法を喜ぶ「新しい心」（エゼキエル書36:26他）が与えられていること、しかしなお、「主を知れ」と言って教えなければならないし、この「新しさ」に留まるためには、信仰の戦いを避けられないことを告げたい。同時に、契約の神は、必ず、「新しい契約」を完成してくださるので、明るく待ち望みつつ生きることができることを悟らせていた。その証拠として、「キリストの御業」（『子どもカテキズム』問24）と「聖霊の御業」（『子どもカテキズム』問65、教会に生きる新しい生）にあずかる私どもの幸いを豊かに味わいたい。

（相馬伸郎）

※第10号（2003年9月28日分）より再掲載。



テキスト エレミヤ書 31章31～34節
参照カテキズム 子どもカテキズム 問65, 66
ウェストミンスター信仰告白 7:6, 19:7

〔単元のねらい〕

子供たちに救済史を教えて行くにあたって、旧約聖書と新約聖書の関係をしっかりとらえておくこと、特に旧約の時代にイスラエルの民に結ばれた恵みの契約が、御子イエス・キリストの十字架の御業において完成したことを確認することは重要なことです。

今日取り上げますエレミヤ書31章31～34節には、旧約聖書を新約聖書に橋渡しする預言が記されています。そしてここで預言されている新しい契約こそが、主イエスの十字架であることは、最後の晩餐(ルカ22:20)において明らかにされます。だからこそ、ここにおいて、旧約聖書と新約聖書が同じ恵みの契約の中にあり、旧約聖書と新約聖書が継続的・一体的であることを確認していただきたいと思います。

「新しい契約」

みんなは、「今日は5時までに家に帰ってくるよ」と言っ、て、家の人と約束を結ぶことがあるか
と思います。しかし友だちと遊んでいる時、約束
したことを忘れ、6時になって家に帰るといつた
こともあるかと思ひます。その時は、「お母さん、
ごめんなさい」と謝るのではないでしうか。先
生も含めて私たちは弱く、約束を結んでも、守る
ことが出来ないこともあります。その時には謝る
勇気が必要ですね。

でも、「これからずっと5時には家に帰って
くる」と約束したらどうでしうか？ 約束を守
っている間は良いのですが、一度守ることが出来
なければ、「今日は約束を守ることが出来なくて
ご免なさい。明日からは約束を守れるように頑
張るから」と言うのではないでしうか。「明日
からは約束を守る」と語るのは、約束を結び直
しているのですよね。

このことと同じように、神さまと私たち人間
との間でも、一つの約束（恵みの契約）が結ば
れているのです。最初、アダムさんとエバさん
が罪を犯した時、私たち人間を救ひ、サタンを
滅ぼすことを約束してくださいました。人は神
さまの御前で罪を犯し、神さまが結んでくだ
さった契約を

破ったのです。しかし、神さまは、ノアの時代、
アブラハムの時代、そしてモーセの時代に契
約を更新し続けてくださいました。さらにモー
セの時代には、奴隷であったイスラエルの民を
救い出してくださいした後、私はあなたがたを
救ったのだから、信仰のあかしとしてこれに従
いなさい、と律法としての十戒をお与えくだ
さいました。そして律法を守ることが出来な
かった時に、罪の悔い改めを行うために、生
け贄をささげることが求められたのです。

しかしイスラエルの民は、繰り返し繰り返
し、主なる神さまの御前に罪を犯し、神さま
がお与えくださった恵みの契約を無にしてい
くのです。そしてその度に、神さまは、イス
ラエルに対して救いを宣言してくだされ、神
の律法に従うように求められていきました。
こうしたことが、旧約聖書において、延々と
記されていきます。エレミヤ書31:32にお
いて「わたしが彼らの主人であったにもか
かわらず、彼らはこの契約を破った」と主
が語られるとおりです。

しかし、イエスさまが活躍されるよりも600
年ほど前の預言者であるエレミヤは、31～
33節で、「見よ、わたしがイスラエルの家、
ユダの家と新

しい契約を結ぶ日が来る、と主は言われる。この契約は、かつてわたしが彼らの先祖の手を取ってエジプトの地から導き出したときに結んだものではない。……来たるべき日に、わたしがイスラエルの家と結ぶ契約はこれである、と主は言われる」と語ります。

そして、神さまが新しい契約を結ぶと預言者をとおして約束してくださってから約600年が経って、主なる神さまは、イエスさまをこの世にお遣わしくされます。そしてイエスさまは、逮捕され十字架に架かれる前の夜に、お弟子さんたちと食事（最後の晩餐）をとっておられる時に、「この杯は、あなたがたのために流される、わたしの血による新しい契約である」（ルカ22:20）とお語りになりました。つまり、預言者エレミヤによって預言されていたことは、主イエスが十字架に架かれることによって成就して、契約が結び直されるのです。

しかし、神さまが「新しい契約である」と語られるからと言って、旧約聖書の時代に神さまが結んでくださった契約と主イエスの十字架によって結ばれた契約とは、まったく異なった契約であるかといえば、そうではありません。中心的な所では同じことを約束してくださっているのです。つまり、「主なる神さまを信じているあなた

たちは、すでに神さまによって救われているのですよ。だからこそ神さまによって与えられている律法の御言葉に聞き従いなさい」ということは、旧約のイスラエルも新約に生きる私たちにも同じことが語られているのです。ただ神さまが「新しい契約だ」と語られるとおり、違いもあります。それは旧約のイスラエルの民は、罪を犯すごとに、罪を悔い改め、さらに動物の生け贄を献げることが求められました。しかし、新約の時代に生きる私たちは違います。罪を犯したら、神さまの御前に、罪を悔い改め、「ごめんなさい」と言うことは必要です。しかし旧約のイスラエルのように動物の生け贄は必要なくなったのです。これは旧約の時代との大きな違いです。なぜ生け贄がいなくなったかと言えば、私たちの罪の刑罰を、イエスさまが十字架に架かり、死を遂げられることによって、代わりに担ってくださったからです。そして私たちの罪は、イエスさまの十字架によってすべてが贖われているからです。

神さまが、イエスさまによってイスラエルの民も、私たちも救うことを、旧約の預言者をとおして預言し、約束してくださっていることに感謝しましょう。（辻 幸宏）

〔今週の暗唱聖句〕 エレミヤ書 31章31節

見よ、わたしがイスラエルの家、ユダと新しい契約を結ぶ日が来る、と主は言われる。



〈ねらい〉

「契約」は、神さまの大事な約束であり、愛のしるしである。そこに思いを向けながら、イエス・キリストがわたしたちの契約の仲保者であることを知り、「新しい」契約を受け入れることをうながす。

〈展開例〉

わたしたちはとてもたいせつなお約束をするときにどのようにしますか。神さまは、わたしたちのために大切なお約束を聖書によって、わたしたちに伝えてくださっています。「けいやく」とは、神さまの大切なお約束です。

むかし、エレミヤという人は、人々が元気を失っていたときに、神さまから望みにあふれるお言葉をいただいて、伝えました。それは、人々の心に新しい思いが与えられるというものです。

その新しい思いは、自分からすすんで神さまを愛して、神さまによろこばれることをするように

なる心です。みなさんはいかがですか。

神さまは、わたしだけにお祈りしなさい、れいはいしなさい、とお命じくさしました。また、神さまを愛して、となりびとを愛しましょうとお命じくさしました。

神さまの言われるとおりにするために、大切なことは、いつも神さまに心を向けることです。そのこころを与えてくださるために、イエスさまがわたしたちのところにきてくださいました。

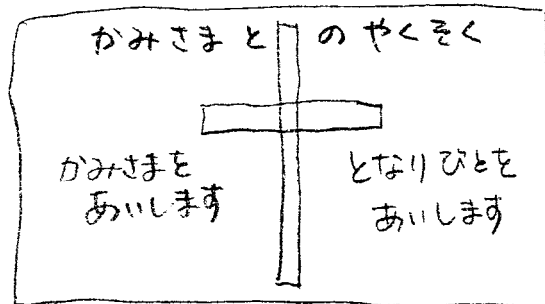
お祈りするたびに、イエスさまの十字架（じゅうじか）を思い出しながら、心からお祈りしましょう。

〈お祈り〉

天の父なる神さま、み名を賛美します。いつも神さまのみこころにしたがっていく心をお与えください。イエスさまのみ名によっておいのりします。アーメン。

〈やってみよう〉

○かみさまとの「やくそくカード」をつくりましょう



ねらい

モーセの十戒は道徳的な教えのためではなく、神様との契約を結ぶ、人間の側の感謝の応答である。神様とつながっていることが大切で、神様とつながっていれば、善い行いもできるようになる。イエス様は、新しい契約の担い手となってくださったので、イエス様と結びついていれば、自然と善い行いができるようになることを強調しよう。

展開例

イエス様を信じる人間は、心から律法をまもろうという気持ちが起こることを教える。それは、神様が心に律法を書き付けてくれるという約束がイエス様によって実現されたからである。

神様の心が聖霊によってわたしの心に伝わり、神様の心の願い＝（十戒）が心に響くようになる。心と心で向き合うことの大切さは親子関係やお友達の間でも同じことである。

話し合ってみよう！

約束を破っても、なお、新しい約束を与えて、約束を与え続けてくださる神さまの愛情を話し合ってみよう。約束を破ったお友達を赦して、なおお友達を信じることができるか、話し合ってみよう。

祈り

約束を破った人間を赦して、なお約束を与え続けてくださる神様にありがとうとお祈りします。

～1週間のミニ日記～

お家で起こった新しいことについて語りあってみよう。



お祈りしたいこと



何でも今、神様に伝えたいことがあったら、お祈りをしてみよう。

聖書日課

エレミヤ書 31章 31-34節

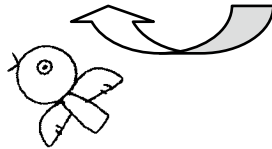
暗唱聖句

見よ、わたしがイスラエルの家、ユダと新しい契約を結ぶ日が来る、と主は言われる。

（エレミヤ 31：31）

✠聖書をひらいて (エレミヤ書 31 章 31～34 節)

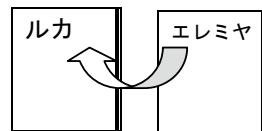
		あ		
け	い	た	や	く
		ら		
		し		
		い		
	こ	こ	ろ	
	胸	の	中	
	聖	餐		



- ・どこに記した？
- ・どこに置いた？
- ・何という？

		ふ		
		る		
		い		
け	い		や	く
い	し	の	い	た
	民	の	前	
	十	戒		

☆問題： エレミヤ書 31：31 と、 ルカ 22：20 をくらべてみましょう。



✠考えてみよう (みんなで話し合ってね！)

☒ 石の板は、人々の前に置かれたけれど、イエスさまは、私たちの「胸の中」「心に」救いの約束を与えてくださるのですね。そのためにボクも、信仰告白（受洗）をするのですか？

✠言ってみよう

問 66 罪から救い出されるために、神さまが私たちに求めておられることは何ですか？

イエスさまが勝ち取ってくださった祝福を与えていただくために、教会に与えられた〇〇〇の〇〇〇〇を用いて、イエスさまを信じ、命にいたる悔い改めをすることです。

✠やってみよう —ワン・ツーゲーム「しっかりと心の板に記すゲーム」—

- ① 今日の聖書箇所（関連）から、3～4 文字の言葉を書いた紙をいくつか用意します（けいやく・こころ・せいさん・・・等）②紙に書いてある言葉を友だちの背中に1文字ずつ大きく書いて言葉を伝えます。なんと書いたのか当てます！2組に分かれて競争します。チームワークがカギです。

✠今週の暗唱聖句(エレミヤ書 31:31)

見よ、わたしがイスラエルの家、ユダと□□□□□、
□□□□□を結ぶ日が来る、と主は言われる。



〈展開例〉

①「新しい契約」という言葉があります。「新しい」ということは、以前に与えられていた「古い契約」があるということが前提になって言われています。では、なぜ「新しい契約」が必要になったのでしょうか。もし、「古い契約」の内容に不十分だったために、それを改めるために「新しい契約」が必要となったのであれば、「古い契約」について書かれた聖書、つまり旧約聖書はあまり読む価値がないということなのでしょうか。

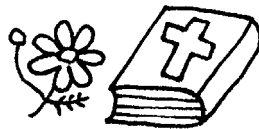
②「新しい契約」というときの「新しさとは何か」ということについて、思いを深めていきましょう。「新しい契約」の特徴について33節を見ますと、こうあります。「わたしの律法を彼らの胸に授け、彼らの心にそれを記す。」律法の内容が新しくなったというより、律法の与えられ方、結ばれ方の「新しさ」が言われています。ですから、決して律法の内容そのものを否定しているわけではありません。

③「エジプトの地から導き出したときに結んだ」契約、つまりシナイ契約では（出エ24）、律法が「石の板」に刻まれるというかたちで与えられました。「新しい契約」の場合は、「心」に刻

まれました。石の板ではなく、心に刻まれる必要があるのでしょうか。イスラエルの民は、石の板に刻まれた律法を守ることができませんでした。そこで神さまは、人間の「心」に直接に刻む、とおっしゃいます。

④新しい契約によって、神さまと民との関係も新しいものとなりました。何が関係を新しくしたのでしょうか。34節を見てみましょう。「わたしは彼の悪を赦し、再び彼らの罪に心を留めることはない。」神さまと私たちの関係を新しくするもの、それは「罪の赦し」であることが記されています。この契約は主イエス・キリストの十字架において成就しました。私たち人間の罪を背負い、十字架で死んでくださったのです。神さまは、キリストをとおして、今も、私たちと新しい関係を築こうとしておられます。

⑤「新しい契約」は心に記されました。しかし、それは自動的に、何もしなくてもよいというわけではありません。イエス・キリストをとおしてあらわされた神さまの愛を思い起こす時に（ルカ22:20、コリ一11:25）、神さまの律法の意味もよくわかるようになり、「心」から喜んで受け入れ、従おうとするのです。



テキスト マラキ書 3章19～24節

(1) 旧約聖書最後の預言マラキ書。イスラエルは捕囚から解放され、すでに神殿再建も終わった。しかし礼拝は力を失い、祭司たちは神の御旨にかなわず、社会は道義を失っています。神はイスラエルに厳しい審判を予告せねばなりません。

にもかかわらず、イスラエルへの神の愛は失われていません。神は契約への真実を保ち、その救いのために、確かなご計画をもっておられます。「わたしはあなたたちを愛してきた」(1章2節)という御言葉は、神の痛切な告白です。

(2) この神の愛と契約への熱意が、「主の日」到来の約束を支えているのです。「見よ、その日が来る」(3章19節)。旧約最後の預言として、マラキに託された「主の日」待望の使信は、単純でなく重層的で。

一方で、主の日は厳しい審判であり、不信の民を根こそぎにします。他方、「わが名を畏れ敬うあなたたち」への約束は、癒しと喜びをもたらすのです。「わたしが備えているその日に、彼はわたしにとって宝となる」(3章17節)とあるように、「主の日」は、待ち望みつつ信じる民が「宝」として発見される喜びの日です。

(3) 他方で、「主の日」は「義の太陽が昇る」ことによって、イスラエルと世界を覆う闇を光に変えます。義は、神のもたらす命と救いだからです。義の太陽から伸びる「翼」(20)は、太陽の放つ光線でしょう。その光は、病む者を「いやす力」を宿しています。

神への信頼をこめて、義の太陽を迎えるまことの「イスラエル」は、大きな喜びを経験するでしょう。寒さに震えながら夜の「牛舎」で忍耐した「子牛」たちは、明るい恵みの草原に解き放たれ、「踊り出て跳び回る」のです(同)。まことの救いである「義の太陽」(イエス・キリスト)の光を浴

びる信仰者の喜びです(使徒3章6～8節参照)。

(4) 義の太陽の出現に、どのように備えるのでしょうか。待降節に生きる私たちの祈りと課題がそこにあります。

マラキ時代のイスラエルは、神の愛への信頼を失い、神が「父」となってくださるほどの恵みの「契約」をみずから反故にしました。そこで主なる神は警告します。「わが僕モーセの教えを思い起こせ」(22)。神がモーセを通して与えた契約の恵みを「思い起こす」のです。個々の律法を行うことより、もっと重要なことは、神との契約に立ち返ることです。

思い起こす(想起)。それは聖餐の礼典で繰りかえし求められる、キリスト者の責任です。待降節の今、既に実現している贖いの恵みを、新たな経験として「想起」することは、全てのキリスト者の喜びです。すでに来ている恵みを、来らんとする恵みとして待望する。その時、繰り返されるクリスマスの暦は、過去のどの年にもまさる救いの追体験を生み出します。

(5)「父の心を子に、子の心を父に」(24)は、契約への真実な立ち返りを促す言葉と思われます。神関係のねじれが、父-子の世代間の断絶を生む根本的な原因でもあります。

このような神への転換(転向)を促すために、神は、エリヤを主イエスに先立って送られました。主イエスは、洗礼者ヨハネこそ、そのエリヤだと語られます(マタイ11章14節)。

ヨハネが「主の日」到来の門口に立ってキリストを指さしたように、教会は、キリストにある終末を指さす証人として、待降節の中に立っています。「転向して神に向かえ」と叫びつつ。

(小野静雄)

※第27号(2003年12月2日分)より再掲載。

テキスト マラキ書 3章19～24節

参照カテキズム 子どもカテキズム 問1～6, 36

ウェストミンスター小教理 問1～3, 37, 38

〔単元のねらい〕

旧約聖書の最後の御言葉を学ぶにあたって、救済史における旧約聖書の位置づけを確認していただきたい。旧約聖書は、救い主であるイエス・キリストを指し示し、イスラエルに対して罪の悔い改めと主なる神さまのみが唯一の主であると信じるように求めています。しかしそれは同時に、終末の日における最後の審判と神の国の完成へと目が向けられています。

「天国の喜びに生きる」

みんなは、なぜ聖書ってこんなに分厚いのだろうか、全部読む事など出来ないと思うこともあるかと思います。特に、新約聖書はイエスさまのお話しが中心だから分かるのだけれども、旧約聖書は長いし、分からないと思っているお友だちもいるかと思います。

しかし、みんなは、教会学校の礼拝において約2年で、飛び飛びであります旧約聖書を読んできたのです。また、リジョイスのいのちのパンを読んでいる人もいますが、いのちのパンでは3年間で、旧約聖書のすべての章を読み終えるのです。すごいことですね。

そして今日、私たちはその旧約聖書の一番最後の文書を読んでいます。旧約聖書をとおして、神さまは私たちにいろんなことをお語りくださっています。しかし神さまが私たちに語ろうとしていることは、それほど多くはありません。それは旧約聖書だけではなく、新約聖書においても同じことが言えるのですね。

- ①神さまが、天地万物をつくられ、私たち人間をもつくり、命を与え、今も神さまは私たちと一緒にいてくださること。
- ②私たち人間は、神さまの御前に罪を犯し、罪の結果としての死を避けてとおることが出来ないこと。
- ③神さまは、私たちを愛してくださり、私たちを救ってくださったこと。そのために、イエスさ

まが人となられ、十字架で死に、復活してくださったこと。

- ④イエスさまが再び来られ、最後の裁きが行われるが、神さまを信じている人には、神による救いが与えられ、永遠の生命が約束されていること。

聖書は、これらのことを、金太郎飴のように繰り返し繰り返し、私たちにお語りになっているのです。とくに旧約聖書では、これから救い主であるイエスさまが来られるから、自分たちの罪を悔い改めて、神さまを信じなさいと、語り続けているのです。

旧約聖書の最後にあります預言者マラキの預言は、「見よ、その日が来る」と高らかに預言します。いきなり「その日」と言われても、「それは何時だ？」と思うでしょう。旧約の預言者であるマラキは、主イエス・キリストの十字架による救いを覚えつつ、一気に終末の完成の時、つまりイエスさまが再びこの世に来られ、最後の審判を行われ、神さまによって愛され、救われている私たちを神の国・天国に導いて永遠の生命をお与えくださる時のことを語ります。つまり、イエスさまが活躍されるよりずっと前の旧約聖書の時代に、神さまは終わりの時のことをお語りになります。神さまがその間の歴史を作られ、その中に私たちも毎日毎日生かされているのです。

さて、そこでどうでしょうか？ 神さまは、私たちの毎日毎日の生活をすべて御覧になっているのです。ちゃんと教会に行っているかな？ 学校に行って勉強しているかな？ 兄弟や友だちと喧嘩していないかな？ お父さん、お母さん、家族の人たちに反抗していないかな？ 悪いことを行ったり、考えたりしていないかな？ 神さまは、私たち一人ひとりのこと、私たちのすべてのことをご存じであり、関心をもって見ていてくださいます。

この神さまが、終わりの時、「炉のように燃える日が。高慢な者、悪を行う者は、すべてわらのようになる」(19)とお語りになります。神さまは私たちのすべてを知っておられるならば、悪いことをして、誰にもばれなかったけれども、神さまにはばれてしまっているのだよね。「ぼくも私も、この燃えさかる火の中に入れられ、燃やされてしまうのかな？」このように思われるお友だちもいるかと思います。確かにそうなのですよ。誰も神さまの裁きから逃れることは出来ません。神さまの御前に立つ時、先生も、そしてみんなも罪人であり、神の裁きに遭ってしまいます。

しかしです。神さまは同時に「わが名を恐れ敬

うあなたたちには義の太陽が昇る」(20)とお語りになります。神さまは、私たちを愛して下さり、私たちを救うために、神の御子イエス・キリストを人としてつかわし、イエスさまは私たちの罪を背負って十字架にお架かりくださり、死を遂げられたのです。神さまは、主なる神さまを信じて、主イエス・キリストの十字架を受け入れる人には、滅びではなく、救いを与えると宣言してくださっているのです。

だからこそ、イエスさまの十字架を信じている私たちは、もう神さまの裁きを恐れずに、生きていくことが出来るのですね。

主なる神さまは、旧約聖書の時代から、私たちのことを覚え、私たちを救ってくださるために、イエス・キリストを人としてお送りくださり、十字架にお献げくださったのです。だからこそ、神さまに愛され、神さまの救いにある私たちは、天国における希望と喜びに生きることが出来るのです。その日が来れば、もう苦しみも悲しみもありません。神さまがお与えくださる天国の喜びに、希望をもって歩み続けましょう。(辻 幸宏)

〔今週の暗唱聖句〕 ヨハネの黙示録 22章20, 21節

以上すべてを証しする方が、言われる。「然り、わたしはすぐに来る。」

アーメン、主イエスよ、来てください。主イエスの恵みが、すべての者と共にあるように。



〈ねらい〉

「主の日」とは、イエスさまの来られる日であり、それは希望の日である。すでに、一度来られたイエスさまが、もう一度来られる日をともに信じるように導く。

〈展開例〉

わたしたちは、毎日、神さまから与えられて、明るいあさをむかえます。それは、暗いよるから明るいあさをむかえることはうれしいことです。もし、ずーとくらいままだったら、どうでしょうか。

イエスさまはわたしたちのために、明るいあさを与えてくださるお方です。くらい間、寝静まっていた人間や動物たちが動き出すように、イエスさまの光をあびると、みんな元気になります。それは、神さまから本当ののぞみをいただくからです。

この本当ののぞみは、わたしたちがどんなに暗

いときにも、わたしたちの心にかがやくひかりです。

わたしたちのつみを背負ってくださるために、イエスさまは十字架にかかってくださいました。そして、復活して、天におられるイエスさまは、もう一度、そのひかりとともに、すべての人々のまえにあらわれてくださいます。そのひかりは、イエスさまの十字架が、本当に、つみびとを救うひかりであることを告げてくださるものです。

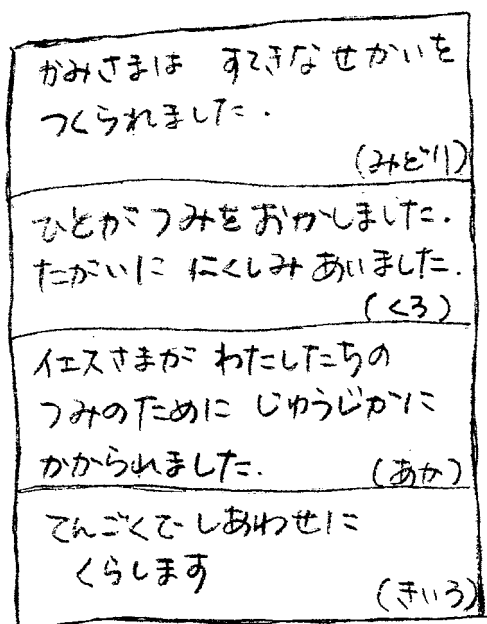
いつも、イエスさまのひかりによって、もう一度来てくださる「主の日」をいっしょに待ちましよう。

〈お祈り〉

天の父なる神さま、み名をさんびします。わたしたちの心にもいつもイエスさまを愛するひかりをおあたえください。イエスさまのみ名によっておいのりします。アーメン。

〈やってみよう〉

○よんで色をぬりましよう



ねらい

太陽が地球のすべての生きものを生かし、守り、成長させているように、神様は、わたしたちをいやすために、イエス様を義の太陽として送ってくださった。破滅をもって、この地を撃つことが目的ではない。そうならないように、神様はあらゆる努力をしておられる。

展開例

太陽の重要な働きを説明しながら、神様の働きを説明してもよい。

話し合ってみよう！

太陽の重要な働きを子どもたちと話し合ってみよう。

祈り

毎日、太陽をのぼらせ、明るい光と熱と命を生かす力を与え続けてくださる神様に感謝します。そして、その太陽のようなお方として、イエス様を与えてくださいました。神様、ありがとうございます。

～ 1週間のミニ日記 ～

明日が来ることを期待していることがあったら、話してみよう。

聖書日課

マラキ書 3章 19－24 節



お祈りしたいこと



子どもと相談して、子どもが祈りたいことを一緒に祈ってみましょう。

暗唱聖句

然り、わたしはすぐに来る。

(ヨハネの黙示録 22 : 20)

✠聖書をひらいて (マラキ書3章 19～24 節)

キ	ノ	シ	ユ
ヨ	リ	ウ	ガ
イ	タ	ス	ル
ギ	ノ	ホ	ト

★マラキ書は、イエス・キリストの救いを指し示すとともに、終末の最後の審判と神の国の完成へと目が向けられています。

☆問題：

「義の太陽が昇る」(ギノタイヨウガ ノボル)の文字を消すと、文字が出てきます。この文字を組み合わせると、どんな言葉になりますか？

ヒント：「義の太陽」とは？ ♪♪♪ _____

✠考えてみよう (みんなで話し合ってね！)

☒「最後の審判」「神の国の完成」のことは、旧約聖書にも、イエスさまのことばにもたくさん出てきますね。イエスさまは、「10人のおとめのたとえ」(マタイ 25 章)を通して、お話になりました。ボクたちは、どのようにして、その「時」を待てばいいのですか？

✠言ってみよう

問 36

死んだあと
はどうなり
ますか。

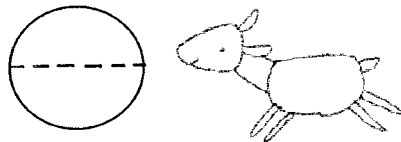
死んで終わりではありません。私たちの魂は完全に聖められ、天の国に入れます。私たちの体はイエスさまと共にあり、イエスさまがよみがえられたように 再臨の日にくちない体によみがえり、魂と一つにされます。死ぬまで、そして死んでからも、イエスさまと私たちは〇〇〇です。救われた私たちは、〇〇〇〇に神さまを喜ぶことができるので

✠やってみよう —ワン・ツー・エー—「ユラユラ元気な、子牛の時間割表」

①紙皿を半分に折ります。

②片面に子牛の絵を貼ります(参照P.113)

もう一方の面に、時間割表を書き(貼り)ます。



✠今週の暗唱聖句 (ヨハネの黙示録 22 章 20、21 節)

以上すべてを証しする方が言われる。「然り、わたしはすぐに
来る」アーメン、主イエスよ、□□□□□□。
主イエスの恵みが、すべての者と共にあるように。

〈展開例〉

①「見よ、その日が来る」(19)「その日」とは「主の日」のことです。やがて救い主としてこの世界に来てくださる主イエス・キリストの到来、さらには、キリストの再臨によってもたらされる終末の日を預言しています。

②「その日」には、いったいどういうことが起こるのでしょうか。19節には、「炉のように燃える日」とあります。これは神さまの裁きを表わしています。そして、高慢な者、悪を行う者は、わらのようになり、燃え尽くされてしまうということです。読んでいて恐ろしい光景です。この世の終わりについては、聖書だけではなく、色んな人たちが色んなふうに想像します。どうも私たちは、終末を取り上げたこの世の物語に影響されてしまうことがあるかもしれません。聖書にも書いているから、やはり終わりの日には恐ろしいことが起こるのだと。あるいは、今を生きること精一杯で、終わりの日について、それほど関心がないという人もいるでしょう。私も幼い頃から教会に通っていましたが、正直、終わりの日について、深く考えたわけではありません。強いて言うなら、天国と地獄があるくらいにしか、思っていませんでした。

③終わりの日には、19節や21節にあるように、神さまの裁きの面がまったくないわけではありません。でも、今回の箇所には、終わりの日に起こるもうひとつの側面が記されています。20節を見てみましょう。「しかし、わが名を畏れ敬うあなたたちには……」とあるように、神に従う者たちのことについて記されています。そして、その日は、神さまを信じる者たちが、「宝」として発見される、喜びの日でもあります(17節)。

④自分は前者の「高慢な者、悪を行う者」に属するのか、あるいは後者の「神の名を畏れ敬う者」に属するのか、自分はどちらなのか分からないかもしれません。私も高校生の時(既に信仰告白をしていましたが)、正直、分かりませんでした。なぜかと言うと、神さまを信じつつも、なお自分の心の中には、高慢な思いがあり、悪に支配されているかのような思いに捕らわれることがよくあったからです。

⑤神さまは、「滅ぼされたくなかったら、わたしを信じなさい」という仕方で、私たちを信仰に導かれる方ではありません。もし、そういう仕方で信仰に導かれても、その人にとって、神さまは恐ろしい方であり続けます。そこには喜びはありません。喜びのない信仰を神さまはお望みになるはずはないのです。22節には、「思い起こせ」という主の言葉が記されています。モーセを通して与えられた契約を思い起こすようにというのです。そこには、イスラエルの民に対する、神さまの憐れみと愛が示されています。神さまはどんなことがあっても、罪の誘惑に負けてしまったとしても、私を見捨てることなく、愛してくださるという確信をいつも思い起こしているならば、神さまの裁きを前にして、変に怯えることはありません。神さまの恵みを思い起こし、十字架の主のもとに立ち帰りましょう。

⑥「わたしが来て、破滅をもって この地を打つことがないように」(24節)の言葉は、今も変わることはありません。ですから、神さまを信じている者は、神さまに逆らう者を踏みつけるような生き方をしてはいけません(21節)。主のみ翼の中に多くの人が招かれますように、御心が行われますようにと、祈りつつ歩みましょう。



冒頭は神礼拝に集う会衆への呼びかけと応答で、旧約の信仰者たちは神の御名を呼ぶとき、その恵みと慈しみを想い起すよう促される。「恵み深い」は、原語では「善い」という語。2節には「言葉にできないほど」とあるから、人間の言葉では表現できないほどの善いお方を前にして、会衆は神をほめたたえていた、と分かる。救いの完成を願う祈りと罪の告白とが後続するが、その前提として、永遠に善い方である神への、会衆の側からの全面的な信頼が寄せられる。

3節では、善い神に対する相応しい人の在り方が示される。「いかに幸いなことか」と詩編の慣用句で導かれて、幸いなのは「裁きを守り、どのような時にも恵みの業を果たす人」だと言われる。その意図は、神がモーセを通して与えた教えに従って、不正を行わず、隣人に対して真実に、責任ある行動を取る人、ということ。旧約聖書でいうところの「義人」である。こうして、神の真実、人の真実が互いに向き合いつつ、この詩編の礼拝は成立する。問題は、「義人」という人の側についての表明だが、この後に「私は罪を犯した」との告白があることから、その意義も推察されよう。これは本来の神と人との有り様であり、真の「幸い」が成立する基準である。互いの真実な関係は、理想というよりもゴールであろう。

4節と5節にある祈りの言葉では、神と会衆との距離感が縮まり「わたしとあなた」という関係になる。申命記に顕著な言葉づかいで、会衆の中にいる一人の「わたし」が呼び出される。善い方である神の眼差しは一人ひとりを見逃さず、集う皆がここにある願いを祈るよう促す。主の御前に集う会衆は、こうして心をつにして「わたしたち」の告白に向かう。

6節以降、本詩編の中心部をなす罪の告白が綴られるが、初めに6節で会衆全体の率直な罪の告白が述べられる。物語られる先祖たちの罪の歴史は、旧約の信仰者たちにとって他人事ではない。「彼らは」と三人称で述べられても、それは自分

たちが神の御前にあってそうだったという自覚に基づく。イスラエルは罪の歴史を身に負う。この詩編には自らの弱さや人間の罪性についての深い受け止め方がある。これは、神はどこまでも善い方であり続けるという神について聖書が記していることと対になる人間についての聖書の教えであり、我々は、神がどなたであり私は誰かということ、イスラエルの歩みに則して知らされる。

7節から42節にかけて7つ乃至8つの段落に分けて先祖たちの歩みが綴られるが、時代でいえば葦の海渡渉の出来事から王国時代の反省にまで至る、旧約歴史の一つの要約になる。普通、このように自国の歴史を綴る民族は無く、今であれば自虐史観などと非難されかねない。しかし、これがイスラエルの、神の民としての自覚に欠かせない要素となる。この罪の歩みを振り返って信仰者たちは生ける神の御前にある自分を知る。

43節から46節の総括部に描かれている先祖たちは、自らの罪によって墮落し、災いに遭い、天に向かって叫びをあげる人々である。それに対して、イスラエルと常に共にあった主は彼らを憐れんで契約を解消せず、滅びかけた彼らを見捨てることはなさない神であった。冒頭で呼びかけられた「善い方」とは、そのようにイスラエルが罪の歴史を歩む中で確認された「善い方」であった。

終りにも附せられた切なる願いと「ハレルヤ」との賛美はいつも表裏一体の関係にある。教会はイスラエルの先祖と共に、神を忘れ、御言葉を信じないで、この世の様々な災いに巻き込まれて動揺する。しかし、そうした罪深さや弱さを神は憐れみ、礼拝の賛美の中へ招き入れる。キリストもまた、十字架というこの世の不幸を背負ったが、それによって教会は決して破れない神との契約の中に保たれる。イスラエルの長い歴史を通して御自身を表された全能者なる神は、罪ある人を見捨てないとの証しを、キリストにおいて決定的にされた。我々はその恵みのもとに集うことが許されている。(牧野信成)

テキスト 詩編 106編

参照カテキズム 子どもカテキズム 問17～19, 64

〔単元のねらい〕

自分の罪を認めることはいつの時代にあっても難しい課題です。特に今日、社会倫理が流動化した状況の中に子どもたちは放り込まれ、親の世代も適切な指針を与え損ねてしまいます。しかし、教会には聖書の導きを与えられ、信仰者はそこに描かれたイスラエルの民の歩みを鏡として自分の罪を見るように促されます。イスラエルの罪を特殊なものと看做さずに、神に背く墮落した人間の本性として正しく受け止めることが、神の憐れみに触れるためには欠かせません。

「イスラエルの罪はわたしの罪」

何か失敗をしてしまったとき、ごめんなさい、と素直にいえたらいいね。そうしたら、いつまでも喧嘩したままでいたり、お互いに気持ちわるい感じをもたないですむ。でも、怒られるのが怖いから、相手に謝ることができないこともある。馬鹿にされるのも嫌だし。

神さまに対しても、「ごめんなさい」と、真っすぐな心でいえたらいい。私たちはいつも罪を犯してしまうから。心の中や、口にする言葉や、実際にしてしまう事に、悪いものが入ってしまう。神さまが天からご覧になっているのに、つい忘れる。

でも、神さまは私たちのことをすべてご存知だから、悪いと思ったらすぐ謝ろう。神さまはその真っすぐな心を受け止めてくれる。天の神さまは人を悲しませる悪を放っては置かれない。けれども、私たちが間違ったことを「悪かった」と素直に認めるなら、もう二度としないようにといって許してくれる。

この間、映画を見た。おじいさんが病気になった弟に会うために、トラクターに乗って旅をする。時速8キロしか出ないから、人が歩くよりも少し早いくらい。大きなトラックが後ろからバンバン追い抜いていく。途中で高校生くらいの女の子に

出会う。その子はヒッチハイクをしようと道端に立っていた。おじいさんは手を挙げて挨拶をしてその子の前を通り過ぎた。夜になってお爺さんは野宿をすることにした。晩御飯のために焚き火をたいてソーセージを焼いた。そこへさっきの女の子がやってきた。結局、誰も車を止めてはくれなくて、その子は道を歩いてきておじいさんの焚き火を見つけたんだ。おじいさんは「おながすいたろう」といって、焚き火で焼いたソーセージを枝に差して女の子にあげた。「家出をしたのかい」と訊くと、家の人はみんな自分を嫌っている、という。その女の子のお腹には赤ちゃんがいることにおじいさんは気がついてた。おじいさんはその子に言った、「でも、君と赤ちゃんがいなくなっていくと思う程、みんなは君のことを嫌ってはいないと思うよ」。次の朝、目が覚めた時、女の子はもういなくなっていた。おじいさんの言った通りだと気づいて、お家に帰ったんだ。

天の父なる神さまも同じ。私たちが悪いことをしてしまっても、私たちがどこかへ行ってしまうばいい、死んでしまえばいいなんて思わない。

旧約聖書に出てくるイスラエルの人々は、昔から聞いてきた神さまの言葉によって、そのことをよく知っていた。自分たちはいつも失敗してしまうということ。人間は罪深くて、父なる神さまのもとを離れていってしまうこと。そして、そんな

私たちを神さまは見捨てないで愛しておられることを。

旧約聖書の物語には、神さまが選んだイスラエルの人々がどんなふうに神さまを信じて、どんなふうに神さまに背いたかが書かれている。それを短く要約して、この詩編では紹介してくれている。

モーセに導かれてエジプトから出て行った時、イスラエルの人々は海を目の前にして立ち往生した。エジプトの軍隊が後を追って迫ってきた。すると、みんなは「私たちを殺すためにエジプトを出したのか」とモーセを責めた。神さまが助けてくださることを信じなかった。

荒れ野を旅する途中、水と食糧が無くなった。みんな喉が渴いて、お腹がすいて、モーセと神さまに不平をいい、肉が食べたい、エジプトに帰りたい、などと言った。エジプトで自分たちがどんなに苦しい目に遭っていたかを忘れた。

神さまが約束されたカナン之地へいよいよ入っていく時、そこに住んでいる人たちがとても強いを見て、イスラエルは怖気づいてしまった。主なる神さまが闘うと言っておられるのに、それを信じないで勝手に帰ろうとしたり、勝手に闘いに出たりした。

イスラエルを救ってくれたのは主なる神さまなのに、人々は神さま以外のものを拝もうとした。モーセが山に登って姿が見えなくなると、人々は不安になって金の子牛の像を造った。カナンの土地に入って立派な王国を作った後でも、カナンに昔から住んでいる人々の習慣に合わせて、そこにあった偶像を拝むようになった。

海を渡るときでも、飢え死にしそうときでも、神さまはいつもイスラエルを助けてくれた。わがままな子どものようなイスラエルだったけれども、神さまは自分の子どものように大切にしておられた。けれども、イスラエルは度々、神さまを忘れて離れて行った。そして、この詩編を声を出

して読んでいる、礼拝に集まった人たちは、「わたしたちも一緒です」と言っている。神さまを信じて、神さまの教えにしっかり従って生きていくことは易しくない。昔の人たちが何度も神さまに背いたように、今の私も罪を犯しています、この詩編を歌う人は告白している。

失敗したことを人に見られるのはカッコ悪い。旧約聖書のイスラエルは恥ずかしいことを沢山した。でも、罪の問題は、恥ずかしいとか格好が悪いとは言っていられない。罪によって人が死んでしまう。神さまから離れて、沢山の人が死に、子どもたちさえ犠牲になる。「ごめんなさい」と謝ることは、人が神さまの前で生きていくためにどうしても必要なことなんだ。

天の神さまは、御自分のことを何度も忘れてしまう私たちのために、最後にイエスさまを送ってくださった。私たちが罪を犯して滅びてしまわないように、イエスさまが罪の裁きを私たちに代わって受けてくださった。イエスさまは私たちを兄弟姉妹にしてくれた。信じるみんなは、イエスさまと一緒に、今は神の子どもだ。天国に行くまで、私たちは何度も罪を犯してしまう。けれども、私たちはそんな悲惨なところに放って置かれていない。礼拝の度に、すなおに自分の罪を思い起こそう。その度に、天の父なる神さまが私たちの告白を待っていることを思い出そう。イエスさまが私たちと一緒にいることを確かめよう。

「ハレルヤ」という言葉には、こんなに素晴らしい神さまがほかにあるだろうかという驚きがある。私たちが礼拝するのは、罪人を憐れんで、悪と戦ってくださる善い神さま。いつでも、神さまを賛美していることが、神さまを忘れない秘訣。

(牧野信成)

[今週の暗唱聖句] ローマの信徒への手紙 3章23,24節

人は皆、罪を犯して神の栄光を受けられなくなっていますが、
ただキリスト・イエスによる贖いの業を通して、
神の恵みにより無償で義とされるのです。

〈ねらい〉

小さなこどもにも心に残っていることがたくさんあります。神さまはわたしたちのために、「歴史」を遺してください。それは、わたしたちが善いことを尊び、そうでないことを避けるためにも大切なものであることを教えたい。

〈展開例〉

みなさんは、生まれた日のことを知っていますか。お父さんも、お母さんも、教会のみなさんも、みんなのおたんじょうをとともよろこんでくれたでしょう。

神さまは、わたしたちのために、せいしよという神さまとともに歩んだ人たちの「れきし」を書きのこしてくださいました。それは、よいことも、そうではないわるいことも、そのまま書き記したものです。人間は、よいこととわるいことを見分けながら生活をしますが、なかなか、よいことだけをつづけることができません。そればかりか、

けんかをして、お互いをいため合うことが多いです。

イエスさまはそのようなわたしたちのために十字架にかかってくださって、せいしよに書かれている「れきし」をただしくまなぶようにしてくださいました。イエスさまのもとに集められるひととは、みな、せいしよを自分のために書かれたものとしていっしょうけんめい読みます。そして、せいしよのお話をいっしょうけんめい聞きます。

わたしたちも、みんな、神さまが、わたしたちのためにくださる「れきし」の中をいっしょに歩んでいきましょう。

〈お祈り〉

天の父なる神さま、み名をさんびします。どうか、わたしたちの心に、あなたとあなたの大切にしている人々を大切にする心をお与えください。イエスさまのみ名によっておいのりします。アーメン。

〈やってみよう〉

○あんしょうせいく（詩編106編1節）

「ハレルヤ。

めぐみふかい しゅに かんしゃせよ。

いつくしみはとこしえに。」

○かんしゃすること、うれしいことをかぞえてみましょう。



ねらい

「恵み深い主に感謝せよ、慈しみはとこしえに。」この言葉をめぐって、説明しよう。

神様の「善さ」は、どんな悪でも、その悪を乗り越えて善さを与えてくださる、恵み・慈しみであることを伝えよう。価値のないものに価値を造り出す愛がいつまでも続く、そのような神であることをつたえよう。

話し合ってみよう！

古い契約の書と新しい契約の書が一冊にまとめられていることを考えてみよう。

祈り

神様が、ずっと昔からイエス様のことを約束してくださっていたことを感謝します。

展開例

古い契約はすべて、新しい契約であるイエス・キリストを指差していることがわかればよい。イスラエルのすべての出来事をこの視点で学んでみよう。

～ 1週間のミニ日記 ～

何でも好きなことを振り返って書いてみよう。それを発表できたら発表してみよう。



お祈りしたいこと



お友達のことをお祈りしよう。

聖書日課

詩編 106 編 1 節

暗唱聖句

恵み深い主に感謝せよ、
慈しみはとこしえに。

(詩編 106 : 17)

✠聖書をひらいて（詩編 106 編）

ぐ	う	ぞ	う	れ	い
は	い	い	つ	く	せ
ん	し	ね	た	み	ふ
こ	み	は	と	こ	し
う	え	に	だ	ら	く

☆問題：詩編 106 編に出てきたイスラエルの民の罪

（不正・反抗・偶像礼拝・墮落・ねたみ）が、

この鏡の中にかくれています（タテ・ヨコ・サカサマ）。その言葉を消すとみことばが出てきます。何と書いてあるのかな？

★イスラエルの民の歩みを鏡にすると、自分の罪も見えてくるね。



こたえ



✠考えてみよう（みんなで話し合ってね！（^_^）☆）

わたしの心の中をもし、懐中電灯でのぞくことができれば、おこりんぼ虫、わるくち虫、無視虫など、かなり寄生しています。それでも神さま子どもになれますか？（Nちゃん・10才）

✠言ってみよう

問 64 神さまの戒めを完全守れる人はいますか？

真の人であられる〇〇〇〇〇のほか、だれもいません。私たちは、毎日、おもいことばとおこないによってやぶっています。私たちは、完全に神さまにそむいている〇〇〇〇なのです。

✠やってみよう —ワン・ツー・ゲーム—「マナ、食べよ！」

★神さまは、かたくなな民を、天から降ってきたマナで、やしなってくださいました。

①「リッツ」（クラッカー）などを用意して、2枚重ねて、中にジャム・わさびなどをぬります②それを並べて置き、自由に選んで、「おいしそうに」食べてもらいます。わさびが入っていた人をあてます。

✠今週の暗唱聖句（ローマの信徒への手紙3章 24～25）

人は皆、罪を犯して神の栄光を受けられなくなっていますが、ただキリスト・イエスによるあがないの業を通して、神の

□ □ □ により無償で □ とされるのです。

〈展開例〉

①詩編106編には、旧約の民が辿った歴史がまとめられています。詩編106編全体を読んで、私たちはここを読んでどのような感想を抱くでしょうか。読んで気付かされることの一つは、あまりにも多くのイスラエルの民の「罪」が語られていることです(6-46節)。では、なぜ聖書は人間の「罪」をはっきりと語るのでしょうか。「おまえはダメなやつ」だということを語ろうとしているのでしょうか。私たちは「罪」と呼ばれるものが、少しは自分の中にあることを知っています。しかし、そこで「お前は罪人だ」とズバリ言われると、逆に腹を立てたり、自分はそこまで悪い人間ではないと、言い訳をして、自分をごまかそうとします。そうすると、罪人に語りかける神さまの愛に対しても、耳を閉ざしてしまうということに成りかねません。

②そうであるならば、この詩編を書いた詩人の意図はどこにあるのでしょうか。詩編106編は、礼拝における賛美への招きから始まっています。賛美をすることができるということは、神さまが「恵み深い主」であることを知っているということです(1節)。イスラエルの民の歴史をとおして、示された真理がここにあります。だからこそ、私たちは罪を告白することへと導かれていくのではないのでしょうか。信仰は、神さまが私たちを愛してくださった愛から始まります。神さまが行ってくださったことから始まるのです。私たちは救われるために、罪を告白し、悔い改める必要があります。しかし、それよりも先に、神さまがキリストをとおして、既に私たちのためにしてくださったことを喜びましょう。ある人が、「キリスト者だけが罪人である」と言っていたことを思い起こします。「キリスト者だけ」というのは、どういうことでしょ

うか。それは、自分がどれほど愛されているかを知っている者だけが、その愛を自分がどれほど裏切って来たかが分かるようになる、という意味です。この詩編を書いた詩人の歌と重なるところがあるのではないのでしょうか。

③私たちの罪に対する、神さまの怒りをなだめるためにはどうしたらよいかを考えてみましょう。決して赦しは、自動的に起こるわけではありません。23節を見てみましょう。「破れを担って御前に立ち」とあります。ここで、神と人間の破れのただ中に、執り成し手として立ったのはモーセです。モーセの執り成しのゆえに、神さまの民を滅ぼすことをおやめになりました(出エ32:11-32参照)。神が民を滅ぼすことをおやめになったのは、モーセの執り成しのゆえではありますが、「彼らに対する契約を思い起こし／豊かな慈しみに従って思いなおし」(45節)とあるように、神さまご自身の真実のゆえでもあります。だから幾度も幾度も、罪から助け出そうとされるのです。

④神の「契約」に基づいて、やがて地上に来られた主イエスは、まことの仲保者として、神と人間の破れを執り成してくださいました。しかも、主イエスはまったく罪を犯さなかったにもかかわらず、神さまからの怒りと呪いを一身に背負い、十字架につけられたのです。主は十字架の上でこのように祈られました。「父よ、彼らをお赦しください。自分が何をしているのか知らないのです」(ルカ23:34)。主イエスの十字架上での執り成しの祈りに神さまは答えてくださいました。教会の礼拝には、イエス・キリストによって、賛美の歌声が回復させられた者たちの声が満ち溢れています。



〈背景と文脈〉

主イエスは、公生涯の初期にはガリラヤ地方を中心に働かれた。9章35～38節はそのまとめである。このあと十二使徒が選ばれ(10:1-4)、さらなる宣教の拡大へと発展していく。4章23～25節を通して、主のお働きは、ガリラヤ地方に住む人々だけを対象にしたものではなく、シリア、デカポリス、エルサレム、ユダヤ、ヨルダン川の向こう側から来た大勢の群衆をも含んでいたことがわかる。彼らに福音を宣べ伝え、教えを説き、病人をいやされるという多忙なお働きのなかで、主は宣教の必要性と緊急性を強く感じられた。群衆が霊的に飢え渴き、瀕死の状態にあるのを目の当たりにされたからである。

〈伝道の必要性と緊急性 (9:35-38)〉

羊飼いと羊は、旧約聖書でも新約聖書でも、神と神の民の関係を表す比喻として、あるいは、神に任命された民の指導者と民の関係の比喻として使われている。羊飼いの仕事のひとつは群れを導くことである。羊は導かれなければ迷う方向音痴な動物だと言われている。自分だけでは正しい道を見いだせず、生命の危険にさらされる。羊を青草の原に休ませ、憩いの水のほとりに伴うのは羊飼いの仕事である(詩編23:1-3)。どこで羊の命が回復されるかを知っていて、そこに導く羊飼いの働きなしには、羊は飢え渴き、弱り果ててしまうのである。

主は、群衆が飼い主のいない羊のように、傷つき、苦しみ、飢え渴き、弱り果て、命を脅かされている状況を目の当たりにされ、深く憐れまれた。「深く憐れまれた」と訳されている語は、人の最も奥深いところが動かされることを意味する。霊的に飢え渴き、弱り果てた群衆をご覧になられて、主は深く憐れまれた。そして、福音の宣教が必要かつ急務であることを強く感じられたのである。

群衆が飼う者のいない羊のようである、という一見ネガティブで、目を覆いたくなるような光景

が、主の目にはポジティブな光景に映った。霊的に瀕死の状態は宣教の絶好の機会でもある。群衆の姿は、すでに実りの時期が来て刈り入れを待っている畑、すなわち福音を受け入れる準備ができている姿として主の目に映った。それで弟子たちに、収穫のための働き手を送ってくれるよう、収穫の主に願いなさい、と命じられたのである。収穫の主とは、畑の持主である。持主は働き手を収穫の畑に送って収穫をし、倉に納める。霊の収穫における主権者は神である。収穫の主である神に、だれかを遣わすように、という他人の祈りをするよう命じられたのではない。福音の宣教が急務であることを彼らに気付かせ、彼ら自身が宣教に重荷をもち、遣わされて行くための心の準備をさせられたのである。

〈十二使徒の選び (12:1-4)〉

弟子たちに、収穫のための働き手を願いなさい、と祈りを命じられた主は、まずそのための働き手として十二使徒を選ばれた。

「使徒」は権能を与えられて、特別な任務のために遣わされる者を意味する。主イエスは多くの弟子をもっておられたが、特にその中から十二人を使徒として選ばれた。そして彼らに汚れた霊を追出し、あらゆる病気をいやす権能を与えられた(12:1)。彼らは、その権能を携えて宣教の地へ遣わされた。彼らは主イエスと生活を共にし、教えと訓練を受けた。そして主の昇天後、聖霊降臨(使徒2章)によって聖霊の力を与えられ、主の宣教の働きを継承した。彼らは、初期のキリスト教会を建て上げていくための中心的な働きをした。

私たちすべてのキリスト者は、福音によって救われ、福音の宣教のために遣わされている。主が私たちの目を開いて、霊的に飢え渴いている人々を見させてくださり、重荷と情熱をもって主に仕えていけるよう祈り求めたいと思う。(後藤公子)

テキスト ヨハネによる福音書 9章35節～10章4節

参照カテキズム 子どもカテキズム 問81

〔単元のねらい〕

カリキュラムは、旧約を終え新約に戻ります。その最初に、十二弟子の選出の記事が取り扱われます。主イエスは、イスラエルの十二部族を暗示する彼らを用いて、神の国の福音宣教を推進なさいます。そのために、彼らは、派遣なさる神のお心を知らなければなりません。暗唱聖句は、それを凝縮して示しています。「深く憐れまれる」神の驚くべき愛を知らなければ、主に仕え、また、主と共に神と隣人に仕えることはできません。はらわたを震わせる神の愛の波動は、遂に聖霊降臨によって、弟子たちを突き動かします。そして、わたしたちも子どもたちも同じです。神の愛に生かされ、上からの力を注がれるところからしか出発できません。この礼拝式においても神の愛を語り、神の愛を豊かに受けましょう。その上で、神のお心は、その愛を分かち合うこと、そのために選ばれて教会に招かれていることを語りましょう。主イエスの弟子とされていることを、感謝と喜びをもって語り、その自覚を共に深めて参りましょう。

「痛むほどに愛されている私たち」

先週のお話を覚えていますか。旧約聖書には、イエスさまのお名前は出て来ません。けれどもやっぱり、イエスさまのことが中心だったわけですね。今日から、新約聖書に戻ります。マタイによる福音書を通して、イエスさまについて学んで、神さまを礼拝して行きましょう。

さて、イエスさまは、ヨハネから洗礼を受けられた後、旧約聖書に約束されていた通りのお働きを始められます。ガリラヤの町々、村々を残らず回って、一人一人に「ほら、神さまの国は近づきましたよ。もう、ここに始まっていますよ。だから、悔い改めて、天国に入りましょう」と語り続けられました。言葉だけではなく、神さまの国がもう目の前に始まっていることを分からせるために、ありとあらゆる病気や体の不自由さに苦しみ、悩み、悲しんでいた人たちをいやされました。

しかし、それにしてもです。どうして、イエスさまは、毎日毎日、こんなに激しくお仕事をなさるのでしょうか。それは、イエスさまが、出会う人々、そのひとり一人を、このようにご覧になら

れたからです。「飼い主のいない羊のように弱り果て、打ちひしがれている」。(36節) つまり、イエスさまの御目には、人々が、「このままだと死んでしまう！」という危機的な状態に映っているのです。

多くのお友達は、羊さんを見たことがあるでしょう。羊は、必ず、柵の中にいます。そして群で行動しています。外に出る時には、必ず、羊飼いさんが一緒です。なぜかという、羊の運動神経は、ものすごく悪いからなのです。みんなは、羊さんが、ビュンビュン走って追いかけてまわしたり、狼や動物に襲いかかってみついたりしているところを見たことがありますか。絶対にはいはずです。羊は、足がおそく、目も悪いのです。10メートル先を見通すこともできません。羊ほど、弱い動物はいないかもしれません。

今、セーターを着ているお友達がいますね。そのセーターは、きっと毛糸、つまり羊の毛で編まれていると思います。100%ウールだったら、高級品です。暖かいそのセーターは、羊のおかげです。こうして、大昔から羊は人間に大切に育てら

れてきたのです。もし、羊が人間と出会わなければ、お水をゆっくり飲むこともできず、何より、狼に食べ尽くされてしまって、今頃、絶滅していたかもしれません。

さて、イエスさまは、すべての人たちをご覧になって、まさに「飼い主のいない羊のようだ」と思われました。しかも、「ああ、かわいそうになぁ」と上から目線で見つめて、そのまま通りすぎられるのではありません。「深く憐れん」でくださったのです。

この「深く憐れむ」という聖書の御言葉は、聖書の中でも、とても大切なことをあらわす御言葉の一つです。それは、もともと「お腹が痛む」という意味を持っている言葉なのです。お腹がギュッと締め付けられる、ギリギリと痛む。あまりに痛くて、苦しくて、のたうちまわるくらいの激しい痛みをあらわす言葉なのです。そのような言葉が、神さまの憐れみをあらわす言葉として用いられています。神さまは、ほくたち私たち人間をそれほどまでに激しい愛で愛しておられるのです。

イエスさまは、ほくたち私たちのことを、口先だけで愛されたものではありません。ほくたち私たちを天国に入れるために、十字架にかかってくださり、木の上で恐ろしい苦しみを苦しみ抜いてくださったのです。イエスさまの十字架を見れば、深く憐れんでくださる神さまの愛が見えて来ます。

ほくたち私たちは、羊が羊飼いといっしょにいないと生きられないように、天のお父さま、イエスさまと一緒にいてくださらなければ本当には生きていけないのです。このままだと、死んでしまうと見ておられるのです。だから、天のお父さまは、愛する独り子のイエスさまを十字架にはりつける苦しみをこらえてくださったのです。この激しい愛で、ほくたち私たちを今日この時も、い

つでも、どこでも愛し続けていてくださいます。

ほくたち私たちは、今、教会にきています。それは、イエスさまが、こんなすばらしい愛を注ぐためです。つまりほくたち私たちは今ここで、神さまの愛でギュッと抱きしめられています。そのために、イエスさまが、この礼拝堂にお招きくださったのです。そして、イエスさまは今朝、あなたにこう告げられます。「あなたもわたしの弟子になりなさい。」

十二人のお弟子さんたちは、神さまの愛のお心を知らされました。イエスさまは、彼らに、イエスさまのお手伝いをするように、イエスさまと同じことをするようにと、呼びかけ、選ばれました。イエスさまは、この弟子さんたちにも、イエスさまと同じ力を与えてくださったのです。その一人にこの福音書を書いたマタイさんもいます。

皆だったらこんなとき、どうしますか。「もう、このままだと死んでしまう！」ぼろぼろに傷ついて道端に倒れている人がいたら、どうしますか。携帯があれば、すぐに、救急車を呼ぶかもしれません。何もなければ、大声で、「だれか、助けてください。人が倒れています！」と叫ぶかもしれません。自分の服を脱いで着せてあげたり、声をかけて励ましてあげたりするかもしれません。

イエスさまは、あなたのことも、あなたのお友達のことも、「かわいそう」と見ておられます。イエスさまが弟子を選ばれたのは、イエスさまのなさったお仕事をいっしょにさせるためです。助けるということは、イエスさまのところに連れて行ってあげることです。その力は、イエスさまが与えてくださいます。

今、ほくたち私たちは、イエスさまの弟子となるために、一緒に立ちあがりましょう。今週、少しでもイエスさまのお手伝いができるように、一緒に祈りしましょう。 (相馬伸郎)

[今週の暗唱聖句] マタイによる福音書 9章36節

また、群衆が飼い主のいない羊のように弱り果て、
打ちひしがれているのを見て、深く憐れまれた。

〈ねらい〉

こどもたちも、小さな伝道者です。それは、イエスさまがともにおられるからです。その小さな気づきが、教会には必要です。わたしたちに与えられている小さな賜物を分かち合うようにしたい。

〈展開例〉

みなさんは、イエスさまがこどもたちを愛していることを知っていますね。それは、わたしたちは、いつもイエスさまのこどもです。そして、大人も、こどもも、イエスさまに愛されている、神さまのこどもです。

それでは、イエスさまに愛されている人は、どのようにして、その愛を人びとにあらわしていけばよいのでしょうか。

それは、イエスさまのことをまだ聞いたことのない人びとのためによくお祈りをするということです。

そして、その人びとに、神さまのことをお伝えするようにすることです。

イエスさまは、たくさんのひとびとが、神さまの愛を知らないありさまを見て、こころから悲しくなりました。そして、わたしたちに、神さまのことをお伝えする人を求めてお祈りするようにお命じりました。

教会のれいはいは人びとが神さまの愛を知る一番よいところです。教会のれいはいに、たくさんのひとびとが来ることができるようにおいのりしましょう。そして、みんなで、イエスさまの愛を人びとにつたえましょう。

〈お祈り〉

天の父なる神さま、み名をさんびします。イエスさまの愛を、たくさんのひとびとにおつたえできるようにしてください。イエスさまのみ名によって、おいのりします。アーメン。

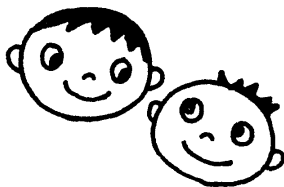
〈やってみよう〉

○あんしょうせいく（マタイ9章37, 38節）

「しゅうかくはおおいが、はたらきてがすくない。

だから、しゅうかくのために はたらきてをおくってくださるように、しゅうかくの しゅに ねがいなさい。」

○おともだちのなまえをあげて おいのりしましょう。



ねらい

伝道の目的は「深く憐れまれた」イエス様の群衆への同情から始まることを教える。

展開例

詩編 23 編を声を出して朗読してみよう。

羊飼いと羊の例を通して、神と人間の間をいろいろ推測してみよう。

羊は弱い動物です。視力が弱く、群れを離れて迷子になると、生きることができません。

そして、わたしたち人間も、決して先を見通して生きることができません。わたしたちは小さな羊に似ているのではないだろうか。

話し合ってみよう！

羊の性質について、絵を見せて話し合ってみよう。

憩いの水のほとり、青草の原に休ませる。それらの情景を描き、人間にとって生きた水、まことの食べ物、神の言葉であることを連想させよう。

祈り

羊のように弱いわたしたちを、迷子にならないようにいつも見守ってください。

～ 1 週間のミニ日記 ～

先週一番楽しかったことを語ろう。

聖書日課

マタイ 9 章 35 節～10 章 4 節



お祈りしたいこと



病気の友達のためにお祈りしよう。

暗唱聖句

群衆が飼主のいない羊のように弱りはて、打ちひしがれているのを見て、深く憐れまれた。

(マタイ 9 : 36)

✠聖書をひらいて（マタイによる福音書 9章 35 節～10 章4節）

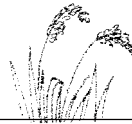
★	フ	イ	リ	ポ	タ
ヨ	ハ	ネ	ペ	ト	ダ
バ	ル	ト	ロ	マ	イ
ヤ	ロ	ヤ	シ	ス	タ
コ	コ	モ	ユ	ダ	マ
ブ	ン	ア	ン	デ	レ

☆問題：12 使徒の名前が、入っています（タテ・ヨコ・サカサマ・ナナメ）。見つけ出して、書き出してね！

★	★
★	★
★	★
★	★

（同じ名まえがあります。）

✠考えてみよう（質問に答えてあげてね！）



✉ 「収穫」って、おいしそうに実ったお米やくだものを刈り入れることですよね。
イエスさまのいわれた収穫とはなんですか？ （Mくん・11才）

✠言ってみよう

問 81 「御心の天になるごとく、地にもなさせたまえ」は何を祈るのですか？

私たちが、そしてすべての人も、自分中心のわがままな心を捨てて、神さまの〇〇〇〇に、〇〇〇〇〇〇ものとならせてください、私たちがなすべきわざを喜んですることができるようになってください、ということです。

✠やってみよう —ワン・ツー・ゲーム—「麦畑収穫ゲーム」（材料：紙・色鉛筆）

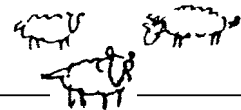
ㄦ	ㄦ	ㄦ	ㄦ	ㄦ	ㄦ	ㄦ	ㄦ
ㄦ	ㄦ	ㄦ	ㄦ	ㄦ	ㄦ	ㄦ	ㄦ
ㄦ	ㄦ	ㄦ	ㄦ	ㄦ	ㄦ	ㄦ	ㄦ
ㄦ	ㄦ	ㄦ	ㄦ	ㄦ	ㄦ	ㄦ	ㄦ

①紙にマス目を書きます。

②ジャンケンをして、勝った人は、色鉛筆でマス目を1つぬります。全部マス目がなくなるまでジャンケンをしていきます。たくさん収穫してね。

★「収穫は、多いが、働き手が少ない。だから、収穫のために働き手を送ってくださるように、収穫の主に願いなさい」（マタイ9:37）

✠今週の暗唱聖句（マタイによる福音書9章 36 節）



また、群集が飼い主のいない□□□のように弱り果て、打ちひしがれているのを見て、深く□□□□□しました。

〈展開例〉

①主イエスが人々をご覧になった時の様子はどのようなものでしたか。37節を見ると、「飼い主のいない羊のように弱り果て、打ちひしがれている」とあります。ここでは、人々のことを羊と譬えています。イスラエルの人々は、主なる神さまに守られ、導かれている羊の群れであると意識して歩んできました（詩編23）。羊は、羊飼いに導かれなければ、えさを得ることもできません。また、自分ひとりで猛獣から身を守ることでもできません。イスラエルの人々が、自分たちのことを羊に譬えるということは、当然、そこには羊飼いがいることが前提になっています。でも、ここでは「飼い主のいない羊」になっています。もう自分たちは生きていくことができない悲惨な状況に陥っているのです。

②では、なぜ羊は、飼い主のいない状態になってしまったのでしょうか。飼い主がちゃんと羊の面倒を見てくれない人だったからでしょうか。そうではありません。羊が飼い主を失ったのは、自分の意志で、羊飼いのもとを離れたからです。神さまのもとにいてもつまらない。もっと自分の思うように、自由に生きてみたいと思い、神さまのもとから離れてしまったのです。でも不思議です。神さまから離れたら、自由に楽しく生きられると思っていたのに、ふと気がつく、弱り果て、今にも死にそうになっているのです（ルカ15:4）。もしかしたら、自分が弱り果てていることにすら気付いていないかもしれません。私はまあまあ順調にやっています。神さまを信じなくても、それなりに幸せですと思っていますのです。でも主イエスをご覧になると、私たちは、飼い主のいない羊であり、弱り果て、打ちひしがれているのです。そのような私たちを見て、主は、はらわたがちぎれるほどの痛み（36節「憐れまれた」）を覚えておられるのです。

③そこで主イエスはどうかされたのでしょうか。37－38節を見てみましょう。「収穫は多いが、働き手が少ない。だから、収穫のために働き手を送ってくださるように、収穫の主に願いなさい。」ここに「収穫」とあるように、神さまがご自分のもとに救われる人々を集めてくださるということです。しかもその収穫の数は「多い」のです。でも、多くの人たちが神さまのもとに呼び集められ、救いにあずかるためには、「働き手」が必要なのです。私たちも、働き手がたくさん起こされ、たくさんの人が、神さまの救いにあずかることができますようにお祈りしましょう。ところで、「働き手」とは誰のことだと思いますか。牧師や教会学校の先生だけを指しているのであって、私たちは関係ないのでしょうか。そうではありません。牧師になることだけが、主の弟子として生きる道ではありません。神さまは、私たち皆が、キリストの弟子として生きることを願っておられます。

⑤10章1節以下には、十二弟子と呼ばれる人たちの名前が記されています。この中には色んな人たちがいます。教会の中にも色んな人たちがいるのではないのでしょうか。ペトロ、アンデレ、ヤコブ、ヨハネはガリラヤの漁師でした。マタイは、「罪人」呼ばわりされていた徴税人でした。そして、後に主を裏切るユダもいます。彼らは皆、主イエスにお会いするまでは、弱り果て、打ちひしがれていた一匹の羊でした。でも、主は彼らを深く憐れみ、ついに見つけ出して、彼らのまことの羊飼いとなってくださいました。憐れみに満ちておられる羊飼いのもとで、今、自分たちが養われている。この喜びが、私たちを、収穫のための働き手とし生きることへと、突き動かすのです。



第10章から第20章の終りまでは、主イエスが教えを説いて廻る際の説教が取り上げられています。それぞれの説教が行われた場面の具体的な描写は、ほとんどありません。全体として主イエスが語りかけた相手は、十二人の弟子たちでした。第11章からはまた、取り巻く群衆に向かって、語りかけています。もちろん、主の近くには弟子たちがいました。また、ファリサイ派の人々が、質問をし、隙あらば主を落とし入れようとして、聞き耳を立てていました。

〈軛を負う〉

「疲れた者、重荷を負う者は、だれでもわたしのもとに来なさい。休ませてあげよう。わたしは柔和で謙遜な者だから、わたしの軛を負い、わたしに学びなさい。そうすれば、あなたがたは安らぎを得られる。わたしの軛は負いやすく、わたしの荷は軽いからである」(28～30節)。主イエス・キリストが与えてくださる休み、それは重荷を取り去ってくださることではありません。荷を軽くしてくださることです。軛はなおも負い続けなければなりません。しかしながら、その軛は主ご自身が与えてくださった軛であることを忘れてはなりません。軛を負うとは、主イエスに学び、真似ることです。私たちに対して主イエスは、主の真似をして生きるように招いておられます。そのようにして、私たちは主の弟子となっていくのです。

私たちには、どうして重荷を負わなければならないのか、という不安があります。せっかく、主イエス・キリストを信じて生きているにもかかわらず、どうして主は重荷を取り去ってくださらないのだろうか、という呟きがあります。主は負えるかどうかの不安を私たちの中に呼び起こしておられるわけではありません。重荷を負うところで、安らぎを得ることができるのであります。ですが

ら、そのような重荷を負えるのか、という不安はありません。背負うことができるのか、という重荷に脅えることもありません。これこそが、私たちのために重荷を負ってくださる主イエス・キリストの招きであり、慰めであります。

〈わたしが〉

「疲れた者、重荷を負う者は、だれでもわたしのもとに来なさい。休ませてあげよう」(28節)。原文においては、「わたしが休ませる」というように、「わたし」が強調されています。30節までに、主イエス・キリストは、何度も「わたし」を強調しておられます。主イエスがこれほどまでに自己主張しておられるのはめずらしいことです。鍵はこの「わたし」にあるのです。あなたがたが無視している、この「わたし」にすべてがかかっているのです。

〈安らぎを得られる〉

「得られる」という言葉は、「見出す」とも言うことができる言葉です。つまり、安らぎは、探して見つけるものなのです。私たちはどこか温泉にでも行って休みたいと思います。しかし、ここで休むとはそういうことなのでしょう。

実は、「安らぎを得られる」という言葉は、三つの言葉からできています。「わたしの軛を負い」、「わたしに学びなさい」、そして、「自分の魂の安息を得られる」という三つの言葉を重ねています。安らぎを得られるということは、軛を負うことであり、キリストに学ぶことであるということなのです。「軛」は、牛や馬が農作業するときにつけるものです。休ませるときにははずすものなのです。主イエスは、軛を負うことは安らぎを見出すことなのだとされるのです。(安田恵嗣)

※第23号(2006年11月26日分)より再掲載。

テキスト マタイによる福音書 11章25～30節
参照カテキズム 子どもカテキズム 問1, 2

〔単元のねらい〕

人生の主な目的は、神を知ることです。主イエスを信じ、救われることによってただちに実現し、深められてまいります。それは、主イエスと共に居ることにはかならず、そこに安らぎがあり、そこでこそ、わたしたちは真の意味で生きることができます。主イエスは、私たちをそこへと招かれます。主の招きを伝える教師自身、この幸いを深く生き、証しすることが大切です。さらに、この招きを聴いている主の弟子である教師自ら、教会に子どもたちを熱心に招いていなければ、不誠実になるでしょう。ただし、子らを直接誘うのは、まさに小さな弟子たちの尊い責任です。彼らこそ、豊かに用いられる可能性に満ちています。教師も子どもたちも、主イエスとともにある喜びを味わい、地域伝道に共に励むものとされることを求めましょう。

「イエスさま、わたしたちの宍らぎ、居場所」

イエスさまは毎日、至る所で、伝道されました。「ほら、神さまの国は近づきましたよ。もう、ここに始まっていますよ。だから、悔い改めて、天国に入りましょう」あの十二人のお弟子さんたちも、イエスさまのご命令を受けて、同じように伝道が続けていました。

ところが、すべての人たちがイエスさまを信じたわけではありませんでした。そこで、イエスさまは、今、目の前ですばらしい神さまの奇跡、救いやいやしのみ業が起こっているのに、信じない人々を、厳しくお叱りになられました。イエスさまはその後で、突然、お祈りをささげられました。

イエスさまは、「天地の主であるお父さま！」と、神さまをお呼びになられました。天と地をおつくりになられ、世界をご支配しておられる神さまは、イエスさまのお父さまなのです。

そして、次にイエスさまは、「これらのことを幼子のような者にお示しになられました。」と祈られました。イエスさまは、神さまのことを、素直に受け入れ、従う人のことを「幼子のような者」と呼ばれました。

さて、ぼくたち私たちは、何故、こうやって、

神さまのことを、信じる事が出来るようになったのか分かりますか。何故、「天のお父さま」と信頼してお呼びできるようになったのでしょうか。イエスさまは、はっきりとお示してくださいました。それは、ぼくたち私たちが、「子が示そうと思う者」だからです。つまり、「子」というのは、神さまの御子、独り子のイエスさまです。つまり、イエスさまが、私たちの心を神さまに向けさせよう、教えよう、信じさせようとお考えになられたからです。つまり、イエスさまのおかげで、神さまを信じる事が出来るようになったのです。

今、イエスさまは、そのことを、心の底からお喜びになられたのです。嬉しくて嬉しくて、心の底から、天のお父さまに「あなたをほめたたえます！」と賛美し、感謝されています。

ほんとうに、うれしいですね。イエスさまのおかげで、神さまの子どもとされ、神さまご自身とそのお心まで知ることができたのです。しかも、そのことをぼくたち私たちよりも、イエスさまの方が大喜びしてくださっているのです。

イエスさまは、イエスさまを信じた人たちのことを「幼子のような者」とおっしゃいました。確かに、ここには、子どももいますが、大人もいま

すね。ぼくたち私たちは、大人も子どもも、みんな、神さまの子どもたちですね。そしてぼくたち私たちは、自分の頭で「神とはこれこれなり。神とは、このような存在なり」と言って、神さまのことをいろいろ研究したり、調べて信じた人はひとりもいません。そんなことをしていたら、いつまでもまことの神さま、天のお父さまを知ることができません。自分の知恵や賢さを頼りにして、神さまを信じてはいけません。

どうしたら、まことの神さまを信じることができるのでしょうか。イエスさまは、はっきりと誰にでもわかるように教えてくださいました。「疲れた者、重荷を負う者は、だれでもわたしのもとに来なさい。」超簡単でしょう。イエスさまのところに駆け込んで行けばよいのです。イエスさまは手を大きく広げて、「さあ、わたしのところに来なさい。休ませてあげます。わたしに学びなさい」と招いてくださったのです。イエスさまが、ギュッと抱きしめてくださったなら、ずっと抱きしめてくださいます。

先生も、30年以上も前に、イエスさまのお招きを受けてイエスさまのところに来ました。正直に言うと、なかなか飛び込みませんでした。つまり、高校生、大学生のときでしたから、知恵ある者、賢い者になろうとしていたのですね。それが、先生の愚かさだったわけです。けれども、そんな傲慢で頑なな先生の心も、イエスさまの愛のお心に、溶かされる時が来たのです。そして、イエスさまを信じたその時から、先生の心は平和になりました。今まで味わったことのない安らぎが与えられました。生きる意味が分からなかったので、苦しくて、空しくて、悲しかった毎日が、喜びに変えられました。イエスさまを信じて救われたのだということが、はっきりとわかったのです。

イエスさまを信じれば、神さまを知ることができます。神さまを知ることができたというのは、

神さまの子どもとされたということ、救われたということです。そうすると、これからは、このイエスさまのために生きて行こう、それこそ、間違いない本当の人生だ、本物の自分の生活が始まるのだと分かって、喜びが湧いてくるのです。

植物でも動物でも、生きものだけではなく、ありとあらゆるものがそこに生きるため、そこにあらためには、必ず場所が必要でしょう。木や草花なら、大地。鳥なら空。魚なら海や川。狼や羊なら地上。洋服ならタンス。靴ならげた箱。食器なら……。

さてそれなら、人間はどうでしょうか。もちろん、水中ではなくて、地上です。寝る場所、お家も必要でしょう。けれども、人間が動物としてのいのち、ただ心臓が動き、手足が動くいのちではなく、生存するだけではなく、まことの人間として生きるために、絶対に必要なのは、それは、家族と一緒にいてくれるだけでも十分ではありません。絶対に必要なのは、イエスさまです。イエスさまと一緒にいてくださる場所です。つまり、神の国、天国です。天国以外に、人間が安心して、自分らしく、本当に喜んで暮らせる場所などないからです。それなら、天国はどこにあるのですか。それは、イエスさまご自身です。イエスさまと一緒にならどこも天国です。

教会は、このイエスさまが作られたところです。日曜日の今、ぼくたち私たちは、礼拝をささげることによってイエスさまに、ギュッと抱きしめてもらっています。こうして、ぼくたち私たちは、今ここで、最高に、神さまを知り、最高に神さまを喜び、最高に神さまの栄光をあらわしているのです。

来週、今日休んだお友達、まだ教会に来たことがないお友達を誘って、イエスさまのところにみんな飛び込んで行きましょう。（相馬伸郎）

〔今週の暗唱聖句〕 マタイによる福音書 11章28節

疲れた者、重荷を負う者は、だれでもわたしのもとに来なさい。休ませてあげよう。

〈ねらい〉

イエスさまを学ぶことは、本当のやすらぎを与えられることである。そして、イエスさまを学ぶとき、わたしたちの学びは、つらいものではなく、かえって、苦しいことも、神さまに感謝することであることを知る。

〈展開例〉

みなさんは、イエスさまが父なる神さまにいのりをしていたことを知っていますか。それは、神さまをはめたたえながら、神さまに大切なことをいつも学びながら、イエスさまが生きてくださったあかしです。

わたしたちも、いつも、イエスさまのお名前をとおしていのりしながら、神さまに大切なことをいつも教えていただきましょう。

イエスさまは、土をたがやす牛のくびをつなぐ、「くびき」という道具にたとえて、わたしたちのくろうを「くびき」を負うこととおっしゃいました。

それは、イエスさまといっしょに「くびき」を負うことです。だから、どんなに苦しいことがあっても、大丈夫なんですね。そして、みんなでいっしょに苦しいことを負っていけるようになります。

そして、イエスさまといっしょに「くびき」を負っていくとき、わたしたちの心は、神さまにつながっているからとても安心で平安です。

そして、いつも、神さまに「ありがとう」とおいのりするように導かれていきます。

これからも、教会学校で、せいしよを学び、お祈りをいっしょにささげながら、イエスさまといっしょに、「くびき」をともにしていきましょう。

〈お祈り〉

天の父なる神さま、み名をさんびします。いつもイエスさまといっしょにすることが出来ますように。イエスさまのみ名によっていのりします。アーメン。

〈やってみよう〉

○イエスさまのハート

イエスさまのハートのうえに　じぶんのなまえをかいたハートをかさねてください。

イエスさまは　わたしたちを　やさしくだきしめてくださいます。



ねらい

イエス様は父なる神様に向かって、自分を幼子のようにみなして祈っていることに注目したい。幼子は神に最も近い存在であることを確認しよう。

展開例

大人に向かって、「あなたがたも幼子のようにならなければ、神の国に入れない」とおっしゃった、イエス様の言葉を考えてみよう。

子どもが最も神に近い存在であることの理由をいくつかあげてみよう。

例) まったき他者依存、など。

赤ちゃんの例で話すこともできる。

話し合ってみよう!

イエス様にご自分を幼子のような者とおっしゃって、神様に祈っている態度について、話し合ってみよう。

私たちが幼子のような者であるとは、いったいどういう態度なのだろうか。

祈り

神様の子どもである幸せを感謝します。神様の前にへりくだることができますように。

～ 1週間のミニ日記 ～

子どもとして過ごせる良さを見つけて、それを語り合ってみよう。

聖書日課

マタイ福音書 11章 25 - 30 節



お祈りしたいこと



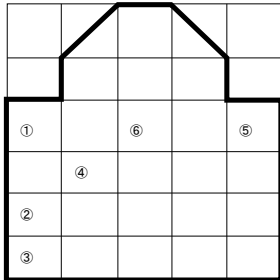
教会に誘いたいお友達のことを祈りましょう。

暗唱聖句

疲れた者、重荷を負う者は、だれでもわたしのもとにみなさい。休ませてあげよう。

(マタイ 11 : 28)

✠聖書をひらいて(マタイによる福音書 11 章 25～30 節)



☆問題：ことばを入れて
ね！

ヨコのカギ

- ① ○○○○のような者におしめしになりました
- ② やさしいこと
- ③ へりくだること
- ④ 牛や馬が農作業する時に首につける横木
- ⑥ 中部中会の○○○教会と、○○○岩の上教会

タテのカギ

- ① 重い荷物のこと
- ⑤ 平安なこと、ホッとすること



✠考えてみよう (みんなで、考えてね！)

✉ イエスさまがあたえてくださる「やすらぎ」とは、どういう安らぎですか？
安心・安全・たとえば“温泉気分”ということですか？ (Jちゃん・12才)

✠言ってみよう

問 1 私たちは
何のために生きる
のですか？

私たちが生きるのは、私たちの神さまを○○、
神さまを○○○○、神さまの栄光を○○○○た
めです。これが私たちの○○○○です。

✠やってみよう—ワン・ツー・屋外ゲーム—「くびきレース」

☆50センチ～1メートルの棒(ホウキも可)を用意①2人1組になって鉄棒のように両手で棒を握ります。②「スタート！」の合図で、2人は調子を合わせて走り、地面に置いた空のペットボトルを、2人でうまく回ってゴールにもどってきます。歩調を合わせて走り、回るときも、やっぱり歩調合わせがコツ！
「わたしのくびきを負い、わたしに学びなさい」と言ってバトンタッチ！！

✠今週の暗唱聖句(マタイによる福音書 11 章 28 節)



疲れた者、重荷を負う者は、だれでも
にきなさい。休ませてあげよう。

〈展開例〉

①28節の御言葉は、聖書の中でも最も有名な言葉のひとつで、実際この御言葉によって、信仰に導かれた者たちは多いのです。それは、なぜなのかを考えてみるとよいのです。この主の言葉に慰められるのは、私たちが疲れをよく知っているからです。肉体的な疲れだけではなく、心において疲れ果て、病んでいることを知っているからです。そんな私たちを、主は「休ませてあげよう」と招いてくださるのですから、どうしても耳を傾けずにはおれなくなるのです。

②私たちは、それぞれに負っている重荷、それらがもたらす疲れをどのように解消しているのでしょうか。友だちや先生、親に相談することもあるでしょう。ストレスを解消してくれるものは、世の中にたくさん満ちています。何とか今、自分を苦しめているものを忘れたいと思って、発散するのです。あるいは、別の楽しいことに没頭して、抱えている問題をまぎらわそうとします。もちろん、ストレスを解消することが、すべてわるいことではありません。でも、ストレスが溜まっていたということを正当化して、人を深く傷つけてしまうこともあるのではないのでしょうか。

③重荷を背負うことの苦しさゆえに、私たちは、人を傷つけたり、自分を恨んだりします。神さまを信じて、何もいいことはないと不平をもらしてしまふこともあるでしょう。そのように、私たちの疲れや重荷は、神に対する「罪」を生み出します。でも、主イエスは「わたしのもとに来なさい。(わたしが)休ませてあげよう」と招いておられます。休ませてくださるのは、主イエスです。主は、「わたし」という重荷を背負い、十字架で死んでくださいました。なぜなら、主は私たちを愛しておられるからです。私を愛し、私を赦してくださる主イエスを知る時、これまで抱えていた重荷は、本当の重荷ではなくなっているのです。

④今回の個所では、28節の御言葉だけがひとり歩きしてしまいがちですが、29-30節の主の言葉もとても大事な教えです。なぜかと言うと、重荷を負う者を休ませてくださった主は、ここでもう一度、重荷を負うように命じておられるからです。そして、「そうすれば、あなたがたは安らぎを得られる」とあるように、くびきを負うところで、平安が得られると約束しておられることに気付かされます。とても不思議です。重荷を降ろすのではなく、負うところで安らぎを得られるというのは、私たちの常識からすれば、矛盾しているとは思えないのです。

⑤でも主イエスが与えてくださる重荷は、「負いやすく」「軽い」のです。主に会おう前に、背負っていた自分を押しつぶすような重荷ではなく、私たちが喜びへと生かす新しい重荷です。「もう休みが終ってしまう。ああ、これから辛い現実が待っている……」と溜息をつきながら立ち上がるではありません。主によって新しくされた私たちは、力強くこの世を歩み抜く勇気を与えられるのです。クリスチャンとして生きることは、嫌なことや悩み事がすべてなくなるわけではありません。でも主が与えてくださる重荷のゆえに、世の激流に流されることなく、足を地につけて、神の国という向こう岸を目指して進んでいくことができます。また、主イエスは、私たちの重荷をよくご存知です。主ご自身がお与えになったものだからです。主が今も私たちのことをよく知っていてくださり、共に重荷を担って歩んでくださいます。その恵みを知る時、私たちは重荷を担う中において、なお安らぎを得ることができるのです。



イエスさま
ありがとう

〈背景と文脈〉

主イエスは天の国について教えられるにあたり譬えをよく用いられた。譬えと訳されたギリシャ語は、「かたわらに」という語と「投げる」という語から成る合成語である。当時の人々が日常目にしている事柄を「かたわらに投げ」、比喻によって天の国の奥義を教えられたのである。マタイ13章には七つの譬えが記されている（註、ある学者は52節を含めて八つと数える）。

今日学ぶ譬えはそのうちの三つであるが、44節の「畑の宝」に関する譬えと45～46節の「高価な真珠」の譬えでは、天の国の絶大な価値に強調点が置かれている。また47～50節の「網と魚」の譬えは終末の裁きに関する譬えである。

〈天の国の絶大な価値 (44－46)〉

44節の譬えは、畑に宝が隠されているのを見つけた人が、持ち物を全部売り払ってその畑を買う話である。当時、盗みや略奪から守るために大切な物を地中に隠すことはよくあった。ちなみに、タラントンの譬えに登場する悪いしもべは、主人から預かった1タラントンを地の中に隠しておいた（マタイ25:25）。

畑の中に宝を見つけた人は喜びながら帰り、持ち物を全部売り払ってその畑を買う。宝を取得するためである。畑の所有者はその宝の存在を知らなかったようである。所有者以外の人がある宝を隠したが、時が経ち何らかの事情により所有者が代わったことが考えられる。しかし、それはこの譬えでは重要ではない。

宝を見つけた人は、それを取得するためには、その畑を買わなければならなかった。宝だけを取り出せば盗みになる。「喜びながら帰り」という表現は、その宝を取得するためには持ち物を全部売り払わなければならなかったが、そのことに少しの躊躇もなかったことを示している。

次の譬え話(45－46)はよく似た設定であるが、違う点は、この商人が良い真珠を探し求めている

ことである。偶然見つけたのではない。この商人は高価な真珠を見つけると、何としても手に入れたいと願った。自分自身のためだったと思われる。

畑で宝を見つけた人とこの商人の共通点は、犠牲を払っても入手したいと思うほどの絶大な価値のあるものに出会ったことである。二人とも持ち物を全部売り払うという犠牲を払わなければならなかったが、彼らは喜んでそれをした。使徒パウロはフィリピ3章7,8節で、「わたしの主キリスト・イエスを知ることのあまりのすばらしさに、今では他の一切を損失とみています。……キリストのゆえに、わたしはすべてを失いましたが、それらを塵あくと見なしています」と言っている。天の国は、他の一切のものを塵あくと考えるほど絶大な価値のあるものである。

〈終末の裁き (47－50)〉

47～50節の譬えは終末の裁きに関する教えである。弟子たちの中には、ガリラヤ湖でかつて漁師をしていた者がいた。漁師は魚を獲るために網を湖に投げる。当然、網の中にはいろいろな種類の魚がまじって入ってくる。漁師は網が一杯になると、それを岸に引き揚げると、すべての魚が食べられる良い魚ではない。食べられる良い魚だけを器に入れ、悪いものは投げ捨てる。選別作業をするのである。その点で13章24～30節、36～43節の「毒麦の譬え」と似ている。地上では良い麦と毒麦が混在しているが、そのままにされている。しかし刈り入れの時には、良い麦と毒麦は選別される。どちらの譬えも、終末の裁きにおいて人々が二分されることを示唆し、聴く者に警告を与えている。

終末を迎えていない今は恵みのときであり、天の国への招きが与えられている。天の国の絶大な価値を知り、その招きに応えよう。そして、それを喜び、それに満ち足りる生き方をしよう。

(後藤公子)

テキスト ヨハネによる福音書 13章44～52節
参照カテキズム 子どもカテキズム 問1

〔単元のねらい〕

主イエスの語られた天国のたとえである。13章44～52節がテキストとしてあてられているが、ここでは44節と45～46節のふたつのたとえにしばった。主イエスを知ることのすばらしさ、絶大な恵みが畑に隠された宝、商人が見出した高価な真珠になぞらえられている。この世の人々はこの世の宝に目を奪われがちであるが、主イエスこそ真の宝であられることを信仰の目をもって確かめたい。そしてわたしたちがその宝をすでに与えられていることを覚えて、感謝をあらたにしたい。

「この上ない宝」

わたしたちは主の日ごとに教会に集まって、イエスさまのみ言葉を聞いています。イエスさまのみ言葉はこの上ない宝です。そしてみ言葉を聞く人々は、すでにこの地上で天国の幸いへと招かれています。それがどれほどすばらしいことであるのかを、イエスさまがお語りになったたとえをとおして学びましょう。

天国の幸いに招かれた人は、畑の中に隠されていた宝を偶然見つけた人に似ています。イエスさまが地上に生きておられた時代には、人々は宝を壺の中に入れて、土の中に隠しておいたようです。家の中に宝を置いておくと、泥棒に盗まれてしまうかもしれません。強盗に襲われてしまうかもしれません。それで、土の中に埋めておくことがいちばん安全だったのです。

ただし、宝の持ち主が死んでしまうということも起こり得ます。そういう時には、畑に隠された宝はだれにも気づかれないうまま、長い間土の中深くに眠っているということもあったでしょう。

しかし、そのように長く隠されたままであった宝を、その畑で働いていた人が偶然掘り当てたとしたらどうでしょうか。その人は思いがけない発見に喜び、持ち物を売り払って、宝の埋まったままの畑を畑ごと買うでしょう。そうすると、彼自身がその畑の主人になることができるからです。

天国の幸いは、その宝の埋まった畑です。その

価値のすばらしさに、それを見出した人は持ち物をすべて売り払っても惜しくないのです。

天国の幸いに招かれた人はまた、高価なよい真珠を見出した商人に似ています。宝石の価値は、目の肥えた人でないとなかなかかわからないと思います。わたしたちが見ただけでは、どれも同じに見えますね。

けれども目利きの人が見れば、その宝石の価値はきちんとわかります。たった一粒でも、はかり知れない価値をもっている真珠もあります。そういう真珠を見つけたなら、商人はわれを忘れ、何としてでも自分のものにしようとするでしょう。それだけの価値があることを知っているからです。

天国の幸いは、商人が見つけ出したそのひと粒の真珠です。それを手に入れるためには、全財産を投げうってでも惜しくはないのです。

イエスさまのみ言葉は、畑に隠された宝です。イエスさまの命の恵みは、高価なひと粒の真珠です。それは隠されているので、だれもがすぐに見つけることができるわけではないかもしれません。ほかの真珠と見分けがつかないので、目利きの人が見なければその価値はわからないかもしれません。この世には人の目を魅了する多くのものがあります。真珠もあります。宝もあります。この世の人々はこの世の宝に目を奪われて、イエス

さまに目を向けようとしなないかもしれません。イエスさまのみ言葉を聞こうとしなないかもしれません。

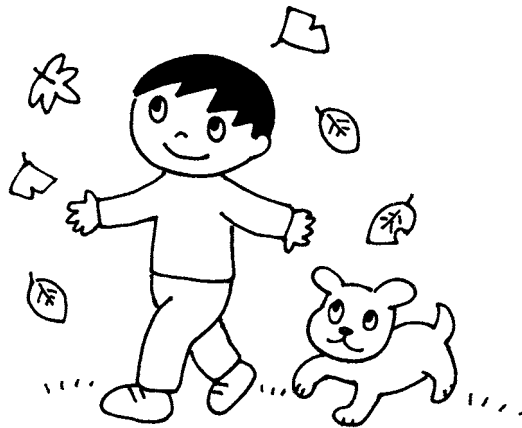
けれどもイエスさまこそ、わたしたちの宝です。この世のものは過ぎ去ります。どれほど価値が高いと言われている宝石も、やがては朽ち果てます。しかしイエスさまはわたしたちに、朽ちることもしばむこともない命の宝をくださるのです。天の宝です。この宝こそ、すべてのものを投げ出しても惜しくはない価値をもつのです。この宝を見出した人は、この世のものではない喜びを得るのです。パウロという伝道者は語っていますーイエスさまを知る前に、わたしはこの世で価値のあると見なされている数々のものを手にしていました。

しかし今、イエスさまを知ることのあまりのすばらしさに、それらを塵あくと見なしています。

イエスさまという宝を見出すことのすばらしさを、心深く覚えたいと思います。ぜひ覚えておきたいことは、わたしたちは今すでにその宝を見出しているということです。わたしたちは主の日ごとにイエスさまにお会いしています。イエスさまのみ言葉を聞いています。何と大きな幸いでしょうか。わたしたちが自分で掘り出したものではありません。自分で見つけ出したものではありません。イエスさまのほうからわたしたちと出会ってくださったのです。この宝をしっかり握りしめて生きていきましょう。

(木下裕也)

[今週の暗唱聖句] マタイによる福音書 6章20節前半
富は、天に積みなさい。



〈ねらい〉

わたしたちにはかけがえのないものがあることに心を留めたい。イエスさまがくださった「いのち」はわたしたちの宝である。この宝の重さはどれほどであろうか、と問いかけたい。

〈展開例〉

みなさんは、とても大切にしている「たからもの」をもっていますか。それは、どんなものでしょうか。

みなさんは、イエスさまがくださったたからものを知っていますか。それは、イエスさまが愛しておられる人びと、わたしたちひとりひとりです。

イエスさまがどうして十字架におかかりになったのでしょうか。それは、わたしたちひとりひとりを神さまの宝物とするためです。だから、むかし、イエラエルのひとびとは、「たからのたま」と呼ばれたくらいです。

それでは、わたしたちは、そのくらい、神さまに「たからもの」とされたことを大事にしていますか。

神さまからくださったもので、わるいものは一つもありません。ぜんぶ、よいものです。そして、イエスさまが十字架によって、わたしたちを愛してくださったことは、どんなものにも代えることのできない、ほんとうにどうい「たからもの」です。

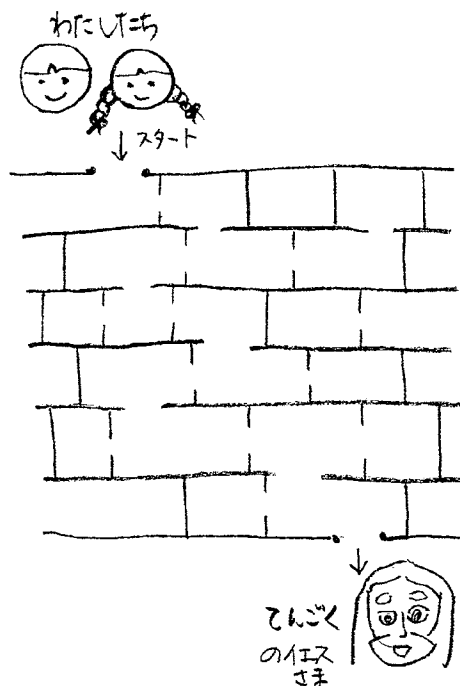
いつも、イエスさまがわたしたちを「たからもの」としてくださるほどに愛してくださっていることをかんしゃしましょう。

〈お祈り〉

天の父なる神さま、み名をさんびします。いつも、イエスさまのあいを大切にすることができるよう。イエスさまのみ名によっておいのりします。アーメン。

〈やってみよう〉

○イエスさまのところにいくみちは？



ねらい

この聖書箇所が説明しにくい場合には、マタイ福音書13章1～9節の種まきのたとえで説明しても許されよう。道端の種、石だらけの種、茨の種、良い土地の種、と語られているが、神さまが、私たちの心—畑—を耕して、石や茨を取り除き、良い畑にしてくださることを祈り求めることもできる。

展開例

小さい子どもに向かって、毒麦や敵の仕業についてはあまり説明する必要はない。むしろ、だれでも、神の恵みと憐れみによる以外に救われる可能性はないといえる。だから、否定的なことはあえて語る必要はない。

いやなことや悪いことがあれば、神様に取り除いてもらうように、祈ることを勧めてみよう。

話し合ってみよう！

畑の麦や種まきのたとえ、草花の成長、など、神の国は、日常の生活の中で、始まっていることを感じてみよう。

祈り

毎日の生活が、神様の国につながるができるようにお導きください。

～ 1週間のミニ日記 ～

先週、一番いやだったことを思い出して、何が原因なのか考えてみよう。



お祈りしたいこと



いやな体験を神様に伝えてみよう。

聖書日課

マタイ13章1節—9節

マタイ13章44節—52節

暗唱聖句

富は天に積みなさい。

(マタイ6:20)

✦聖書をひらいて(マタイによる福音書 13 章 44 節～52 節)

☆問題：

『白い鏡（かがみ）と黒い頭（あたま）を使って、読んでください。』

『●な●○●は、これらのこと○ ○なわ○っ
●○。』でし●ちは「わ○り●し●」といっ●。

こたえ ㊦ ㊦ ㊦



✦考えてみよう (みんなで、考えてね! (*^*)v)

☒ 「天の国」を、「畑の中の宝」や「高価な真珠」にたとえているのですね。たとえばちがいますが、両方とも「持ち物をすっかり売り払って、それを買う」は同じでした。自分の今まで持っていたものの全部を引きかえにしても、価値があるのですか?? (Mちゃん・10才)

✦言ってみよう

問 1 私たちは
何のために生きる
のですか

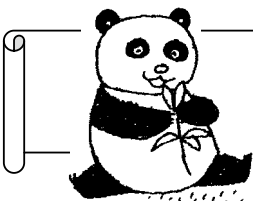
私たちが生きるのは、私たちの神さまを○○、神
さまを○○○○、神さまの栄光を○○○○ため
です。これが私たちの○○○○です。

✦やってみよう —ワン・ツー・ゲーム—「宝ものさがしゲーム」

- ① キャンディー1袋を用意します。個々のキャンディーの裏に「ト ミ ハ テ ン ニ ツ ミ ナ
サ イ」とマジックで文字を書き、文字が見えないようにひっくりかえして、バラバラに机に広げます。
②順に、好きなキャンディーを取り、裏に文字がかいてあるものは、「あたり」! うらに文字が書いて
あるキャンディーをたくさん取った人はダレかな? さらに全部の文字を取って、みことばになったらスゴ
イ!!! その人は、他の人が取ったキャンディーも全～部!!! もらえます。

☆「みつけた人は、そのまま隠しておき喜びながら帰り、持ち物をすっかり売り払って、その畑を買う」

✦今週の暗唱聖句 (マタイによる福音書6章 20 節)



富は、天に積みなさい。

〈展開例〉

- ①「天の国」とは、どこかにある場所ではなく、神さまのご支配のことを意味します（他の福音書では「神の国」と訳される言葉）。主イエスは譬え話をとおして、天の国とはどういうものかをお語りになります。天の国とは、「隠された宝」（44節）だということです。隠されているということはどういうことでしょうか。それは、誰の目にもはっきりと分かるわけではないということです。
- ②では、隠された宝を誰が見つけることができるのでしょうか。それは神さまを信じて生きている人たちです。目に見えないものをじっと見つめるのが信仰なのです（ヘブライ11:1）。クリスチャンは隠された宝を見出した人たちのことです。では、どのようにして見つけたのでしょうか。一所懸命、土を掘り起こしてやっとのことで見つけたのでしょうか。どうもそうではないようです。興味深いことに畑仕事をしていたら、偶然に、宝を見つけたようです。信仰へ導かれ方は様々です。深い悩みの中で、助けを求めるようにして、教会の門を叩き、神さまの救いを見出した人もいれば、思いがけない出来事をきっかけにして、信仰に導かれることもあるのです。教会学校の先生方はどのように、隠された宝を見つけられましたか。
- ③クリスチャンは天の国という隠された宝を見出した人たちです。ただ聖書をよく耳を傾けますと、すぐに宝が自分のものになったようではないようです。宝を自分のものにするためにしたことは何でしょう。それは、持ち物をすっかり売り払って、畑を買うことです。真珠を買う人の場合も同じで、「持ち物をすっかり売り払います（46節）。要するに、天の国の隠された宝は、

持っているすべてのものを投げ打ってまでも、手に入れる価値があるのです。ただ誤解しないではしいことは、クリスチャンになるためには、全財産を売り払わないとダメということではありません。この譬えを通して語られている天の国とは、何事にも代えがたい宝として真剣に求めていく者になること、つまり、キリストの弟子になることへの招きです。そして、キリストの弟子になることは、「喜びながら帰り」（44節）とあるように、悲壮感に満たされてすることではなく、隠された宝を見出した喜びに突き動かされて歩いていくことです。

- ④隠された宝を手に入れようと立ち上がった者たちのことを、52節では「天の国のことを学んだ学者」と言い換えています。クリスチャンは、誰でも「天の国のことを学んだ学者」になれます。「自分の倉から新しいものと古いものを取り出す」ことができます。要するに、豊富な知識のゆえに、様々な状況下の中で相応しい知識を取りだし、賢く対処することができるということです。だから、天の国に生きる人は、「どんなことがあっても大丈夫」という信仰に生きることができます。
- ⑤神さまではなく、サタンが支配していると疑ってしまうような中にあっても、誘惑に負けることなく天の国の支配の中に生きることができます。なぜでしょう。47節には、天の国について、魚を捕らえる網の譬えが語られています。私たちが生きているこの世界は、「神の網」の中に捕らえられています。すべては、神の網という名の、「御手」の中で起こっている出来事です。目に見えている現実がすべてではありません。隠されている神の愛のご支配を見続けることができる信仰の眼差しが与えられますように。



〈概要〉

この五千人の給食の記事は共観福音書とヨハネによる福音書に共通している唯一の物語であり、重要な物語であることが伺える。マタイ15章32～39節には引き続き四千人の給食の記事がある。14章の「カゴ」はユダヤ人の使用していたカゴという単語であり、15章の「カゴ」は異邦人が使用していたカゴという単語である。また十二という数字が十二部族を象徴し、七という数字が異邦人を象徴すると考えることから、「はじめにユダヤ人に、そしてギリシャ人にも救いが提供されている」ということを示すと考えられて来た。

13節：イエス様はヨハネの殺害を聞いて、ひとり人里離れたところへ退かれた。ヘロデの管轄からおびえる弟子達を連れ出そうとされたとも、弟子達を休ませるためとも考えられるが（マルコ）、何と言っても父なる神御自身との交わりの時を求めて、静まるためであったであろう。

13、14節：しかし、群衆は方々の町からイエス様の後を追って着いてきた。イエス様は彼らを退けられず、深く憐れまれた。そしてその中の病人を癒されたとある。退くためであったが御自身の使命と群衆の必要のために御自身を放棄なさる。マルコはイエス様が多くのことを教えられたことを記している。マタイは教えたことには言及しない。イエス様が癒されたことを強調する。マタイは奇跡に焦点を絞っているのである。

15節：イエス様は教えることに夢中で、群衆は中々帰らない。そこで群衆の身体的な必要を考慮して常識を働かせる弟子たちは、群衆を解散させることをイエス様に要求する。

16～19節：それに対してイエス様は「行かせることはない」と強い否定で言われる。そして弟子達が彼らに食べ物を与えるように命じられる。

弟子達の常識では考えられないことであるが、イエス様はこの五千人の群衆を養おうとなさっているのである。しかしあるのは、当時の普通の粗

末な食事の内容である五つのパンと二匹の魚だけであった。18節は17節の「ここ」という言葉を受けている。普段の食事しかない「ここ」には、世界の創造の時からおられた、生ける神の御子である「私」がいるのだ、と言いたいがごとく「それをここ（私のところ）に持って来なさい」と命じられる。群衆には草の上に座ってその偉大な業を待つように命じられる。カルヴァンの解説のように、主は魂を満たすことのために働いて来られたが、ここでは羊飼いとて羊の体の必要へと任務を上げられ、このことによって神の国とその義を求めるものは、全て与えられることを確証しておられるとも解釈できる。

19節の「取り」「祝福し」「さき」「渡す」という一連の言葉は、主が制定された聖餐式の描写と共通の用語が使用されている。神がモーセを通して荒野において天からのマナを民に与えられた出来事と重なり合う。メシアはモーセと同じ奇跡をすると考えられて来たが、まさしくこの五千人の給食におけるイエス様から出る奇跡の力と祝福は、主イエスこそ神のメシアであることを証明するための記事なのである。

弟子達はじかに自分達の手の中でパンが増え、皆が満腹する奇跡を体験することを通して、メシアであるイエス様の力と祝福の偉大さを経験し、証人となることが出来たのである。

20節：全ての者が満腹し、さらに余った。この「余った」ということは列王記下4章のエリシャの奇跡と並行する。

21節：女と子供を数に入れずに、男だけで5千人と記されていることは、実際は1万から1万5千人の供食となる。

マタイはイエス様のなさった祝福と分配の「行為」（19－21）にクライマックスが来るように描いている。そのことによってマタイはイエス様のメシア性を明らかに示そうとしているのである。

（袴田清子）

テキスト マタイによる福音書 14章13～21節
参照カテキズム 子どもカテキズム 問82

〔単元のねらい〕

四つの福音書のいずれにも書き記されている「五千人給食」のみわざである。わたしたちは目に見えるものに囲まれており、この世のものでみずからの欠乏を満たそうとするが、このみわざは真に人の命を養ってくださるお方とはだれなのかということを根本的なところで問うであろう。人間の計算をこえた天の糧によって、主はわたしたちを生かしてくださる。その大いなる幸いを覚えたい。

「イエスさまに養われる」

イエスさまが神さまのみ国をのべ伝える働きをお始めになると、多くの人々がイエスさまのもとに集まるようになりました。イエスさまが貧しい人、弱い人、虐げられている人々を愛され、病気に苦しむ人々をいやしてくださるとの評判がまたたく間に広まったからです。その日、イエスさまは人里離れたさみしい場所に退かれたのですが、そこにもイエスさまを慕う人々がおおぜい集まりました。イエスさまは病人をひとりひとりいやされ、また人々にみ言葉をお語りになりました。

気がつくと、もう夕暮れです。弟子たちは、集まっていた人々がこんな人里離れた場所でお腹をすかせていることを心配しました。そしてイエスさまに言いました。もうこんな時間ですから、人々を解散させてください。そうすれば彼らは自分で村へ食べ物を買って行って、空腹を満たすことができるでしょう。

しかしイエスさまは仰せになりました。一行かせることはありません。あなたがたが彼らに食べ物を与えなさい。

そこには、五つのパンと二匹の魚しかありませんでした。弟子たちがそれを言うと、イエスさまはそれをここに持ってきなさいとおっしゃいました。そして五つのパンと二匹の魚をとり、天を仰いで父なる神さまをほめたたえ、パンを裂いて弟子たちに与え、人々に配らせるようになさいました。そうすると、男の人だけで5千人の人々が満腹しました。残ったパン屑を集めると、十二の籠

がいっぱいになったのです。

五つのパンと二匹の魚。ほんとうにわずかな食べ物です。多くの人々がお腹をすかせています。これだけではとても足りない、無きにひとしいと思うでしょう。弟子たちもそう思ったにちがいないのです。人間の計算ではそうです。ですから弟子たちは、人々を解散させてめいめいで食べ物を買わせるようにしようと言ったのです。けれども、イエスさまはその必要はないとおっしゃいました。そして、このわずかな食べ物で多くの人々を満ち足りるほど食べさせてくださったのです。

わたしたちはだれもが乏しさを味わうを経験します。飢え渴きを覚えます。それは体の飢え渴きということだけではありません。魂も飢え渴きことがあります。心のむなしさを味わうこともあります。

けれども魂の飢え渴きであれ、体の飢え渴きであれ、それを満たすのはわたしたち自身ではありません。わたしたちが自分で食べ物を買って行くわけではありません。その必要はありません。なぜなら、イエスさまが食べさせてくださるからです。飲ませてくださるからです。人間の欠けや乏しさをほんとうに満たしてくださるのはイエスさまです。イエスさまの命をいただく時にこそ、わたしたちはほんとうに満たされるのです。

イエスさまこそ、わたしたちの命を生かし、養っ

てくださるお方です。イエスさまは命のパンそのものであられます。イエスさまの命は、もちろん地上の命にはとどまりません。このお方が十字架に死なれ、甦られたことをとおして与えられる永遠の命です。イエスさまは、人はパンだけで生きるのではなく、神の口から出るひとつひとつの言葉によって生きると仰せになりました。これはまさしくほんとうのことです。肉のパンによって満腹になるだけでは、わたしたちの魂にほんとうの平安は与えられないのです。わたしたちの罪を赦し、わたしたちに真の自由を与えるお方にあってこそ、わたしたちの魂は安息を得るのです。命を得るのです。

人生のあらゆる問題の解決を、わたしたちはイエスさまに求めるのです。このお方こそ、わたしたちの命の重みをほんとうにはかってくださるお

方です。わたしたちにまことの救いをもたらしてくださるお方です。このお方によって、わたしたちは生きるためのすべての必要を満たしていただけるのです。すべての糧を与えていただけるのです。

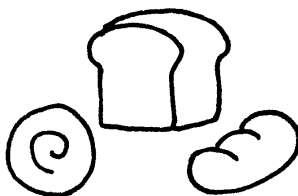
昔神さまは、荒れ野で空腹に苦しむイスラエルの民を憐れんでくださり、天からマナを降らせて日々養ってくださいました。今神さまはみ子イエスさまの命の糧をもってわたしたちを豊かに養ってくださいます。この時に五つのパンと二匹の魚によって五千人の人々を養ってくださったように、イエスさまは今わたしたちの命をも生かしてくださいます。イエスさまの食卓につらなり、永遠の命のパンをともにわかちあう。そこに天のみ国の祝福があります。（木下裕也）

〔今週の暗唱聖句〕 ヨハネによる福音書 6章35節

イエスは言われた。「わたしが命のパンである。

わたしのもとに来る者は決して飢えることがなく、

わたしを信じる者は決して渴くことがない。」



〈ねらい〉

人はパンだけで生きるものではないことを伝えたい。イエスさまこそ、わたしたちのいのちのパンであり、本当の飼い主、養い主である。わたしたちのれいのかては、みことばであることを知る。

〈展開例〉

みなさんは、いつもどんなものを食べていますか。また、だれといっしょに食べていますか。それは、とてもおいしいですか。

イエスさまは、5000人というとてもたくさんの人たちをととてもわずかな二匹と魚と五つのパンでやしなってくださいました。

それは、イエスさまが、ほんとうのやしない主であることをわたしたちに教えてくださる「神さまのきせき」です。

わたしたちは、パンという食べ物だけでなく、神さまのみことばを必要としています。それは、

神さまのれいのはたらきによって、わたしたちの心に与えられるものです。

教会で、せいさんしきを見たことがありますか。せいさんしきのときに、パンとさかずきをにあずかりますが、それは、イエスさまの体と血をあらわします。

それは、わたしたちの教会が、イエスさまのいのちによって養われているしるしです。

教会学校のれいはいも、イエスさまがみことばによって、わたしたちをやしなってくださいます。いつも、神さまのやしないにあずかりましょう。

〈お祈り〉

天の父なる神さま、み名をさんびします。いつもイエスさんのいのちのめぐみをかんしゃできますように。イエスさまのみ名によっておいのりします。アーメン。

〈やってみよう〉

○にひきのさかなとつつのばん

イエスさまに にひきのさかなとつつのばんを ささげましょう。
いろをぬってね。



ねらい

人間の命は、パンだけでは満足できず、神の霊的命を必要とし、神につながって生きる存在であることを伝えたい。

展開例

エジプト脱出後、イスラエル人は、40年間、マナをもって養われた。それは、神の言葉と導きによって、人間は生きる存在であることを教えるためであった。日ごとのパンが神によって与えられて、生かされていることを神に感謝することが求められている。

荒野のマナの奇跡もイエスの五千人の給食の奇跡も、人間の命は、生物的食糧だけでなく、神の霊的命によって生きる命であることを教えている。

話し合ってみよう！

子どもには、世話をしてくれる母親や父親がいるが、完全な母親・父親ではありえない。完全な父、また母であるような、神様の存在が必要ではないか、話し合ってみよう。

祈り

神様は、私たちの親にまして、私たちを完全に守ってくださるお方であることを感謝します。

～ 1週間のミニ日記 ～

神様に感謝したいことをお互いに発表してみよう。



お祈りしたいこと



霊の糧である御言葉を心に蓄えることができますように。

聖書日課

マタイ14章13-21節

ヨハネ6章 1-15節

ヨハネ6章 22-71節

暗唱聖句

イエスは言われた。わたしが命のパンである。わたしのもとに来る者は決して飢えることがなく、わたしを信じる者は決して渴くことがない。

(ヨハネ 6:35)

✠聖書をひらいて(マタイによる福音書 14 章 13～21 節)

☆問題：文字をならべかえて、みことばにしてね。(ヒントは、13 節～21 節の中にあるよ)

そこにもってこれをきなさい

こたえ(:)



くまのべすがたべてぷんとしたひ

こたえ(:)

✠考えてみよう (質問に答えてあげてね！)

✉ イエスさまは、後を追ってきた病気の人をあわれみ、いやされました。夕方になりお腹のすいた人びとには、5つのパンと2匹の魚で5千人以上の人のお腹を満たされました。イエスさまは、わたしたちの弱さも、必要も、ごぞんじであわれんでくださるのですね。だから、イエスさまにはなんでもお祈りしていいのですか？ (Aちゃん・11才)

✠言ってみよう

問82 我らの日用の糧を
今日も与えたまえ」では
何を祈り願うのですか？

神さまこそが、私たちのすべての必要を備えて、楽しませてくださるので、私たちの毎日の〇〇〇〇をください、神さまにのみ〇〇〇〇〇〇ください、ということです。

✠やってみよう ―今週からアドベントに入ります―「アドベントカレンダー」

① カレンダーにクリスマスシールや、キャンディーやひとロチョコ、を一日に1個ずつ貼るだけの簡単アドベント・カレンダーを作ってみましょう。クリスマス会にさそうお友だちのためにお祈りしましょう。

✠今週の暗唱聖句 (ヨハネによる福音書6章 35 節)

イエスは言われた。「わたしが命のパンである。わたしのもとに来る者は決して□□□ことがなく、わたしを信じる者は決して□□□ことがない」



〈展開例〉

①「行かせることはない。あなたがたが彼らに食べるものを与えなさい。」(16節) 主イエスは、私たちには、到底できないようなことを命じられることがあります。五千人を超える人々の食糧をどうやって調達するのでしょうか。この時、弟子たちは人里離れた場所にいましたから、すぐ近くの店に行って、食料を買うことはできません。またこの時、手元にあったのは、5つのパンと2匹の魚だけでした。これが弟子たちの持っているすべてのものだったのです。

②現実を目の前にして、これだけしか持っていない自分に気付く時、私たちはどうしたらよいのでしょうか。主イエスが弟子たちに語られた言葉に注目しましょう。主は、「それをここに持って来なさい」と命じられました。そうです！自分はこれだけしか持っていない、これが何の役に立つのだろうか、と絶望することではないのです。大事なのは、「これだけしか持っていない」自分自身を、主に献げることです。

③主イエスは、弟子たちが持ってきたパンと魚を取り、どうされたでしょうか。19節には「天を仰いで賛美の祈りを唱えた」とあります。主は何を祈られたのでしょうか。「神さまこれだけでは足りません。増やしてください」と祈られたのでしょうか。それとも、「増えろ！」と念力を込められたのでしょうか。そうではありません。主イエスは、与えられた5つのパンと2匹の魚を神さまに感謝し、神さまをほめたたえたのです。主イエスは、弟子たちの持っている僅かな食べ物を、神さまの前に差し出し、賛美と感謝と喜びを表わしておられます。その中でパンと魚が分け与えられ、五千人を超える人々の空腹は満たされたのです。

④五千人を超える人々の前では、何の役に立たない私たちのほんの小さなものを、主イエスが用いて大きくしてくださいました。私たちは目の前の大きな現実や壁を目の前にする時、自分に与えられているものが、いかに小さいものであるのかに気付かされます。時に、その小ささを恨んだり、自分より豊かなものを持っている人を羨ましく思ったりすることもあるでしょう。そうすると私たちは、神さまから与えられているものを、なかなか心から喜び、感謝をすることができないのです。でも、そんな私たちの生き方が変わります。もう心配なんてしなくてもいいのです。なぜでしょうか。それはあなたの持っているものを、たとえそれが自分ではちっぽけだと思っていたとしても、主イエスは喜んでいてくださるからです。私たちの小さなものを、主は喜び、神への感謝と賛美の中で用いてくださるのです。

⑤そうであるならば、私たちがなすべきこととは何でしょうか。弟子たちが、この素晴らしい経験をすることができたのは、「あなたがたが彼らに食べる物を与えなさい」という主の言葉から始まったことを思い出しましょう。私たちも主が自分に求めておられることを、日々、御言葉から聴き取ることが大切です。もちろん、主の言葉の前に、「無理だ」と思うこともあるでしょう。でも、主イエスは、「それをここに持って来なさい」とお語りになりました。この主の言葉を、もう一度聴いて、自分の小ささ、弱さ、貧しさを主に委ねましょう。主はそのような私たちを心から喜んでくださり、私たちが思いもなかった素晴らしい御業を必ず成し遂げてくださいます！



21節：主イエスは敵対者達から逃れるために、異邦人の町シドンとティルスに退かれた。

22節：「すると(見よ)」「カナンの」女が出てきた。「カナン」はかつて神が追い出して、イスラエルに土地を取得させられた地名であり、イスラエルの人々は決して同胞関係を結ぼうとはしない民族である。

「ダビデの子」とは王としての名称。この女は最初から「主よ、ダビデの子よ」と呼んでいる。果たしてそのような信仰が本当にあったのか、聞き伝えて用いて言ったのか、主イエスの御人格に触れているうちに何かを感じて、信仰に目覚めたのかは分からない。明確なことはこの女は、主イエスなら、自分の娘を助けることがお出来になると信じていたということである。マタイは「ダビデの子」という主イエスに対する正しい理解を異邦人のカナンの女に告白させている。それは直前の記事のファリサイ派、律法学者の不理解と対照をなしている。

23節：女は主イエスの後に叫びながらついて来た。弟子達が女を追い払うように「願った」というのは「願ひ続けた」という意味で、長い間、執拗に女はついて来たことが伺える。他方、主イエスの態度も断固としている。何もお答えにならない(23節)。イスラエルの家の失われた羊のところにしか遣わされていない(24節)。子供達のパンを取って小犬にやってはいけない(26節)。三文とも(23,24,26節)ギリシャ語の同じ接続詞で始まり、同じ否定の副詞によって否定され、並行し強調されている。

24節：主イエスは、父なる神様から「遣わされて」おられる。主には遣わした父に対する果たすべき使命がある。またイスラエルの民との約束があるのである。マタイにおいて異邦人を牧会されたのは、この記事以外に百人隊長(8章)と、ガダラ人(8章)の記事のみである。マタイは、主イエスがまずイスラエルの民に対する約束を確認する

ために、御自身の働きを制限され、神の御子が契約に忠実であったことを明示している。そのことによって、自分達の救い主を退けた神の民の責任と、神が異邦人に恵みを移行されたことの正当性を、明確にしていると考えられる。

25節：心からの悲痛な願いにも拘らず、それを退けられる主イエスに対して、女は主イエスの「前に」周りこんで「ひれ伏し」言った。「『主よ』どうかお助けください」。ここでは「主よ」と生ける神に向かって用いる言葉が用いられている。

26節：しかし、またしても女の願いは聞き入れられない。「子供たちのパンを取って小犬にやって(投げて)はいけない」。小犬とは飼犬という意味である。

27節：それに対し女は、「ごもっともです」と答えている。主イエスの語られた否定的な副詞と対照的に明確に肯定する副詞を用いている。「自分は選びの民と比較すると、異邦人で犬同然であるが、異邦人も神の飼犬と言われるのなら、飼犬なのだから『主人の食卓から落ちるパン屑はいただく』のです」との信仰を表明しているのである。そして神の溢れるほどの豊かな食卓から落ちる、恵み深いパン屑であるなら、たとえ捨てる屑であっても癒されるとの信仰を言い表している。

28節：この返答は主イエスの心を動かしている。原文では「おお」という感嘆符で始まっている。あなたの信仰は「立派だ」。これは「大きい」とも訳せる。この女の応答に対し主イエスはこの婦人の信仰をほめ、癒しを行われる。

「そのとき」娘の病氣は癒されたとは、イエス様の言葉の発せられた瞬間と癒しが同時に起こったことを示している。主の言葉の権威と威力が現れている。

この記事は主イエスのメシア性、民との契約への忠実性を著すと共に、異邦人にも正しく主を理解するものがあり、やがて福音は異邦人にも及ぶことを示している。(袴田清子)

テキスト マタイによる福音書 15章21～28節
参照カテキズム 子どもカテキズム 問28, 30

〔単元のねらい〕

「神の恵みのみ」の真理が教えられているテキストである。神の愛と恵みを信じ、神の憐れみに依り頼む信仰に立つことを教えたい。神は私たちに憐れみを与えようとしておられる。身を低くして、神の大きな愛と憐れみに寄りすがって、神の恵みを待ち望もう。なお、〔 〕で示している救いの順序については、触れずに説教してもよいだろう。

「ただ神の憐れみによって」

今日の御言葉を聞いて、どう思いましたか。「ええっ!？」と思ったかもしれません。イエスさまがとても冷たく感じられる振る舞いをしておられます。一人の女の人がイエスさまに助けを求めています。イエスさまはそれに答えようとしません。弟子たちが「この女を追ひ払ってください」と言ったことについても、何もお叱りになりません。どうしてなのだろうと首をかしげざるをえないような、イエスさまのお姿なのです。

イエスさまは、ティルスとシドンの地方におられました。ティルスとシドンは地中海沿岸の町で、イスラエルからすると外国です。何のために外国に行かれたのかは分かりません。もしかすると、弟子たちと一緒に静かに祈りをする時を過ごそうとされたのかもしれません。けれども、イエスさまが来ていることを知って、一人の女の人がやって来ました。「カナンの女」と呼ばれています。外国の女の人です。外国でもイエスさまのことが知られるようになっていたのですね。その女の人はお母さんでした。そして、自分の子ども、女の子なのですが、子どもが病気でした。悪霊に苦しめられているとしか思えないような病気です。原因が分からず、治療することができない、つらい病気だったのだと思います。そのお母さんは、病気の子どもをいやしてはしくて、イエスさまのところにやって来たのです。

お母さんは言いました。「主よ、ダビデの子よ、

わたしを憐れんでください。」そう言って、イエスさまに憐れみを求めました。「主」、「ダビデの子。」これは、イエスさまが神の御子、まことの救い主であると知っている呼び方です。お母さんは、助けを求めることができるのは、もはやこのお方しかいないと思って、真剣に訴えて叫びました。それに対して、イエスさまは何もお答えになりません。彼女がいい加減な求め方をしたわけではありません。いったいどうして、イエスさまはお答えにならないのでしょうか。

イエスさまは、弟子たちが「この女を追ひ払ってください」と言って騒ぎ出したところで、ようやく、このお母さんにお答えになりました。「わたしは、イスラエルの家の失われた羊のところにしか遣わされていない。」イエスさまが福音を宣べ伝えて、力あるみわざを行われるのは、まずイスラエルの民、ユダヤとガリラヤの人びとに対してなのだ、ということです。けれども、なお、お母さんは、「主よ、どうかお助けください」と願い続けます。イエスさまは、「子どもたちのパンを取って小犬にやってはいけない」と答えます。子どもたちとはイスラエルの民のこと、子犬とは異邦人、外国人のことです。あなたに救いのみわざを行うと、子どもに与えるべきものを小犬に与えるようなことになる。それはしてはならないことである、ということです。

〔ここでイエスさまがおっしゃっておられるこ

とは、救いのみわざには順序がある、ということです。まず旧約の神の民イスラエルに対して救いの恵みが与えられます。全世界の人たちに福音が伝えられるのは、イエスさまの十字架と復活、そして聖霊降臨が実現してからです。ですから、異邦人、外国人に救いが与えられる時はまだ来ていない、ということです。]

イエスさまはこのお母さんに意地悪をしておられるのでしょうか。いいえ、そうではありません。イエスさまは、もちろん、すべての人びとのために遣わされたまことの救い主です。すべての人を神の救いへと招いておられます。けれども、ここで彼女に大切なことを教えておられます。そして、実は弟子たちにも教えておられるのです。

子どもと小犬では何が違うのでしょうか。子どもは親の子どもであって、親は必ず子どもを養わなければなりません。子どもにご飯を食べさせる。それは必ずしなければならないことです。けれども子犬は違います。小犬は飼い主の憐れみによって飼ってもらうのです。ただ飼い主の憐れみによってえさをもらいます。ですから、お母さんは言います。「主よ、ごもっともです。しかし、小犬も主人の食卓から落ちるパン屑はいただくのです。」これは言い換えると、「そうです。これはあなたの義務ではありません。ただ、まことの救い主なる神さま、あなたの憐れみにすがっているのです」、ということです。

こうして、イエスさまは、信仰について教えておられます。わたしたちは、神さまの前に罪を犯して、神さまから離れていた罪人です。罪人は、神さまに対して救いを要求することはできません。できることは、ただ神さまの憐れみにすがることです。神さまの憐れみを求めるだけです。ですから、救いは神の恵みであり、賜物です。信仰も恵みであり賜物です。そこで大切なことは、このお母さんのような、神さまの憐れみに信頼して待ち望む姿です。神さまに要求できるものではありません。けれども、神さまは憐れみ深いお方であ

る。そのことに信頼して依り頼みます。ただイエスさまを見つめて、まっすぐな姿勢でいる。その信仰に立つのです。そして、イエスさまは、その一途な、まっすぐに憐れみを求めて寄りすがる信仰をこのお母さんの中に認め、子どもの病気をいやしてくださいました。願いどおり、子どもはいやされたのです。よかったですね。まっすぐにイエスさまに依り頼む。その信仰が大切なのです。

実のところ、ただ神さまの憐れみであるとは、子どもと呼ばれているイスラエルの人たちにとっても同じことです。神さまに救いのみわざを要求できる人は一人もいません。ただ神の恵み、賜物なのです。傲慢になることなく、高ぶることなく、神の憐れみによりすがる信仰が求められます。そして、神の憐れみはたいへん大きいのです。イスラエルの人たちだけでなく、外国人にも、すべての人に救いの恵みが与えられる。それほどに、神の愛と憐れみは大きいのです。

憐れみを求めなければならないことを、人はなかなか受け入れることができません。むしろ、自分を高めて、神さまの前に自分を大きくしてしまう。そこに人の罪があらわれます。イエスさまは、そのわたしたちの罪を背負って死んでくださいました。神さまは、このイエスさまの十字架の死によって、わたしたちを憐れんでくださいます。救いを恵みとして与えてくださいます。イエスさまの十字架によって、生けるまことの神は、小犬にも大いに憐れみを示してくださいます。イエスさまが、小さな小さな小犬のためにもご自身の肉を引き裂かれ、血を流しておられるのです。

わたしたちは、神の小犬であることを喜びましょう。いまイエスさまは高く上げられ、聖霊を遣わして、ただ神さまの憐れみに基づく救いを恵みとしてすべての人びとに与えてくださいます。イエスさまを一途にみつめて、イエスさまといういのちのパンをいただいて、神さまの恵みと憐れみの中にとどまりましょう。（望月 信）

[今週の暗唱聖句] マタイによる福音書 15章27節

女は言った。「主よ、ごもっともです。」

しかし、子犬も主人の食卓から落ちるパン屑はいただくのです。」

〈ねらい〉

前週の「五千人の給食」を思い出しながら、導入しても良い。カナンの女の「信仰」は、イエスさまにささげられた「愛」そのものであり、「祈り」そのものであることを、ともに学びたい。

〈展開例〉

みなさんは、どうしてもほしいものがあったら、おねだりをしますか。それは、どうしてですか。

そのとき、お父さんや、お母さんは、どうしてくれましたか。

イエスさまは、五千人の人たちを、二匹の魚と五つのパンでやしなってくださいました。それは、イエスさまがほんとうのやしないぬしであることあらわすためでした。

あるとき、イエスさまは、カナンの女の人々が「わたしの娘をあわれんでください」との声を聞きました。そして、イエスさまは、「子供たちのパン

を取って小犬にやってはいけない」と言われました。それは、神さまの恵みをむやみカナンの女のような外国人にやってはいけないことを教えるものでした。

それでも、この女の人々が、「小犬も食卓から落ちるパンくずはいただくのです。」と言うと、イエスさまは、とてもかんしんされて、そのねがいのおりになるように言われると、むすめの病気はなおったのでした。

わたしたちも、いつも、イエスさまのみことばをもとめて、おいのりをささげましょう。

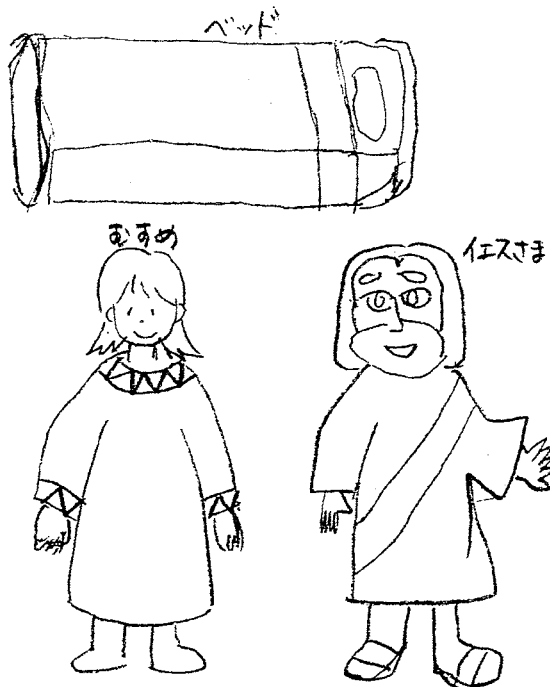
〈お祈り〉

天の父なる神さま、み名をさんびします。一つひとつのみことばをたいせつにすることが出来ますように。イエスさまのみ名によっておいのりします。アーメン。

〈やってみよう〉

○おきあがるむすめ

むすめをベッドにねかせて イエスさまのおことばのあと おきあがらせましょう。



ねらい

イスラエル人以外の異邦人（カナン人）でも、イエス様への信仰によって、病気がいやされたことを確認する。

マタイ福音者はユダヤ人向けの福音書であるため、イエス様の言葉ーイスラエルの家の失われた羊にしか違わされていないーが紹介されているが、順番としてまずイスラエルという意味であり、真実には異邦人の救いも意図していたと解釈してよい。

話し合ってみよう！

イエスさまが感心するような立派な信仰を持った人々が、見知らぬところにいるかも知れないことを考えてみよう。

祈り

イエス様が感心するような信仰深い人が周りにいることを感謝します。

展開例

イエス様も他人と出会って感心したように、新しい発見や学びをいつもできるように、共に話し合ってみよう。

～ 1 週間のミニ日記 ～

感心した人、立派だと思った人について、語り合ってみよう。

聖書日課

マタイによる福音書 15 章 21-28 節



お祈りしたいこと



心が落ち着いて、安心した心で、いつもすごせるように。

暗唱聖句

女は言った。「主よごもっともです。しかし、子犬も主人の食卓から落ちるパン屑はいただくのです。」

（マタイ 15：27）

✠聖書をひらいて (マタイによる福音書 15 章 21～28 節)



異邦人の救い ←
イスラエルの救い ←

羊	羊	子犬	羊	子犬	羊
子犬	子犬	子犬	子犬	子犬	羊
羊	羊	羊	子犬	羊	子犬
羊	子犬	子犬	羊	羊	羊
子犬	子犬	子犬	羊	子犬	子犬
子犬	羊	羊	子犬	子犬	羊

←スタート



☆問題：イエスさまは、まず「イスラエルの失われた羊」へ伝道しました。しかし今朝の箇所は、カナン（異邦人＝子犬と表現）の町に伝道に来られたことが記されています。
羊 ⇒ 羊 ⇒ 子犬 ⇒ 羊 ⇒ 羊 ⇒ 子犬 ⇒ …の順に進んでください。
ゴールは、どちら???

✠考えてみよう

☒わたしたちは、ユダヤ人ではないので、異邦人です・・ね。イエスさまも、イエスさまの弟子も、国や人種をこえて、伝道したことがわかりました。食卓のパンは、イエスさまそのもので、たとえパンくずであっても、同じようにイエスさまの命が与えられるのですね。

✠言ってみよう

問 29

神さまの恵みとは何ですか？

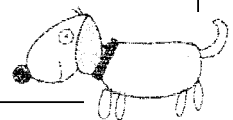
神さまが、一方的に、愛をもって、私たちに救いのうちに〇〇〇〇くださったことです。私たちは、聖霊のお働きによって、自分を罪人と認め、悔い改め、イエスさまを信じることができました。ですから、私たちは、心をこめて、神さまを賛美します。

✠やってみよう —アドベント—

☆降誕劇や、クリスマス賛美の練習は、進んでいますか？子どもが演じる劇だけでなく、人形劇・ペープサート・手作り紙芝居・影絵・パソコンを使ったパワーポイントなど、人数に合わせて工夫することも楽しいですね。みんなで力を合わせて、よきものをおさげすることができますように。

✠今週の暗唱聖句 (マタイによる福音書 15 章 27 節)

女は言った。「主よ、ごもつともです。しかし、□□□も
主人の食卓から落ちるパンくずはいただくのです」



〈展開例〉

①主イエスがカナンの女性にお語りになった「立派な信仰」(15:28)と訳されている元々の言葉は、「大きな信仰」という意味です。一方で、主は弟子たちに「あなたの信仰は薄い」とおっしゃったことがありました。「薄い」といのは、「小さい」という意味です(同6:30, 8:26, 14:31)。ですから信仰には大・小があるのです。自分の信仰を吟味する時、私たちの信仰はどうでしょうか。どちらかと言うと、小さく、薄い信仰に属するのではないかと考えがちかもしれません。イエスさまを信じるには、まだまだだと遠慮する者も多いでしょう。しかし、主イエスは、カナンの女性のように、すべての者が立派で大きな信仰に生きることを願っておられます。

②では、立派な信仰とは、どのような信仰なのでしょう。ひとつは、諦めずに主に求め続け、祈り続けることです。カナンの女性は、自分の娘を癒していただきたくて、主イエスに、しきりに願います。でも主イエスの反応はどうでしょうか(23, 24, 26節)。主イエスは彼女の思いを無視しているかのように、前に進んでいかれます。私たちが知っている主イエスのお姿と全然違うかもしれません。しかし、彼女はどのようにしたのでしょうか。無視されても、拒否されても、なお主を追い掛けていくのです。主が沈黙されるならば、それで、私たちの信仰、私たちの希望は消えてしまうわけではありません。むしろそこから信仰が始まることがあるのです。

③主イエスは断固として、彼女の願いを拒否なさいました。それには理由があります。主は、父

なる神の御心のゆえに、異邦人であるカナンの女性を拒否なさったのです(10:6)。彼女は、主から「小犬」呼ばわりされています。普通、そこまで言われたら、「もうあなたなど知らない」と言って、主の前から立ち去ってしまうことでしょう。しかし、彼女は、「小犬」と呼ばれて、「主よ、ごもつともです」と、主の言葉をそのまま受け入れました。彼女は、たとえ自分の願いが主から受け入れられなかったとしても、主の御心が実現されるならば、ここにわたしの救いがあることを信じたのです。私の願いではなく、主の御心が行われるように祈ること。ここに、信仰の大きさがあるのです。

④ある人は、このカナンの女性について、「たいへんユーモアな女性だ」と言いました。なぜでしょうか。それは自分が「小犬」呼ばわりされたことの中に、神の深い愛を見出したからです。小犬とは、小さな犬ではなく、家で飼われている犬のことです。たとえ、主人の子どものようにごちそうにありつけなくても、テーブルの下に落ちたおこぼれにはあずかれる。わたしはそれのおこぼれで十分です。それほどにまで、神さまの救いの恵みは大きく豊かなのです。カナンの女性はそのことを信じました。神に拒絶されていると感じる時、私たちの心はどのようなのでしょうか。益々、心頑なになり、神の恵みを見出すことはできないと絶望してしまうことでしょう。もう、神を信じる心のゆとりなどなくなってしまうのです。しかし、信じるゆとりのないほどの苦難と試練の中にあっても、心柔らかにして、神の恵みを見る信仰に生きることができるのです。



そのままでは永遠の滅びに至る私たちを救い出すために、天の父なる神様は救い主を遣わしてくださった。

〈イエス様は「言」〉

年老いたヨハネが御霊の導きを受け福音書を記している。深い祈りと熟慮の中でイエス様を「言」といっている。「言」は新約聖書のギリシャ語でロゴス。言葉が軽い時代に生きている私たちですが、ユダヤ人の言語感覚は違う。旧約聖書の創世記は「初めに、神は天地を創造された」。更に「光あれ」と言われ、「こうして、光があった」（創世記1:3）と記している。神の言葉には本当に力がある。預言者イザヤは「神の口から出る言葉がご自身が望まれることを成し遂げ、使命を必ず果たす」と語っている（イザヤ55章）。ヘブライ語のダーバルは、言葉とか出来事と訳される。

また、ヨハネがロゴス「言」を用いたのは、当時、多くの異教徒たちがロゴスという言葉を用いていたから。ロゴスには論理という意味もある。絶えず万物が流転する中にも秩序があり、ロゴスがあるからと考えていた。真の神様と真実の救い主を知らない人たちにも何としてもイエス様をお伝えしたいと願うヨハネは、一度聞いたら忘れることが出来ないような言葉で「初めに言があった。言は神と共にあった。言は神であった」（1節）と語る。1～14節までに「言」という表現が13回もでてくる。「言」は受肉前のイエス様であり父と子と御霊の三位一体の第二位格。「父のふところにおられ」（18節）本当に深い愛の交わりの中、御心の全てを知り、「言」として私たちに啓示してくださる御方。

〈神の御子は受肉された〉

永遠から神と共におられる「言」である神の子（1節）が、肉となって私たちの間に宿られた（14節）。神としての御人格を持ち、神としての性質に、

更に人としての性質をとられた。「聖霊の力により処女マリアの胎に宿り真実の身体と、理性的靈魂をとって人となり、しかも、罪なくして彼女から生まれられた」（ウ小教理問答22）。私たちの間に宿られたとは、天幕を張って住むこと。昔、荒れ野を旅する神の民は幕屋で礼拝。そこで栄光の神様を礼拝しました。福音書記者ヨハネは、イエス様は、この世においでくださり神様のご栄光を現しておられ「わたしたちは、その栄光を見た」と言うのです。

〈わたしよりも優れた御方〉

このイエス様について声を張り上げて語っている人がいる。それが洗礼者ヨハネ。神から遣わされた人（6節）で、イエス様より半年前に誕生。まことに力強い悔い改めの説教をしていた預言者。多くの人が、このヨハネに注目し心ひかれていた。ヨハネは、自分に注目しないで欲しいと願う。声を張り上げ「わたしの後から来られる方は、わたしよりも優れている」と語る。更に「わたしよりも先におられたから」（15節）と、永遠から存在しておられる神であると語っている。そして、私たちは、このイエス様から恵みの上に、更に恵みを受けたのであり、私たちは皆、恵みを受けることができる（16節）と力強く証しする。それは、この御方が恵みと真理に満ちておられるから（14節）。「恵み」とは、受ける資格が全くない者への一方的な憐れみ。罪人である私たちに注がれる無償の祝福。罪の赦し、神の子の数に加えられ、神との交わりの回復、永遠の命の恵み、神の愛の中、生涯を希望をもって歩める霊的な祝福。「真理」とは、模型に対する実物。旧約時代にも、キリストの救いが示されていた。しかしそれは影、ひな形、模型。しかし肉をまとわれ、実物としてお出でくださり、豊かな命の喜びに生かしてくださっている。（西堀則男）

※第31号（2008年10月19日分）より再掲載。

12月11日 「わたしたちの間に宿られた神」 説教展開例

テキスト ヨハネによる福音書 1章14～18節

参照カテキズム 子どもカテキズム 問22

〔単元のねらい〕

一つには、父の独り子としての神が肉をとり、人間となられたことの驚きを伝えたい。そのお方は「言」であるお方であり、神を示すために来てくださった。わたしたちは、このお方によって神を知り、あがめることへと招かれている。そして、もう一つとして、このお方が人としてきてくださり、欠けのないまことの人として歩み抜いてくださったことに触れる。まことの神でありまことの人であるお方に結ばれて、わたしたちも、極めて善いものとして造り替えられる。聖化の道をたどるのである。

「神が人となってくださった！」

子どもの頃、犬を飼っていました。一緒に散歩に行ったり、じゃれあって遊んだりして、仲良く過ごしました。犬は人間の気持ちをよく察してくれる動物だと思います。友だちとけんかをして落ち込んでいるときには、そばに来てべろべろとなめて、慰めてくれました。けれども、ときどき思いました。犬は、こちらの落ち込んだ気持ちを察してくれるけれども、相談相手になれるわけではない。言葉が通じているわけではないのです。嬉しいとか楽しいとか悲しいとか、そういう気持ちは通じるのだけれども、悩みを打ち明けて、一緒に解決していくというのではない。話ができて、お互いに分かり合えれば、何とすてきなんだろう。そんなふうに思うことがありました。

犬と人間では、言葉をかわして思いを分かち合うこと、理解し合うことは難しいでしょう。犬と人間の間には、乗り越えることのできない壁があります。大きな壁、また、大きな溝があるのです。犬は犬であり、人間は人間です。そして、神さまと人間の間でも、同じようなことが言えるのではないのでしょうか。いや、その壁、その溝は、犬と人間どころではありません。神さまは神さまであり、人間は人間である。それはまったく違っています。神さまは、天と地、この全世界をお造りになった創造主であられます。それに対して、人間は、その造られた存在、被造物にすぎません。いったいどうして、人間に神さまのことが本当に分か

るのでしょうか。神さまのことが分かる。そんなことが本当にありえるのでしょうか。

神さまは、本当に、わたしたち人間のことを愛してくださっています。ですから、神さまは、とても不思議なことをしてくださいました。「言は肉となって、わたしたちの間に宿られた。」なんだか難しい文章ですね。「言」というのは、「神さま」と言い換えて読むとよいでしょう。「神さまは肉となって、わたしたちの間に宿られた。」ですから、神さまご自身が人間となって、わたしたちの間に来てくださった、ということです。これはイエスさまのことです。イエスさまが地上にお生まれになった。クリスマスの出来事です。クリスマスにおいて、まことの神さま、御子である神さまが人間になって、一人の人として、赤ん坊としてお生まれくださいました。

それは、犬と話をするために、わたしたちが犬になる、犬になって話をするということに似ています。それは実際にはできないことですが、けれども、神さまはしてくださいました。わたしたち人間と話をするために、人間になってくださいました。神さまであるお方が、人間としてお生まれくださり、わたしたちの一人になってくださいました。何と驚くべきことでしょう。

「言」は「神さま」と言い換えて読めばよいと言いましたが、この「言」と呼ばれる神さまはイ

イエスさまです。イエスさまは神さまの御言葉を語るお方として来られました。そして、それだけでなく、神さまの御言葉そのものです。イエスさまは、人間として、目に見えるお方として来られましたが、まさに目に見える神の御言葉、神の御言葉が生き、動き、語っておられる。そういうお方として来られました。ご自身の命と人生をもって、神さまが共におられること、神さまがどのようなお方なのか、そのことをわたしたちにお知らせくださったのです。

「わたしたちはその栄光を見た。それは父の独り子としての栄光であって、恵みと真理とに満ちていた」とあります。まさに、イエスさまを見ると、神さまの栄光が分かる。神さまの恵みと真理が分かるのです。そのために、神さまが人間になって生まれてくださった。創造主であるお方が、へりくだって、被造物である人間になってくださった。これは、神さまのへりくだりであって、驚くべきこと、とてつもないことなのです。わたしたちを愛して、神さまは、とてつもないことをしてくださいました。神さまは、そして、イエスさまは、何とすばらしいお方でしょうか。

クリスマスにお生まれになったイエスさまは、ですから、神さまであって人であるお方です。聖霊によって罪のないお方としてお生まれになり、そのご生涯においても、聖霊に守られて、罪を一つも犯すことなく生きてくださいました。ですから、このイエスさまこそ、完全な人間であられます。とくに、神さまをあがめて、父なる神さまに従順にしたがって歩まれました。人を愛して、神と人に仕える人生を歩み抜かれました。そして、ついには、わたしたち罪人の罪を背負って、友のために命を捨てる、それ以上に大きな愛はないと言われる、それほどの大きな愛を示して、死んでくださいました。十字架につけられてくださいました。イエスさまは、こうして、欠けのない、完全な人間として生き、また、死んでくださったの

です。これはすばらしいことです。

神さまは、イエスさまをこういう人間として生まれさせて、人間って本当は善いものなんだということを教えてくださいました。人は、罪を犯して、墮落して、悪いことを考え、行うようになりました。今、わたしたちはだれもが神さまの御前に罪人です。善いことをしようとしても、いつも悪いことが寄り添う、惨めな存在です。けれども、イエスさまは、神さまがお造りになった本来の人間の性質、極めて善いものとしての人間として生き抜いてくださいました。このイエスさまにおいて、神さまは、人間としての真実のあり方をわたしたちに示しておられます。

そのイエスさまがわたしたちの間に来てください、神さまは、わたしたちに信仰を与えて、わたしたちをイエスさまと結びつけてくださいました。わたしたちがイエスさまを信じるとは、イエスさまと一つにされることなのです。イエスさまと一つにされ、イエスさまに重ね合わせられて、わたしたちは、イエスさまに似たものへと変えられます。そうして、神さまの極めて善いものであることを取り戻すことができるのです。極めて善いものとしての人間とされる。それが、イエスさまがわたしたちの間に共におられる幸いです。

わたしたちにはなお罪があり、悪いことを思ったり、してしまったりします。この世界にも、罪と悪があって、惨めなこと、つらいことがたくさんあります。けれども、イエスさまがわたしたちの間に共におられて、神さまが日ごとにわたしたちとこの世界を新しくしてくださっています。その新しいみわざを始めてくださったのです。それがクリスマスの大きな喜びです。

イエスさまは今もわたしたちの間にいて、わたしたちを造り替えてくださっています。そのために、わたしたちはイエスさまの御言葉を聞いて歩みましょう。皆さんにクリスマスの恵みが豊かにありますように。(望月 信)

[今週の暗唱聖句]

ヨハネによる福音書 1章14節より

言は肉となって、わたしたちの間に宿られた。

わたしたちはその栄光を見た。

〈ねらい〉

永遠の神さまは、その愛をイエスさまの誕生において現された。イエスさまがわたしたちとともにおられることを信じつつ、クリスマスの喜びに向かって備えていきたい。

〈展開例〉

神さまは、むかしも、今も、これからも、ずっとおられるお方です。イエスさまも、神さまのひとり子として、むかしも、今も、これからも、ずっとおられるお方です。

イエスさまは、わたしたちのために、人間になられたお生まれくださいました。それは、神さまに造られた人間にはけっしてできないことです。わたしたちを造られた神さまだから、人間になって、わたしたちと同じものになってくださいました。

イエスさまは、わたしたちの身代わりに十字架にむかって歩まれ、つみがないのに、わたしたち

のために、つみを負ってくださいました。ここに、神さまの愛があります。

今、イエスさまはどこにおられますか。それは、イエスさまの十字架と復活を信じるひとびとの心の中におられます。そして、いつも、イエスさまのおたんじょうをよろこぶ心を与えてくださいます。

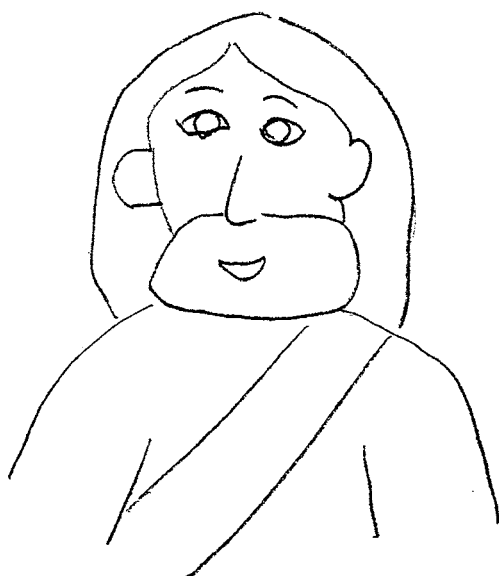
それは、イエスさまの恵みによって、クリスマスのよろこびをお迎えすることです。今年も、みんな、イエスさまのおたんじょうをよろこび、神さまをさんびしましょう。

〈お祈り〉

天の父なる神さま、み名をさんびします。イエスさまのおたんじょうを、えいえんの神さまのしゆくふく中で、ともによろこぶことができますように。イエスさまのみ名によってお祈りします。アーメン。

〈やってみよう〉**○わたしたちのイエスさま**

いつでもわたしたちをみまもってくださるイエスさまに いろをぬりましょう。



ねらい

言葉は事の端としての出来事、誠としての誠実、そして、理としての法則の意味を同時に持っている。神様の言葉も出来事・誠実・法則となって現れていることを聖書は語っている。

人間の言葉も、人間の感情や意志が伴うため、人を慰めたり、傷つけたりする力を発揮する。神様は思いや意志や愛情を持っておられ、神様の言葉も人格となって、人間に働きかける。また、神様は全知全能の神として、世界の創造をも、ご自身の御言葉によって成し遂げられた。言葉は神自身を示している。

展開例

「いまだかつて、神を見たものはいない。父のふところにいる独り子である神、この方が神を示されたのである。」

この言葉を声に出して、表現し、この奥義を味わってみよう。

話し合ってみよう！

真実の神様が人間の姿をとって現れてくださった。それがイエス・キリストである。このことに、共に驚こう。

祈り

神様が私たちと同じ人間になって、この世に生まれてきた、クリスマスの恵みを感謝します。

～ 1週間のミニ日記 ～

アドベントやクリスマスの行事の中で生活していることを思い起こそう。



お祈りしたいこと



クリスマスをむかえる祈りをささげよう。

聖書日課

ヨハネによる福音書 1章 1～18節

暗唱聖句

言は肉となって、わたしたちの間に宿られた。わたしたちはその栄光を見た。

(ヨハネ 1:14)

✠聖書をひらいて (ヨハネによる福音書1章 14～18 節)

3	4	5	7	9	10	11	13	15	17	18	20	21	24	27	★	
6	12	15	17	18	19	20	22	24	26	27	28	29	31	33		★
9	10	11	13	15	18	21	23	24	25	27	28	29	31	3		
12	13	14	16	18	19	20	22	23	26	30	31	2	4	6		
15	18	21	22	24	25	26	28	29	31	3	5	9	12	15		

問題：3の倍数を黒くぬってください。(マスのスミまできちんとぬってね)

黒く浮き出た字はなんと書いてあるでしょう(目を細めて見てね(^_-)☆

父のふところにいる_____である神、この方が神を示されたのである」1:18



✠考えてみよう (質問に答えてあげてね！)

☒ 神さまは、「言」によって、すべてのものをお造りになりました。聖書も「ことば」で書いてあります。お祈りも「ことば」を使います。賛美も「ことば」を使います。信仰告白も「ことば」を使います。どうしてですか？動物は、ことばを使えません。人間を救うためですか？

(Sくん・12才)

✠言ってみよう

問 22 私たち、神の民のあがない主はどなたですか？

私たちの唯一の主、イエス・キリストです。イエスさまは、永遠の初めから御父より生まれ真の〇〇〇〇です。私たちの救いのために聖霊によっておとめマリアより肉体を取り、真の〇〇となってくださいました。イエスさまは、真の神であり真の人であり続けてくださる二性一人格の神さまです。

✠やってみよう

①ヨハネ1:1～14の中に「言」が何回出てくるか、「言」の文字を丸く囲んで数えてみよう！_____回

②「言」を、イエスさまに入れ替えて読んでみよう。意味が通じるかな？

✠今週の暗唱聖句 (ヨハネによる福音書1章 14 節)



□□□は肉となって、わたしたちの間に宿られた。わたしたちはその栄光を見た。

〈展開例〉

- ①「言は肉となって……。」「言」とは、イエス・キリストのことです。言が肉となるというのは、神が私たちと同じ人間になってくださったということです。ヨハネは、人間のことを「肉」と言い表しています。それは、人間が、神さまとは違い、弱くもろい存在であり、罪のゆえに死んで滅びるしか他ない存在であるということです。主イエスは、罪はないという仕方です。そのような私たちと同じ人間として生まれてくださいました（ウ小22参照）。
- ②「わたしたちの間に宿られた。」「宿られた」というのは、天幕（テント）を張って、そこに住むという意味です。何泊かだけ、天幕を張って宿泊するというではありません。神さまは、この世界に天幕を造り、そこに住まわれます。住むというのは、分かり易く言うと、私たちの仲間入りをしてくださったということです。仲間入りをするので、接待してもらうお客さんとして宿に泊まるものではありません。私たち人間と同じ地上に生きる者として、天幕を張って住んでくださるということです。
- ③かつて、エジプトから解放されたイスラエルの民も、旅の中で天幕を造りました。それは自分たちのためだけではなく、神を礼拝する天幕も合わせて造ったのです。神が住んでおられると信じる礼拝の場所を造って、神と共にあって旅を続けました。ヨハネは、「わたしたちの間に」とあると語ります。主イエスにおいて、神さまがより確かなかたちで、ここにいらっしゃるということを明らかにしているのです。もし、私たちが住んでいるこの世の天幕だけが、私たちの住みかであるならば、罪のゆえに神さまを、まことの神さまとして、ほめたたえることはできま

せん。しかし、主イエスのゆえに、神が神として生きておられることを見出すことができます。「わたしたちはその栄光を見た」と賛美することが許されるのです。

- ④主イエスが、私たちと同じ人間になってくださったという恵みを更に掘り下げていきますと、次のようなことが言えるでしょう。すなわち、神さまは、私たち人間、一人ひとりの存在を肯定し、愛してくださるということです。私たちは、自分のことや他人の存在を消してしまいたいほどに、自分が人間であることが嫌になってしまうことがあります。特に人間の弱さや貧しさ、醜さが明らかになる時、その思いはより強くなるでしょう。だから、私たちは自分を否定ばかりして、なかなか受け入れることができません。たとえ受け入れることができたとしても、他人より自分は優れているという優越感や、「他人は他人、自分は自分」というある種の開き直りのような思いにおいてでしか受け入れることができないところがあります。
- ⑤私たちをお造りになった神さまの目からすれば、「お前は どうしようもないやつだ」と見捨てられてもおかしくはありません。まして、罪を犯した人間と同じ姿をとりたいなどと思うのでしょうか。私たちは、自分が受け入れることのできない自分や、自分が嫌いな他人と同じ姿を取りたいなどと思いたくもないはずですが、しかし、神さまは違います。私たちが自分や他人を否定しようとも、神さまはあなたを愛し、愛するあなたと同じ姿をとってくださるのです。たとえ、神さまご自身に不利益や痛みが生じたとしてもです。クリスマスの時にこそ、苦難の中を歩まれ、最後に十字架におかかりになったキリストを思い起こしたいのです。



ルカ福音書が母マリアにスポットを当てるのに対し、マタイ福音書はあまり目立たない夫ヨセフや東方の博士たちを登場させ神の救いの約束の実現とその意味に注目を置こうとする。

〈神の約束の実現としての選びの器〉

マタイ福音書が夫ヨセフを登場させるのは、神の約束のダビデの子としてイエス・キリストがお生まれになったからである。20節で主の天使が神の救いの約束の実現を伝えるところで、ヨセフを「ダビデの子ヨセフ」と呼びかけている。それはマタイが既にイエス・キリストの系図において明らかにしたことであった。この御使いを通しての主の御言葉に、ヨセフは神の救いの御業の実現のための器としての彼の果たすべき使命・役割を新たにまた深く受けとめさせられたに違いない。ともするとクリスマスは、処女降誕の聖霊の御業（ルカ1:35）から母マリアに焦点が片寄りがちであるが、神の救いという点からすると、夫ヨセフの果たした役割は小さくない。このことを彼は深く自覚させられたので、マリアを妻として迎え入れ（1:24）、そして結婚してもイエスが生まれるまでは夫婦関係を自制し（1:24）、正式の嫡子としてイエスと命名したのである。

〈律法に忠実な人〉

マタイ福音書では神の救いの御業の筋道は読者に一目瞭然である。最初から妻マリアの妊娠は聖霊の御業による奇跡であることが述べられている（1:18）。マリアはそのことを直接御使いから説明を受け、彼女自身の信仰をもって同意し受け入れた（ルカ1:38）。けれども、ヨセフにはそのことは未だ知らされていない。おそらくマリアもすべてを神に委ねて、受胎告知（ルカ1:28～33）のことをヨセフには語らなかったであろう。それ故に、夫ヨセフは大いなる苦悩に陥る。未だ婚約中とはいえ、ユダヤの律法では結婚関係と同様と見なされ、婚約中の他の男性との関係は姦通と同罪とされたのである。彼の苦悩を深めたのは妻マリアへの不信だけではなく、彼の神の律法へのこ

の忠実な態度にあった。マタイは夫ヨセフを「正しい人であったので」と、その苦悩の真の理由を述べる（1:19）。マリアへの愛とユダヤの掟との狭間に彼は立たせられ、律法を重んずるヨセフは密やかな離縁を決断し、自ら身を引こうとすることで問題の解決を図ろうとする。人間的にはこれ以上の解決の手だてではなく、まさにギリギリの選択であった。

〈神、我らと共にいます、インマヌエルの恵み〉

このジレンマ・人間的な解決に終止符を打ち、さらなる上よりの神による解決へと導いたのが、御使いによる神の介入の御業であった。この主の天使の介入によってこの真相は明らかにされ、夫ヨセフもまた神の救いの約束の実現の器として神の御業へと招き入れられる。ヨセフは、妻マリアへの村人のいわれなき中傷やユダヤの掟による断罪の危険からマリアを守り、マリアがイエスを無事出産することを助ける役割を、神によって与えられていく。

ヨセフの役割は、確かにマリアのそれに比べて補助的なものでしかないとしても、このヨセフの同意と協力がなければマリア一人で何もかも困難を背負い、挙げ句の果てに石打ちにされて殺されてしまう恐れも十分にあったのである。マタイがイエスの名前を「インマヌエル（神、我らと共にいます）」としているのは、もちろん旧約聖書のメシア預言の成就（イザヤ7:14）であるが、そのようにしてマリアやヨセフと共に神がいてくださって人間的な解決や様々の危険から彼らを守り、そうして神の約束が彼らの信仰を通して実現されるためにほかならなかった。そして、このヨセフとマリアにおいて成された神の救いの御業は、さらに約束の民イスラエルの救いの実現へと進展していくことになる。まさに主の御名インマヌエルが、約束の民において、このお方によって実現されるのが、神の御心なのである。

（山下朋彦）

※第19号（2005年12月18日）より再掲載。

テキスト マタイによる福音書 1章18～25節
参照カテキズム 子どもカテキズム 問22, 23

〔単元のねらい〕

婚約者のマリアが妊娠したことを知り、身に覚えのないヨセフは悩み苦しむ。そんな悩み苦しみのただ中のヨセフを神さまは顧みられ、天使を通じて、御子の御降誕を告知された。身に覚えのないことで悩み苦しまざるを得ない人間の代表のようなヨセフ。しかし、神さまは、そんな弱い人間を捨て置かれることなく、共におられることで、慰め、励まし、支えてくださる。インマヌエル、神さまが共におられる幸いを子どもたちに伝えたい。

「神さまが一緒にいてくださるために」

愛するお友だち、おはようございます。

もういくつ寝ると、クリスマス？ このクリスマス・クランツの4本のローソク全部に灯がともりました。そして、いよいよ、来週の日曜日がクリスマス。今年は、神さまを礼拝する日曜日が、クリスマスで、ドンピシャ。

さて、今日も、アドベントのお話をしましょうね。

昔、昔、ユダヤの国にヨセフさんとマリアさんがいました。二人は、結婚することになっていました。ルカによる福音書には、そのマリアさんのところに、天使のガブリエルさんがやって来て、「あなたは、神さまのお子さま、イエスさまのお母さんになります」って知らせたお話が書いてあります（ルカ1:26以下）。マリアさんは、最初は、そんなこと、とても信じられなかったけれど、神さまは何でもお出来になるの。だから、マリアさんは、「わたしは神さまを信じます。神さまのお言葉通りになりますように」（ルカ1:38）って言いました。さあ、そのマリアさんと結婚のお約束をしていたヨセフさんなんだけど、ヨセフさんは、アリアさんがお嫁さんになる前に、おなかの中に赤ちゃんが与えられたと知って、とても悩みました。マリアさんをお嫁さんにしようかどうか、とても悩んだ。悩んで悩んで、夜も眠れませんでした。それで、ヨセフさんは、いろいろ考えて、

どうとう、マリアさんをお嫁さんにはしない！って決めました。そんな夜のことで。ヨセフさんは、マリアさんと結婚しないって決めたので、ぐっすり眠ることができたのですが、夢を見ました。どんな夢だったかと言うと、天使さんが現れる夢でした。たぶん、マリアさんのところにやって来たガブリエルさんだったのじゃないかと思います。その天使さんは言いました。

「ヨセフ、安心しなさい。マリアのおなかの赤ちゃんは、神さまのお子さまです。マリアは男の子を産みます。その男の子にイエスと名前を付けなさい。」（マタイ1:20－21）

実は、天使さんが知らせてくれたことは、ずっとずっと昔、ヨセフさんが生まれるよりも、ずっとずっと昔、神さまがお約束してくださっていたことなのです。そのお約束を神さまは、ちゃんと守ってくださいました。そのお約束というのは、預言者のイザヤさんを通して、神さまがくださったお約束でした。

「見よ、おとめが身ごもって男の子を産む。その名はインマヌエルと呼ばれる。」（1:23）

「インマヌエル」というのは、神さまと一緒にいてくださるということです。

ところで、こんなクリスマスの讃美歌があるの知ってるかな？「おうまれのイエスさまが」という題の讃美歌です。

おうまれの イエスさまが
笛ふけ太鼓を鳴らせよ、
おうまれの イエスさまが
みんなでうたをうたおう。

このよろこびの日を
かみのたみは預言し
むかしむかしから
わたしたちも待っていた。
おうまれのイエスさまが
笛ふけ太鼓を鳴らせよ、
おうまれのイエスさまが
みんなでうたをうたおう。

(讃美歌第二編117番、日本基督教団出版局)

これは、日本では江戸時代にあたる時期にフランスで作られた、クリスマスの古い古い讃美歌です。それでは、どうして、イエスさまがお生まれになったので、笛吹いたり、太鼓鳴らしたり、歌

を歌ったりしてお祝いするのでしょうか。今だと、どうして、クリスマスツリーやクリスマスリースを飾ったり、クリスマス会をしてお祝いするのでしょうか。

それは、神さまが、みんなと一緒にいて守り導いてくださるために、人となってお生まれになったからです。何よりも、みんなを罪や悪魔の力から救うため、そう、あの十字架にかかって死んでくださるために、人となってお生まれになったからです。そういうわけで、イエスさまがみんなと一緒にいてくださって、特に罪や悪魔の力から守り導いてくださるために、人となってお生まれになったことをお祝いする、それがクリスマスです。そのことをお祝いするクリスマスが来週の日曜日になりました。今年も、来週、教会の日曜学校で、みんな、イエスさまのお誕生ををお祝いしましょうね。

(長谷川潤)

[今週の暗唱聖句] マタイによる福音書 1章23節

「見よ、おとめが身ごもって男の子を産む。その名はインマヌエルと呼ばれる。」

この名は、「神は我々と共におられる」という意味である。



〈ねらい〉

神さまは、み使いによって、イエスさまの誕生をヨセフに告げられた。その恵みを感謝して受けとめたい。「インマヌエル」という言葉も、そのまま覚えて、救い主の来られた恵みを感謝したい。

〈展開例〉

みなさん、来週は、いよいよ、クリスマスですね。楽しみにしていますか。どうして、クリスマスは楽しいのでしょうか。それは、みんなで、心を一つして、イエスさまのおたんじょうをよろこぶからです。ひとりでも、おいわいできますが、やっぱり、みんなといっしょに、たくさんの人たちとおいわいすることのほうが、もっと、たのしいですね。

ヨセフさんは、イエスさまのおたんじょうを知らされて、とってもなやみました。まだ、けっこんしていないのに、赤ちゃんをマリヤさんが身ごもっていたからです。

でも、神さまは、みづかいをヨセフさんのもとにつかわして、「おそれないで、マリヤさんとけっこんしなさい」と言ってくださり、赤ちゃんは、神さまのれいによって与えられた、ほんとうにくべつなあかちゃんであることを告げられました。

そして、「イ・ン・マ・ヌ・エ・ル」というにくべつなお名前といっしょに「イ・エ・ス」という救い主のお名前をつけてくれました。

ヨセフさんは、このお名前のとおりに、赤ちゃんを「イエス」と呼んで、マリヤさんといっしょにととても大切に赤ちゃんを育てました。

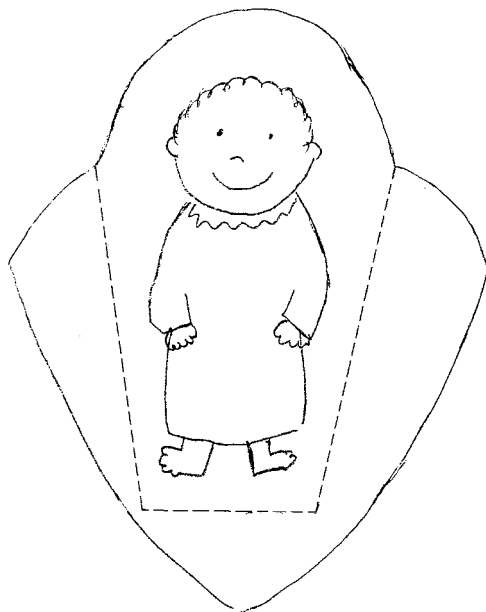
〈お祈り〉

天の父なる神さま、み名をさんびします。わたしたちのためにイエスさまがお生まれくださってありがとうございます。イエスさまのみ名によってお祈りします。アーメン。

〈やってみよう〉

○あいのおくりもの みこイエスさま

きりとりていろをぬり てんせんをおって だっこしてあげましょう。



ねらい

ヨセフの苦しみが表現されているので、本当にマリアは聖霊によって身ごもったことがよく伝わってくる。ありえない奇跡であるが、現実に関わったことであることをしっかり伝えることができる。神様は、本当に必要なときは奇跡を起こされる。しかも、この奇跡は、アブラハム以来の長い長い約束の成就であった。クリスマスの偉大さがよくわかる。

展開例

イエス様のお父さんになったヨセフの信仰について子どもと対話しながら、話し合ってみよう。

話し合ってみよう！

ルカ福音書は母マリアの信仰について、マタイ福音書は父ヨセフの信仰について、それぞれ書き記されている。両方あわせて、イエス様が生まれたときの様子を考えることができる。マリアとヨセフのそれぞれの心の思いを想像して話し合おう。

祈り

ヨセフさんとマリアさんから神さまの独り子イエス様が生まれたことを感謝します。

～ 1週間のミニ日記 ～

いよいよクリスマスが近づいてきます。期待や喜びを語ってみよう。

聖書日課

マタイによる福音書 1章 18-25 節



お祈りしたいこと



神様から与えられたクリスマス・プレゼントを喜ぶことができますように。

暗唱聖句

「見よ、おとめが身ごもって男の子を産む。その名はインマヌエルと呼ばれる。」この名は、「神は我々と共におられる」という意味である。

(マタイ 1:23)

✠聖書をひらいて(マタイによる福音書1章18～25節)

⇒

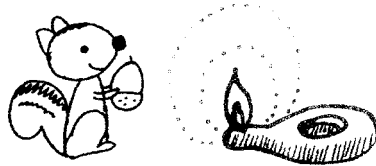
↓	コ →	ハ ↓	カ →	ラ ↓
コ →	ノ ↑	ジ ↓	ウ ↑	デ ↓
ノ ↓	ン ←	ブ ←	ク ↑	ア ↓
タ ↓	ツ →	ミ ↓	ス ↑	ル →
ミ →	ヲ ↑	カ →	ラ ↑	

☆問題①: ⇒ の方向にスタートして、矢印の示す方向に文字を読んでいってください。

スタート⇒

⇒ゴール

⇒ ゴール



✠考えてみよう (質問に答えてあげてね!)

☒ ヨセフの夢にあらわれた主の天使は、私のところにもあらわれてくれますか? (Pちゃん)

✠言ってみよう

問23 主イエス・キリストとお呼びするのはなぜですか?

〇〇〇とはお名前で「罪からの救い主」、〇〇〇〇とはお働きを表し、「神さまから油を注がれた方」という意味です。このお方が私たちの主として与えられました。ですから、私たちは、喜びと感謝をもって主〇〇〇・〇〇〇とお呼びするのです。

✠やってみよう

— マタイの系図 — (マタイ1:1～17) ☆名まえを入れてね!

(アブラハム) ⇒ () ・ (ボアス) ・ (ダビデ) ⇒ () ・ (ヨセフ) ⇒ ()

✠今週の暗唱聖句 (マタイによる福音書1章23節)

「見よ、おとめが身ごもって男の子を産む。その名はインマヌエルと呼ばれる。」この名は、神 □ □ □ □ □ □ □ □ おられるという意味である。



〈展開例〉

①ヨセフは、婚約者マリアが、自分以外の何者かによって妊娠したという事実を知りました(18節)。これから形づくられようとしていた新しい家庭が崩壊してしまう危機に立たされたのです。マリアは聖霊によって身ごもったのですから、決してヨセフを裏切ったわけではありませんが、おなかが段々と大きくなっていく現実を目の前にしては、何の言い逃れもできないでした。ヨセフはマリアに裏切られた思いを拭いきれません。一方でマリアも、ヨセフが自分のことを正しく理解してもらえないという思いの中におかれていたのです。お互い信頼し合うことができない試練がふたりを苦しめていたのです。

②ヨセフは「正しい人」でした(19節)。「正しい」とは、どういうことでしょうか。普通は、曲がったことや間違ったことが嫌いな人、と理解することができそうです。しかし、もしヨセフがそのような意味で、正しさを貫くのなら、マリアを姦淫の罪で訴えなければいけません。そして、石で打たれて殺されてしまうかもしれないのです。ヨセフは、そのような意味での正しさを貫く道を選びませんでした。ではどうしたのでしょうか。「マリアのことを表ざたにするのを望まず、ひそかに縁を切ろうと決心した」(同節)とあります。婚約関係を解消すれば、マリアが身ごもって、子どもを産んでも、罪に問われることはないからです。ですから、これはヨセフのマリアに対する優しさ、あるいは精一杯の愛の現われとすることができそうです。この決断に至るまで、ヨセフは、相当悩み抜いたに違いありません。誰にも相談できず、夢に見るほどまでに悩み苦しんでいたのです。クリス

マスの出来事は、このようにヨセフの苦悩から始まったことを語っています。

③誰にも言うことのできない悩みや、誰にも見られたくない心の片隅にある恥ずかしい思いは、ヨセフだけではなく、私たちの中にもあるのではないのでしょうか。でも神さまは、そのなかで、御言葉を語り、私たちと出会ってくださいます。ヨセフも、天使からの語りかけをとおして、マリアを妻として迎えること。マリアは聖霊によって宿ったこと。そして、生れてくる子を「イエス」と名付けるようにという言葉聴きました。常識からすれば、自分を裏切ったとしか思えないマリアを妻として迎え入れ、生れてくる子の父となることを求めたのです。ヨセフは、主の言葉に対してどう答えたのでしょうか。24-25節を見ると、ヨセフは、天使が告げた神の言葉をそのまま受け入れたことが記されています。

④イエスは、「インマヌエル」と呼ばれます。「インマヌエル」とは、「神は我々と共におられる」という意味です(23節)。ヨセフが、インマヌエルの恵みを本当に知ることのできたのは、苦悩の中で、神さまの言葉を聴くことにおいてでした。ヨセフは、神さまから、マリアから生れてくるイエス・キリストを、我が子として受け入れるようにとの言葉を聴いて、そのとおりにしました。そのように、神さまは、私たちにも、信仰の決断を委ねておられます。「神が共におられる」ということは、何か漠然と信じることではありません。そうではなくて、主の言葉に応答していくことによってこそ、私たちは、神が共にいてくださるという恵みを深く知ることができるのです。



詩情豊かで神秘的な物語であるが、マタイは、ここでも神の約束の実現に焦点を置いており、神の約束の受け取り手が誰であるのかを語ろうとする。受け取り手は、驚くべきことに約束の民ではなく、異邦人の博士たちだったのである。先のヨセフでさえも、主の天使の介入がなければ、危うく受け取り手であることを失いそうになった。

〈神の約束の実現としての選びの器〉

博士たちの出身地の「東方」とは、ユダヤから見て「東方」であって、おそらくペルシャやバビロニアを指すのであろう。この「東方」の地は、約束の民イスラエルにとって忘れがたい捕囚の地であり、また遠くさかのぼると、カルデアのウルやニムロドの国という、まったくの異教の地・異邦人の地であった。神の救いの約束からもっとも遠く離れていたのが、この「東方の博士たち」だったのである。その地にいた彼らがユダヤの都エルサレムをどうしてもはるばる長い旅をして訪ねることになったのか、その理由は「その方の星を見、拝むために来た」と彼ら自身が語っていることに見出される(2)。旧約聖書の昔からの約束で、「メシアの星」のことが伝わっていたのか、また、バビロン捕囚の折にイスラエルの民から直接に聞いたのかもしれない。いずれにしても、博士たちは何とかしてメシアに会うことを心から渴望していたことは確かなことであろう。そうでなければ、途中に広大な砂漠のある危険で困難な旅に出発することはなかったであろう。

〈約束の民自身の冷淡と拒否〉

他方、エルサレムの都にいたヘロデ大王をはじめ、律法学者・祭司長・住民など約束の民は、わずか10kmも離れていないベツレヘムで生まれられたメシアを、訪ねることもお祝いすることもまったくしなかった。東方の博士たちが来訪して初めて、メシアの出身地を調査し確認する始末であった(4)。ここにマタイは、約束の民のメシア拒否という十字架の影を暗示するのである。メシアは約束の民のためにおいでになられたのに、そ

の約束の民はそのお方を認めようとしなかった。

それはまた、東方の博士たちの贈り物においても同様に示されている(11)。黄金と乳香は共に高価なものであり、高貴なお方への献げものとして相応しいものであったが、どうして没薬という埋葬の時に用いる品物が含まれていたのか、ここにもマタイの意図があると見さなければならぬ。

〈メシアと出会った博士たちの喜び〉

東方の博士たちが、冷淡な約束の民のいるエルサレムの地を去り、ベツレヘムの村里へただちに向かったのは想像に難くない。神は博士たちの願い求めをお聞きくださり、遂に救い主に出会うという大いなる喜びと祝福とをお与えになられた。神の約束からもっとも遠く離れていた彼らが、約束の受け取り手とされたのである。この彼らは、異邦人が神の救いの約束の受け取り手とされる、その前ぶれであり、予兆である。

彼らの喜びの中味は何か、それは、もちろん救い主に出会えたという喜びであるが、2章10節には、彼らは「救い主に会って」ではなく、「その星を見て」喜びにあふれたと注意深く述べられている。すでにメシアに会う前に「星を見る」ことによって与えられた喜び、それは、とりもなおさず信仰によってこそ救い主に出会えることを教えるものである。私たち罪人を真の救い主へと導き、そのお方に会わせるのは、神の御言葉に聞き従うという信仰によってのみである。彼らを東の国からずっとメシアに出会うまでに誤りなく導いた「星」とは、神の御言葉であり、その御言葉に聞き従う信仰によってのみ成された神の大いなる救いの御業であった。救い主を心から慕い求め、そのお方のみもとにひざまずいて私たちの持っているものをおさげする、その礼拝こそ、神様が喜んで受け入れてくださる本当の神への献げものにほかならない。(山下朋彦)

※第19号(2005年12月25日)より再掲載。

テキスト マタイによる福音書 2章1～12節
参照カテキズム 子どもカテキズム 問24、27

〔単元のねらい〕

神さまは、愛する独り子を私たちにお送りくださった。神さまが、愛する独り子を私たちにお送りくださったのは、私たちの身代わりとして十字架につけて、私たちの罪を赦すためだった。本日クリスマスは、何よりも、神さまから私たちへのかけがえのない贈り物が与えられていることをおぼえる日。子どもたちと一緒に、神さまの愛をおぼえて、神さまからの贈り物イエスさまを心から信じ受け入れ、御言葉に感謝して従う者でありたい。

「世界で最初のクリスマス・プレゼント」

愛するお友だち、メリー・クリスマス。クリスマスおめでとうございます。今年は、クリスマスが、神さまを礼拝する日曜日で、ドンピシャです。神さまを礼拝する日曜日に、教会で、イエスさまのお誕生をお祝いできて、本当に感謝です。

さあ、みんなは、もう、クリスマスのプレゼント、もらったかな？ もらったっていう人？ 今日、もらうっていう人？ 普通、クリスマスのプレゼントは、昨日のクリスマス・イブにもらうのかな？ 今日、日曜学校では、このクリスマス礼拝式をした後、お祝い会をして、最後にお楽しみプレゼントがありますから、楽しみにしていてね。

さて、みんな、世界で、最初のクリスマス・プレゼントって、何か知っているかな？ 実は、さっき読んだ聖書の中に書いてありました。それは、東の国からはるばるユダヤの国へとやって来た占星術の博士さんたちが、イエスさまにお献げた黄金、乳香、没薬なのです。「宝の箱を開けて、黄金、乳香、没薬を贈り物として献げた」(2:11)って書いてあるように、とても高いものをイエスさまにお献げしました。この黄金、乳香、没薬が、世界で最初のクリスマス・プレゼントと言われていきます。

ところで、この博士さんたち、どうして、イエスさまにクリスマス・プレゼントをお献げしたのでしょうか？ そこで、どうして、この博士さんたちがはるばる砂漠を越えて遠い遠いユダヤの国ま

でやって来たのか、その理由がこのように書いてあります。

「ユダヤ人の王としてお生まれになった方は、どこにおられますか。わたしたちは東方でその方の星を見たので、拝みに来たのです。」(2:2)

たぶん、東の国で、星の観察をしている時に、ユダヤ人の新しい王さまの星を発見したのだと思います。王子さまならば、ヘロデ王のいるエルサレムのお城でお生まれになったのだらうと思って、まず、博士さんたち、エルサレムのヘロデ王のところに行きました。ところが、ヘロデ王も、聖書の専門家の祭司長さんとか律法学者さんも、また、エルサレムの町の人たちも誰も知らないの。そんな時、祭司長さんたちが聖書を調べてみると、『ミカ書』という所にこういう神さまのお約束が書いてあるのを見つけました。

「ユダの地、ベツレヘムよ、お前はユダの指導者たちの中で、決していちばん小さいものではない。お前から指導者が現れ、わたしの民イスラエルの牧者となるからである。」(2:6)

ユダヤ人の新しい王さまは、ベツレヘムでお生まれになると約束されていたの。それで、早速、ヘロデ王は、博士さんたちをベツレヘムにやって、王子を捜し出すように命じました。博士さんたちが、ベツレヘムに向かって出発すると、不思議なことに、ユダヤ人の新しい王さまの星が道案内をしてくれて、無事に幼子イエスさまのところに着

くことができたというわけ。

さあ、博士さんたちがイエスさまに黄金、乳香、没薬をお献げしたのは、神さまがお約束の通りに、ユダヤ人の新しい王さまをお与えくださったからなのです。もっと言うと、神さまは、お約束の通りに、ユダヤ人だけでなく、世界中の人たちを優しく治めてくださる新しい王さまをお与えくださったからなのです。それが、みんなの罪からの救い主イエスさまなのです。そうすると、神さまが、みんなの罪からの救い主イエスさまっていう、とても素敵なプレゼントをお与えくださったので、博士さんたちは、そのお礼に、感謝のプレゼントとして、イエスさまに黄金、乳香、没薬をお献げしたっていうことになります。そうなのです。実は、黄金、乳香、没薬が、神さまへのお礼のプレゼントならば、みんなへの世界で最初のクリス

マス・プレゼントは、イエスさまということになります。私たちが罪から救われて、幸せに生きることができるようにって、神さまがお贈りくださったイエスさまが、実は、世界で最初のクリスマス・プレゼントっていうことになります。

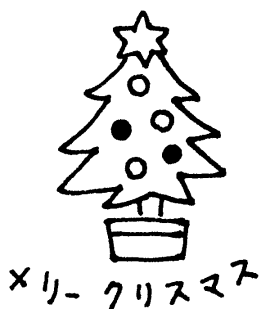
神さまが、罪からの救い主イエスさまっていう、とても素敵なクリスマス・プレゼントをお贈りくださいました。そんな神さまへのお礼のプレゼントとして、一番、神さまが喜ばれるプレゼントって何か知ってる？ それは、みんなへの素敵なプレゼント、イエスさまを信じて、イエスさまのみ言葉、特に聖書のみ言葉に喜んで従うことなのです。そういうようにして、みんながいつも神さまと一緒にいることを神さまはとても喜んでくださることをおぼえましょう。

(長谷川潤)

〔今週の暗唱聖句〕 ヨハネによる福音書 3章16節

神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。

独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。



〈ねらい〉

神さまは、イエスさまの誕生を東方の学者たちに告げられた。あらゆる悪の支配をまぬがれて、一つの星に導かれた、学者たちの信仰と、主の導きを覚えつつ、主とともに礼拝しよう。

〈展開例〉

みなさん、クリスマスおめでとう。今日は、イエスさまのおたんじょうをいっしょにお祝いしましょう。

イエスさまがお生まれになった日は、ひつじかいたちが、一番にお祝いにかけつけました。そして、東のくにのはかせたちにも、神さまは、星のしるしによって、救い主のおたんじょうを教えてくださいました。一つの大きくひかりかがやくほしにみちびかれて、はかせたちは、イエスさまのおられるベツレヘムについて、おうごん、にゆうこう、もつやくをささげて、イエスさまをれいはい

しました。

ヘロデというわるい王さまは、はかせたちに、イエスさまをいっしょにおがみたいから見つけたら知らせてくれ、言っていましたが、ほんとうは、イエスさまを殺すつもりでした。ゆめで、はかせたちは、ヘロデのころの中をつげられたので、ヘロデのところに行かないで、自分たちのくにへかえっていきました。そうとしたヘロデは、小さな男の子をみなごろしにしまいました。

みんなも、イエスさまにまもられて、今日のクリスマスをころからおいおいしましょう。

〈お祈り〉

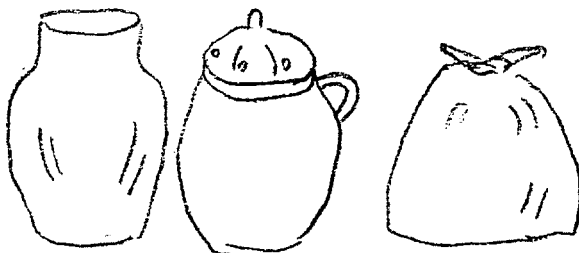
天の父なる神さま、み名をさんびします。イエスさまにまもられて、クリスマスをお祝いできて、ありがとうございます。イエスさまのみ名によって、おいのりします。アーメン。

〈やってみよう〉

○いえすさまへのささげもの

いろをぬり、きりとりましょう。

18日につくったあかちゃんイエスさまに おうごん、にゆうこう、もつやくを ささげましょう。



ねらい

ユダヤ人以外の東方の国の人々が、不思議な星を観察し、自然現象の変化に気づいて、クリスマスのお祝いに駆けつけた。全世界を救う神の御子の誕生を知らせる。自然研究によって神様のことを知る道もある。星や太陽や月も神様の作品である。

展開例

らくだにまたがってはるばる遠い国からイエス様の誕生を祝うために旅を続けた物語は、子どもの想像力を膨らませる。アメリカの教会学校で、本物のらくだを教会に連れてきた例もあるそうである。クリスマスの印象を強める演出として工夫できればと思う。

ページェント風に子ども賛美歌を歌いながら演じてみるのもよい。プレゼントを贈る場面などを強調してもよい。

話し合ってみよう！

世界中でクリスマスを祝っていることについて語りあってみよう。

祈り

世界中のお友達とクリスマスをお祝いできてありがとうございます。

1週間のミニ日記 ～

神様が私たちと同じ人間になって、一緒にいてくださる幸福を味わえるように、過ごしてみよう。



お祈りしたいこと



クリスマスに一番何を祈ったらよいか、考えてみよう。

聖書日課

マタイによる福音書 2章 1-12節

暗唱聖句

神は、その独り人子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。

(ヨハネ 3:16)



✠聖書をひらいて(マタイによる福音書2章1～12節)

コ	/	カ
デ	ヘ	ト
ロ	エ	ル

<解読書>

☆問題：暗号文を、解読表を使って読んでください。

<暗号文> □ □ □ □ □
 □ □ □ □ □ □ □

な！

✠考えてみよう

☒ 占星術の学者って、星占いをする人ですか？神さまは、神さまをまだ信じていない人も、みちびかれるのですか？
 (星占いが気になるKちゃん・10才)

✠言ってみよう

問 27 イエスさまの王としてのお働きは何ですか？

私たちの王さまとなってください。弱い私たちが悪に滅ぼされないように〇〇〇〇、私たちを従わせ、〇〇〇、〇〇〇〇くださいます。この王さまこそ真の王さまです。ですから、私たちは心をこめて〇〇〇〇ます。

✠やってみよう —日本で最初にクリスマスのお祝いをしたのは、いつ？—

1566年、三好義継と松永久秀という人が戦いをしようとしていた時、両軍のキリシタンの武士が、たがいにクリスマスを祝おうと話合ったんだって。両軍から数十人のキリシタン武士が集まって、神さまを礼拝し、持ち寄った料理を食べ、賛美歌を歌ったりしてすごしたそうです。今日は降誕祭です。イエスさまをお与えくださった神さまに感謝して、賛美と祈りと献金をおさげしましょう。

✠今週の暗唱聖句(ヨハネによる福音書3章16節)



神は、そのひとりごをおあたえになったほどに、世を愛された。ひとりごを信じるものが一人もほろびないで、永遠の
 □ □ □ を得るためである。

〈展開例〉

①東方の3人の占星術学者たちは、毎晩のように美しく輝く星空を眺めていたのではないのでしょうか。残念ながら、私が住んでいる所は（大阪府堺市）、都会の工業都市で星がきれいに見えません。ですから、長い間、この町の夜空には星は見えないと思い込んでいました。しかし、ある時、夜に散歩をしていて、ふと夜空を見上げると綺麗な星だけではなく、流れ星をも見る事ができました。自分の上には、自分を照らす希望の光など輝いているはずはないと思い込んで、下ばかりを見てしまっていることがあるかもしれません。しかし、あなたを照らす希望の星は、いつも輝いています。神は、どのようなときもいつもあなたを照らしてくださるとの祝福をまず覚えましょう！

②占星術とは（1節）、今日で言えば、「星占い」に少し似ているかもしれません。テレビや雑誌、インターネットで毎日のように、至るところで、占いが取り上げられています。もしかすると軽い遊び感覚で、楽しんでいる人もいると思います。それは、教会外の話ではなく、教会内においても子どもたちがよく話題にすることがあります。遊び感覚とはいえ、その奥には、深い人間の叫びのようなものがあるのではないのでしょうか。つまり、自分の人生を確かなかちで「説明」してくれる言葉を誰もが求めているのです。たとえ、自分の身に起きた辛い出来事も「運命」や「宿命」というひとことで、慰めをも得てしまうのです。しかし、占いは、明らかに神の摂理を信じる信仰と相反するものです（ウ小11、ハイデルベルク27などを参照）。

③3人の学者たちは、宝の箱を開けて「黄金、乳

香、没薬」（11節）をそれぞれ主に献げました。それらは彼らにとっての商売道具でした。これがなければ生きて行くことができない大切なものだったのです。しかし、それらを献げたということは、それ以上に大切な本当の宝を手に入れることができたということです。それは自分で手に入れたというよりも、神さまが与えてくださった贈り物だったのです。私たちが成長するということは、年齢に関係なく、大切なものを見つける旅に出るということでしょう。いや既に、その旅路の中にあるはずです。その旅路の中で、自分はこれがないと生きていけないというものを、まだ見出せなかったり、夢半ば諦めなければいけなかったり、あるいはせっかく手に入れたのに、失わなければいけなかったり…。しかし、クリスマスに神さまが与えてくださるプレゼントは、私たちの今までの生き方を転換させます。本当の宝とは、神さまが私という存在を、なくてはならない宝として大切にしてくださることに気付くからです。そのことがキリストにおいて明らかにされたのです。

④だから、主イエスにお会いした3人は、「別の道」（12節）を通して帰って行ったのです。ヘロデ王ではなく、まことの王であられる神さまに従うこと、神さまから自分たちは大切な宝とされていることを感謝する道を進んだのです。救いから一番遠いとされていた東方の人（異邦人）に救いの光が輝いたように、神さまは自分なんか見ておられないと諦めている者たちにも、救いの光は届きます。いや、既にあなたの上に輝いているのです。この祝福の中で、私たちもイエス・キリストを信じる信仰の道を進む決意を新たにいたしましょう！



〈小学科上級展開例の答えの参考〉

- 10/2 「神は来て、あなたたちを救われる」(イザヤ35:4)、問25(みことば)
10/9 「貧しい人に良い知らせを伝えさせるために」(イザヤ61:1) 問25(みことば、みことば)
10/16 問66(めぐみ、しゅだん)
10/23 主キリスト、問36(えいえん)
10/30 いつくしみは とこしえに、問64(イエスさま、つみびと)
11/6 問81(みこころ、ききしたがう)
11/13 ヨコ①おさなご ②にゆうわ ③けんそん ④くびき ⑥なごや
タテ①おもに ②やすらぎ 問1(知り、よろこび、あらわす、よろこび)
11/20 あなたがたは、これらのことが みなわかったか」でしたちは、「わかりました」といった。
問1(知り、よろこび、あらわす、よろこび)
11/27 「それをここに持って来なさい」(マタイ14:18)
「すべての人が食べて満足した」(マタイ14:20) 問82(たべもの、たよらせて)
12/4 異邦人の救い 問29(えらんで)
12/11 ヒトリゴ・ 問22(かみさま、ひと)
12/18 「この子は自分の民を罪から救うからである」(マタイ1:21)
問23(イエス、キリスト、イエス、キリスト)

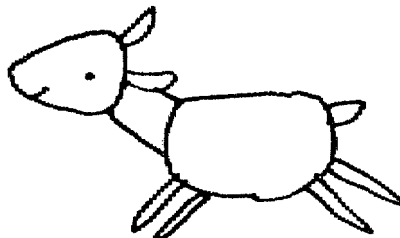
マリアのところにも、ヨセフのところへも主の天使が夢に現れましたね。

イエスさまの御降誕には、天使も大切な働きをします。Pちゃんも、天使が現れるのを楽しみにしているのですね。天使は、多くは天において仕えています。しかし、神さまの救いの歴史の重要な部分において(荒野の誘惑、ゲッセマネの祈り、復活の朝、使徒たちの伝道etc)天から遣わされます。そのような、救済史に関わる重要な時ということ覚えておいてね。

12/25「ヘロデノトコロヘカエル」な! 問27(たたかい、おさめ、したがい)

占星術の博士たちは、おそらく、ペルシャ・バビロニア地方に住んでいた異教の地の民、異邦人でした。星占いをして、多神教の神の中で生活していたのかもしれません。しかし、神さまは、そのような異教の地の民をも眼に留められていました。異邦人が神の救いの約束の受け取り手とされる前ぶれでもありました。彼らは、「メシアの星」を見たとき、ためらうことなく何千kmもの長旅にでました。広大な砂漠、厳しい自然環境、危険を承知で、「メシアの星」に従ったのです。イエスさまに出会った彼らは、別の道を通して帰りました。かれらは、真の神さまを礼拝する民となったのです。

大切なことは、信じ、従い、方向転換(生き方を変えること)をして、礼拝をささげることです。



2012年1～3月カリキュラム（第44号）

—救済史に基づく二年サイクルカリキュラムの二年目—

月 日 教会暦・行事	主 題	聖 書 箇 所	暗 唱 聖 句
	単 元 の 目 標		
1月1日 新年	ペトロの信仰告白	マタイ 16:13－20	詩編 62:7a
	天の父から与えられた信仰を喜び、告白することへ励まそう		
1月8日	死と復活の予告	マタイ 16:21－28	コリントー 1:18
	信仰を自分の信念にしていまい、キリストの上に立とうとする罪を捨てよう		
1月15日	天の国でいちばん偉い者	マタイ 18:1－5	マタイ 18:4
	子どものように無力なものを引き上げてくださる神の恵みを喜ぼう		
1月22日	「ぶどう園の労働者」のたとえ	マタイ 20:1－16	マタイ 11:28
	分け隔てなく、同じように神の国に招く、神の決意を喜ぼう		
1月29日	エルサレムのために嘆く	マタイ 23:29－39	詩編 51:6
	神に反抗する人々の不幸を嘆いて十字架へとおもむく主イエスの愛を知ろう		
2月5日 (11信教の自由)	神殿の崩壊の予告	マタイ 24:1－14	エフェソ 6:11
	キリストを神として生きる信仰の戦いに約束された、勝利を信じよう		
2月12日	目を覚ましていなさい	マタイ 24:36－44	マタイ 7:24, 25
	ノアの信仰にならい、再臨のキリストを待ち望み、信じて備えよう		
2月19日 (22- レント)	「十人のおとめ」のたとえ	マタイ 25:1－13	マタイ 7:21
	日々、御言葉に聞き、主との交わりに生き、信仰のともし火をともし続けよう		
2月26日 レント	タラントンのたとえ	マタイ 25:14－30	マタイ 25:29
	すべては主なる神から与えられたもの。感謝して受け、喜んでささげよう		
3月4日 レント	過ぎ越しの食事・主の晩餐	マタイ 26:17－30	コリントー 5:7
	神の小羊として自らを献げる主イエスが新しい契約の食卓へと招いておられる		
3月11日 レント	ゲツセマネの祈り	マタイ 26:36－46	マタイ 26:39
	祈りにおいてわたしたちの苦しみを背負われた主イエスをいつも見つめよう		
3月18日 レント	ペトロの裏切り	マタイ 26:69－75	マタイ 26:75
	独りよがりのキリスト理解を打ち砕き、悔い改めへと導く主イエスを仰ごう		
3月25日 レント	死刑判決	マタイ 27:15－26	マタイ 27:26
	キリストの裁きをとおしてわたしたちの罪を知り、愛の神を仰ごう		

2011年度 年間カリキュラム

(2011年4月～2012年3月)

二年サイクル聖書物語の第二年

	月 日	教会暦・行事	主題	
2011年 第41号	4月3日	レント・進級式	悪霊を追い出すメシア	マタイ8:28－34
	4月10日	レント	罪を赦すメシア	マタイ9:1－8
	4月17日	受難週主日	十字架のキリスト	マタイ27:45－56
	4月24日	復活祭	キリストの復活	マタイ28:1－10
	5月1日		ギデオンの召命	士師6章
	5月8日	母の日	ギデオンの精鋭	士師7章
	5月15日		ささげられるサムソン	士師13章
	5月22日		サムソンの祈り	士師16章
	5月29日		ナオミとルツ	ルツ1章
	6月5日		ルツとボアズ	ルツ2章（～3章）
	6月12日	聖霊降臨・花の日	聖霊の降臨	ヨエル3章
	6月19日	父の日	サムエルの召命	サムエル上3章
	6月26日		サウルの召命	サムエル上9・10章
第42号	7月3日		ダビデの召命	サムエル上16章
	7月10日		ダビデとゴリアト	サムエル上17章
	7月17日		ダビデとヨナタン	サムエル上20章
	7月24日		ダビデへの契約	サムエル下7章
	7月31日	(平和)	平和があるように	詩編122編
	8月7日		逃げ出したヨナ	ヨナ1章
	8月14日		魚の腹の中のヨナ	ヨナ2章
	8月21日		ニネベで宣べ伝えるヨナ	ヨナ3章
	8月28日		とうごまの木とヨナ	ヨナ4章
	9月4日		ソロモンの知恵	列王上3:4－15
	9月11日		ソロモンの偶像礼拝	列王上11:1－13
	9月18日	(19敬老の日)	バアルと対決するエリヤ	列王上18:16－45
	9月25日		バビロン捕囚	歴代下36:11－23

年・号	月 日	教会暦・行事	主題	
第43号	10月2日		回復の約束	イザヤ35章
	10月9日		解放の告知	イザヤ61:1-4
	10月16日		新しい契約	エレミヤ31:31-34
	10月23日		主の日が来る	マラキ3:19-24
	10月30日	宗教改革記念日	旧約の歴史を振り返る	詩編106編
	11月6日		弟子の派遣	マタイ9:35-10:4
	11月13日		主イエスによる平安	マタイ11:25-30
	11月20日		「天の国」のたとえ	マタイ13:44-52
	11月27日	アドベント	五千人の給食	マタイ14:13-21
	12月4日	アドベント	カナンの女の信仰	マタイ15:21-28
	12月11日	アドベント	わたしたちの間に宿られた神	ヨハネ1:14-18
	12月18日	アドベント	ヨセフへの告知	マタイ1:18-25
	12月25日	クリスマス	東方の学者たち	マタイ2:1-12
2012年	1月1日	新年	ベトロの信仰告白	マタイ16:13-20
第44号	1月8日		死と復活の予告	マタイ16:21-28
	1月15日		天の国でいちばん偉い者	マタイ18:1-5
	1月22日		「ぶどう園の労働者」のたとえ	マタイ20:1-16
	1月29日		エルサレムのために嘆く	マタイ23:29-39
	2月5日	(11 信教の自由)	神殿の崩壊の予告	マタイ24:1-14
	2月12日		目を覚ましていなさい	マタイ24:36-44
	2月19日	(22- レント)	「十人のおとめ」のたとえ	マタイ25:1-13
	2月26日	レント	タラントンのたとえ	マタイ25:14-30
	3月4日	レント	過ぎ越しの食事・主の晩餐	マタイ26:17-30
	3月11日	レント	ゲツセマネの祈り	マタイ26:36-46
	3月18日	レント	ベトロの裏切り	マタイ26:69-75
	3月25日	レント	死刑判決	マタイ27:15-26

〈執筆よりひとこと〉

●イエスさまの恵みが幼い子たちのうちに注がれますように。(芸陽教会日曜学校)

●分級の教案は全くの一例です。各教会学校の生徒のニーズは異なりますので、そのニーズに応えることが先決です。生徒の話を聞いて、お祈りして終わるで良いと思います。あくまでヒントですので、よろしくお願いします。

(青葉台キリスト教会教会学校)

●教会でも上級クラスを担当しています。子どもたちの顔を思いながら、準備しました。(相馬直子)

●イエスさまとつながって、実り豊かな歩みを続けていきましょう！(藤井 真)

●弊誌は、説教の完全原稿を掲載します。ところが、本人の実践は、ほとんどこの原稿から離れてしまいます……。皆様にも、展開「例」として、ご参考になればと願うのみです。(相馬伸郎)

●今年も夏期のキャンプなど、主の恵みの下で無事に終了しました。今さらながら、キャンプにおける教案の大切さを思わされつつ、教案誌に求められている使命を考えさせられています。

(辻 幸宏)

〈購読の申し込み〉

●『教会学校教案誌』をぜひご購入ください。また、別冊『子どもカテキズム』(300円)をぜひお買い求めください。バックナンバーもあります。第36号までは一部500円で販売しています(品切れの号もあり)。

●教案誌購読受付と送付は大垣伝道所の辻幸宏教師が担当しています。お求めは下記までご連絡ください。副読本『主は羊飼ひ』(800円)のお買い求めも下記までお願いします。

大垣伝道所 辻幸宏まで

〒503-0996 大垣市島町283

Tel/Fax. 0584-91-3538

E-mail: yukihiro.tsuji@nifty.ne.jp

〈あとがき〉

●今回も『教会学校教案誌』をお届けできますことを、神様と読者の皆様に心からの感謝を申し上げます。

●今号には、昨年、東部中会で開催された「教会教育研修会」の基調講演と発題を掲載させていただきました。多くの示唆を与えられるものであると思います。信仰の継承のために、取り組むべきことが多くあることを教えられます。各教会での取り組みに主なる神の祝福が豊かであるようお祈りいたします。

●奉仕者どうしの交わりの場、情報交換の場として用いられたい……。編集部の切なる願いです。日本キリスト改革派教会は、中会主義に立つ教会です。各教会・伝道所の教会形成、伝道に最善の結実をもたらす聖書に即した教会統治のあり方であると信じています。ただし、うっかりすると弊害の罠に陥ります。その一つは、他中会の情報がなかなか入りにくくなってしまうことです。同感の方は、ぜひ、この殻を打ち破ってご意見、情報、証、なんでもお気軽にお寄せ下さい！個人と各教会の賜物が全体の益になりますように！教会学校教案誌が、少しでも御教会と皆さまのお役に立てますように……。お祈りとご支援とをこれからもよろしくお願いいたします。

●「信仰の証」を募集しています。受洗・信仰告白の証を分かち合うことにより、互いに励まし合うことを目指しています。教会で受洗者・信仰告白者がおられましたら、ぜひご連絡ください。

●日本キリスト改革派教会の聖書日課『リジョイス』の「いのちのパン」についても、ご意見をお寄せください。教案誌編集部より提供させていただきます。それぞれの家庭で、また教会で、祈りの場が祝福されるよう願って取り組んでいます。

●様々なご意見、情報をお気軽に編集部までお寄せください。弊誌は、皆さまのものです。皆さまに奉仕することこそ、その使命、目標です。今後とも宜しくお願い致します。

●Soli Deo Gloria!

☆ 執 筆 者 一 覧 ☆

まえがき

山中雄一郎（板宿教会牧師）

巻頭説教

塩田隆良（東京恩寵教会協力牧師）

教会学校・日曜学校訪問

小林義信（銚子栄光教会牧師）

特別寄稿

鈴木牧雄（湘南恩寵教会牧師）

北岡修二（いずみ教会長老）

聖書研究

牧野信成（西神伝道所協力牧師）

相馬伸郎（名古屋岩の上传道所宣教教師）

小野静雄（多治見教会牧師）

後藤公子（神戸改革派神学校講師）

安田恵嗣（元教師）

袴田清子（園田教会会員）

西堀則男（岐阜加納教会牧師）

山下朋彦（平和の君伝道所宣教教師）

説教展開例

二宮 創（太田伝道所宣教教師）

辻 幸宏（大垣伝道所協力牧師）

牧野信成（西神伝道所協力牧師）

相馬伸郎（名古屋岩の上传道所宣教教師）

木下裕也（名古屋教会牧師）

望月 信（高蔵寺教会牧師）

長谷川潤（四日市教会牧師）

分級展開例

幼稚科 芸陽教会教会日曜学校

小学科下級 青葉台キリスト教会教会学校

小学科上級 相馬直子（名古屋岩の上传道所
子どもの教会）

中学科 藤井 真（堺みくに教会牧師）

イラスト作画

表紙 田口裕美（尾張旭教会）

本文 岡野美佳（青葉台教会）

☆ 編 集 部 ☆

相馬伸郎（長） 名古屋岩の上传道所宣教教師

木下裕也 名古屋教会牧師

辻 幸宏 大垣伝道所協力牧師

長谷川潤 四日市教会牧師

二宮 創 太田伝道所宣教教師

望月 信 高蔵寺教会牧師

日本キリスト改革派教会 中部中会『教会学校教案誌』

2011年10・11・12月号（季刊）

第43号

2011年8月28日発行

発行	日本キリスト改革派教会 中部中会 日曜学校委員会
発行所	日本キリスト改革派教会 中部中会 教会学校教案誌編集部 名古屋岩の上传道所 宣教教師 相馬伸郎 〒458-0021 愛知県名古屋市緑区滝の水2-2012 Tel/Fax. 052-895-6701
郵便振替口座	00890-2-148183「伊藤治郎」
編集・印刷	株式会社あるむ
頒価	900円（本体価格）
